

ふ話を岸本にして聞かせた。漸くのことゝ三人は船に間に合つた。知らない佛蘭西人ばかりの乗客の間に陣取つて種々親しげに言葉を掛ける夫婦と一緒に腰掛けた時は、岸本に取つて肩身が廣かつた。

「セエヌの水は何時でも斯様に静かでせうか。」

「大抵斯様です。毎朝私は斯の船で図書館通ひをして居ます。夏の朝はなか／＼好うござんすが、晩も悪くはありませんね。」

岸本と書記とが暗い静かな河景色を眺めながら話して居る傍で、細君は女持の手提鞆を膝に乗せて二人の話に耳を傾けた。

斯のビョンクウルの書記には著述もあつた。その家に半ばを分けて來た植物の種子は岸本が國を出る時にあの中野の友人等から贈られたのだ。岸本は残りの半ばを植物園の近くに住むといふ教授の許へも分けるつもりで、これから書記夫婦と共に見に行かうとする教授の人となりも想像した。その晩の茶の會に集まらうとする未知の人々をも想像した。

## 六十一

ギイ・ド・ラ・ブロッツといふ町にある教授の家の茶の會から岸本が下宿の方へ歩いて歸つて行つた頃は大分遅かつた。彼の胸は初めて佛蘭西の家庭を見、未知の人々に逢つた其日のことで満たされて居た。恐ろしく巖疊なアーチ形に出來た家々の門の前には遅く歸つた人達が立つて、呼鈴の引金を鳴らして居た。家番もぐつすり寝込んだ時分であつた。

暗い階段を上つて下宿の戸を開けると、皆もう寝沈まつて居た。廊下の突當りにある自分の部屋へ行つてからも、岸本は直ぐには寢臺に上らなかつた。部屋を明るくした古めかしい洋燈に對つて見ると、「巴里へは何時御着きに成つたのです、何故もつと早く訪ねて來て呉れないのです」と快く爽やかな調子で言つたブロッツの教授の聲はまだ彼の耳について居た。印度研究に關した藏書の類が澤山置並べてある書齋の中で、まだ大學へでも通つて居るらしい青年の方へ彼を連れて行つて、「伴に

も一つ逢つてやつて下さい』と言つたあの教授の聲も。それから彼が旅のしるしとして贈つた銀杏の實などを教授は別の部屋の方へ持つて行くと、茶に招かれて来て居た若い教授の細君らしい人達が集つて、皆なで一緒にその粒の揃つた東洋植物の種を眺めながら『まあ、植ゑてしまふのは惜しい、斯うして見て居たい』と言つたあの女らしい人達の聲も。彼はこの異郷に来て智識階級に屬するそれらの人達とは程熱い握手を交し得るとは思ひもかけなかつた。あのビオンクウルの夫婦が河蒸氣や電車の切符まで彼には拂はせなかつた程の心づくしも、全く彼の豫期しないことであつた。敏感で優雅なビオンクウルのお母さんも彼が初めて逢つて見た舊い佛蘭西の婦人をいかにも好く表したやうな人であつた。髪は最早白いほどの年頃ながら眼には青年のやうな輝きを見せた教授、素朴でそして男らしく好ましい感じのする書記、彼は眠りに就かうとして壁の側の寢臺に上つてからも、それらの人達から受けた最初の好い印象を考へて、この温かい親切は長く忘れられまいと思つた。

しかし朝になつて見ると、初めて逢つた人達の感じが好かつた丈、それだけ旅人としての物足らなさが岸本の胸に忍び込んで来た。彼は皆の言つた事を考へて見て、ボンヤリしてしまつた。外國人は何處までも外國人で、物の皮相にしか觸れることの出来ないやうな物足らなさがその最初の好い

印象と一緒になつて起つて来た。

佛蘭西に居る頃から人に頼んで日本の髪に結つたといふマドマゼエルのことが、しきりと岸本の胸に浮んだ。それほど強烈な異國に對する憧憬の心を以てしても、佛蘭西を捨て去つたマドマゼエルが何程まで日本人の心の奥を汲み知ることが出来るであらうか、と左様彼は想像して見た。彼はあの日本の着物を着て疊の上に座つて居るマドマゼエルに、洋服を着て椅子に腰掛けて居る自分の旅の身を思ひ比べた。

『結局、自分は藝術に行くの外はないかも知れない。藝術によつて、この國の人の心に觸れるの外はないかも知れない。』

この考へは岸本の心を驅つて一層言葉の稽古の方へ向はせた。

旅に来て五月目に、岸本は新たに父になつたことを國の方からの便りによつて知つた。亡くなつた三人の女の兒を入れて數へると、最早彼は七人だけの親ではなかつた。園子との間に設けたおもてむきの子供の外に、知らない子供が一人何處かに生きて居た。彼は極印でも打たれたやうな額を客舎の硝子窓のところへ持つて行つて、人知れずそのことを自分に言つて見た。

義雄兄からの便りには、『例の人』は産後の乳腫で手術を受けさせるから、その費用を送れとしてあつた。それから一月半ばかりも待つうちに節子は精しいことを知らせてよこした。産は重くて骨が折れたが男の子が生れたと彼女の手紙の中に書いてあつた。彼女はこまなくと書いてよこした。こんなにお産が重かつたのは身體を粗末にして居た爲であらう。自分はその事を人から言はれたと書いてよこした。自分は僅かに一目しか生れたものゝ顔を見ることを許されなかつたと書いてよこした。この田舎に住む子供の無い家の人から懇望されて、嬰兒は直ぐに引取られて行つたと書いてよこした。例の親切な女醫が來ての話に、『あなたのやゝさんは、それはよくあなたのお父さんに似て居ますよ』と言つて笑つて話して呉れたと書いてよこした。その田舎に住む坊さんが名づけ親になつて親夫といふ名を命じて呉れた——實はその名は坊さんが自分の子に命けるつもりで考へて置いたとかいふのを讓つて呉れたのだと書いてよこした。生れたものゝ貫はれて行つた先で、どうかし

て斯の子のお母さんの苗字だけでも明して欲しい、それを明すことが出来なければ東京の何の邊か——せめて方角だけでも明して欲しいとのことであつたが、それだけはお断りすると言つて、女醫の方で明さなかつたと書いてよこした。定めしお父さんの方からの知らせが行つたことと思ふが、自分の乳が腫れ痛んで、捨て、置く譯にはいかないと言はれて、切開の手術を受ける爲にしばらく女醫の方へ行つて居たと書いてよこした。どうもまだ自分の身體の具合は本當でないから、今しばらく斯の産婆の家の二階にとどまるつもりであるが、出来るだけ早くこゝを去りたいと思ふと書いてよこした。つくづく自分はこの二階に居るのが恐ろしくなつた、何事につけてもこゝはお金お金で地獄にあるやうな思ひをすると書いてよこした。このお産のために自分の髪は心細いほど抜けた、この次叔父さんにお目にかゝるのも恥かしいほど赤く短く切れてしまつたと書いてよこした。

この節子の手紙を読んで岸本は心から深い溜息を吐いた。彼はいくらか重荷をおろしたやうな氣がした。しかしそのために、一度つけてしまつた生涯の汚點を打消すべくもなかつた。埋めやうとすればするほど、餘計に罪過は彼の心の底に生きて來た。彼は多くもない旅費の中を割いて節子が身二つに成るまでの一切の入費に宛て、來たし、外國から留守宅への仕送りも缺かすことは出来なかつたし、義雄兄から請求して來た節子の手術に要する費用も負擔せねば成らなかつた旅も容易でな

かつた。それにも關らず、彼は行けるところまで行かうとした。

## 六十三

東京高輪の留守宅の方に節子を隠して置いて嫂の上京も待たずに旅に上つて来た心持から言つても、義雄兄に宛てた一通の手紙を残して置いて香港を離れて来た心持から言つても、岸本は再び兄夫婦を見るつもりで國を出たものではなかつた。節子は旅にある叔父に便りする事を忘れないで、彼女が郡部にある片田舎から高輪の方へ戻つた時にも精しい手紙を送つてよこしたが、その便りが岸本の手許へ着いた頃は、最早ノエル（降誕祭）の季節の近づく年の暮であつた。異郷で初めて逢ふ正月、羅馬舊教國らしいカアナバルの祭、その肉食の火曜も、ミ・カレエムの日も、彼の旅の心を深くした。彼の下宿には獨逸のミュウニツヒの方から来た慶應の留學生を迎へたり、瑞西の方へ行く人を送つたりしたが、それらの人達と連立つてルエキサンブルの美術館を訪ねた時でも、ガボオ

の音楽堂に上つた時でも、何時でも彼は心の漂泊者としてゝあつた。

『人はいかなる境遇にも慣れるもので、それがまた吾儕に與へられたる自然の恵みである』と言つた人もあつたとやら。ある人はまた、『慣れるといふことほど恐ろしいものは無し』とも言つたとやら。岸本はその二つの言葉の意味に籠る兩様の氣質と眞實とを味ひ知つた。所詮彼とても慣れずには居られなかつた。そして高い建築物も左程氣に成らず、往來も平氣で歩かれ、全く日本風の疊といふものも無い部屋に一日腰掛けて暮せる頃は、自分の髪の毛色の違ひ、自分の皮膚の色の違ひを忘れる時すらあるやうに成つた。不思議にも、外界の事物に對して是程彼が無頓着に成つたと同時に、外界の事物もまた彼に對して無頓着に成つた。彼は自分の部屋の窓の下を往來する人達と全く無關係に生きて行く異邦の旅人としての自分の身をその客舎に見つけた。あだかも獄裡に繋がる、囚人が全く娑婆といふものと縁故の無いと同じやうに。

恐ろしい町の響が岸本の耳につくやうに成つた。一切刺激から起る激しい感覚が沈まつて行くにつれ、左様した響がハツキリと彼の耳に聞えて来た。劍のやうに尖つた厳めしく頑固な馬具を着け、眞鍮の金具を光らせた幾回かの馬が大きな荷馬車を引いて行く音、モン・トオロン行の乗合の自動車の通ふ音、並木街を往復する電車の音、其他石造の街路から起る町の響が、高い建築物の間に響

けて、岸本の部屋の硝子窓に揺れるやうに傳はつて來た。それを聞くと遽かに故國も遠くなつた。彼はそろ／＼外國生活の無聊がやつて來たことを感じた。苦難はもとより彼の心に期するところであつた。どんなにでもして彼は耐へがたい無聊と戦はねば成らなかつた。そして心の漂泊を續けねば成らなかつた。

## 六十四

復活祭も近づいて來て居た。東京の留守宅へ戻つて行つてからの節子は折ある毎に泉太や繁のことを書いて、それに彼女の境遇を訴へてよこした。岸本はあの片田舎の家の方から品川の停車場まで歸つて來て、そこで迎への嫂と一緒に成つたといふ時の彼女を想ひやることも出來た。彼女の母にも姉の輝子にも男の子の生れて居る高輪の家へもう一度歸つて行つた時の彼女を想ひやることも出來た。多くの知人や親戚から祝はるゝ姉の子供に比べて、誰一人願うものもない彼女に生れた子供

こそ其實この世に幸福なものであると言つてよこした彼女の女らしい負惜みを思ひやることも出來た。あの事があつてから父は別の人かと思はれるほど彼女に優しく、叔父さんから父宛に來た手紙もこつそり彼女の机の上に置いて呉れるほどの人になつたと言ふやうな、兎角母に對して氣まづい思ひをして居るらしい彼女を遠く想ひやることも出來た。實に可哀さうなことをした。『斯の憐みの心は自ら責むる心と一緒になつて何時でも岸本に起つて來た。』

異郷の旅の心を慰めるために、岸本は自分の部屋にある箆笥の前に行つた。箆笥とは言つても、鏡を張つた開き戸のある置戸棚に近い。その抽篋の中から國の方の親戚や友人の寫眞を取出した。義雄兄の家族一同で撮つた寫眞も出て來た。それは最近に東京から送つて來たのであつた。高輪の家の庭の一部がそつくりその寫眞の中にある。南向の縁側の上には蒲團を敷いて坐つた祖母さんが居る。庭には嬰兒を抱いて立つ輝子が一番前の方に居る。二人の少年が庭石の上に立つて居る。その一人は義雄兄の子供で、一人は繁だ。兄さんらしく撮れた泉太の姿をその弟の傍に見ることも出來る。義雄兄が居る。嫂が居る。嫂はその家で生れた男の兒を抱いて居る。岸本は兄夫婦の寫眞顔をすら平氣では眺められなかつた。一番後方に立つのが變り果てた節子の面影であつた。娘らしく豊かな以前の胸のあたりは最早彼女に見られなかつた。特色のある長い生えさがりは一層彼女の頬を

瘦せ細つたやうに見せて居た。

『自分は、人一人を斯様にしてしまつたのか。』

それを思ふと岸本は恐ろしくなつてその寫眞を抽篋の底に隠した。

27日  
3/11

### 六十五

山羊の乳賣の笛で岸本は自分の部屋に眼を覺ました。巴里のやうな大きな都會の空氣の中にも左様した牧歌的なメロデーの流れて居るかと思はれるやうな笛の音がまだ朝の中の硝子窓に傳はつて來た。旅らしい心持で、その細い清んだ音に耳を澄ましながら、岸本は窓に向いた机のところで小さな朝飯の盆に對つた。それを済ました時分に、女中が來てコン／＼と軽く部屋の戸を叩く音をさせた。何時でも西伯利經由とした郵便物の來るのは朝の配達と極つて居た。其時彼は新聞や雑誌や手紙の集まつたのをドカリと一時に受取つた。待たれた故國からの便りの中には、節子の手紙も混つ

て居た。

『ホウ・泉ちゃんが御清書を送つてよこした。』

と岸本は言つて見て、外國に居て見ればめづらしいほど大きく書いた子供の文字を展げて見た。それから節子の手紙を読んだ。何と言つてよこしても直接には答へないで黙つて居る叔父に宛て、彼女が根氣好くも書いてよこした。叔父さんの旅の便りが新聞に出る度に、自分はそれを讀むのを此上もない心の慰めとして居ると書いてよこした。叔父さんに別れた頃の季節が復た回つて來たと書いてよこした。遠く行く叔父さんを見送つた時の心持が復た自分に歸つて來たと書いてよこした。この高輪の家の庭先に佇立んで品川の方に起る汽車の音を聞いた時のことまでしきりに思出されると書いてよこした。

岸本は自分の旅の心を昔の人の旅の歌に寄せて、故國の新聞への便りのはじめに書きつけて送つたこともあつた。節子はその古歌を引いて、同じ昔の人の詠んだ歌の文句をさながら彼女の遺瀨ない述懐のやうに手紙の中に書いてよこした。

『つきやあらぬ、』

はるや昔の

はるならぬ、

わがみひとつは

ものみにして。』

先頃送つた家中で撮つた寫眞を叔父さんは奈何見たらうとも彼女は書いてよこした。あの中に居る自分はまるで幽霊のやうに撮れて、あゝした寫眞で叔父さんにお目に掛るのも恥かしいと書いてよこした。その事を母に話して叱られたと書いてよこした。彼女は淺草の家の方で使つて居た婆やのことも書いてよこした。婆やは今でも時々訪ねて来て呉れるが、自分は家にある雑誌などを貸與へて婆やの機嫌を取つて置いたと書いてよこした。『婆やは可恐うございますからね』と書いてよこした。

旅に上つてから以來、引續き岸本は斯うした調子の手紙を節子から受取つた。彼は東京を去つて神戸まで動いた時に、既に彼女の心に起つて來た思ひがけない變化を感じたのであつた、彼は一切から離れやうとして國を出たものだ。けれども彼の方で節子から遠ざからうとすればするほど、不幸な姪の心は餘計に彼を追つて來た。飽くまで彼は斯うした節子の手紙に對して沈黙を守らうとした。彼は節子の手紙を読む度に、自分の傷口が破れてはそこから血の流れる思ひをした。嘆息して、岸

本は机に對つた。書架の上から淡黄色な紙表紙の書籍を取出して來て自分の心をその方へ向けた。そして側目もふらずに新しい言葉の世界へ行かうとした。英譯を通して日頃親しんで居た書籍の原本を手にする事すら彼には楽しかつた。彼は既に讀みたいと思ふかす／＼の書籍を有つて居たが、覺束ない彼の語學の知識では多くはまだ書架の飾り物であるに過ぎなかつた。この國の言葉に籠る陰影の多い感情までも讀み得るの日は何時のことかと、もどかしく思はれた。

## 六十六

旅の空で岸本は既に種々な年齢を異にし志すところを異にした同胞に邂逅つた。わざわざ佛蘭西船を擇んで海を渡つて來て、神戸を離れるから直に外國人の中に入つて見やうとした程の彼は、巴里に來た最初の間成るべく同胞の在留者から離れて居やうとした。外國へ來て日本人同志左様一つところへ集つてしまつても仕方が無い、斯うした岸本の考へ方はある言葉の行違ひから一部の在留者

の間に反感をさへ引起させた。『岸本は日本人には附合はないつもりだそうだ、』と言って彼の誠意を疑ふやうな在留者の聲が彼自身の耳にすら聞えて來た。しかし斯の疑ひは次第に解けて行つた。モン・パルナツスの附近に住む美術家で彼の下宿に顔を見せる連中も多くなり、通りすがりの同胞で彼の下宿に足を留めて行く人達も少くはなかつた。

岸本は部屋の窓へ行つた。京都の大學の教授がしばらく泊つて居た旅館の窓が岸本の部屋から見えた。その教授に、東北大學の助教授に、いづれも旅で逢つた好ましい人達が食事の度に彼の下宿の食堂へ通つて來たばかりでなく、彼の方からも自分の部屋から見える旅館へ行つて夜遅くまで思ふさま國の方の言葉を出して話し込んだ時の方が、まだ昨日のこのやうに彼の胸にあつた。もし互の事情が許すなら、もう一度白耳義のブラツセルか倫敦あたりで落合ひたいものだと言つて行つた教授、一年ぶりで伯林の地を踏んだと言つて歸國の途上から葉書を呉れた助教授、それらの人達が去つた後の並木街を岸本は獨りで窓のところから眺めた。とても國の方では話し合はないやうな話が異郷の客舎に集まつた教授等と自分の間に引出されて行つたことを想つて見た。旅の不自由と國の言葉の戀しさと、信じ難いほどの無聊とは、異郷で邂逅ふ同胞の心を十年の友のやうに結び着けるのだとも想つて見た。彼は一緒にルエキサンブルの公園を歩いたりリラの珈琲店に腰掛け

たりした教授連に比べて見て、何程自分のたましひが暗いところにあるかといふことを思はずには居られなかつた。

毎日のやうに並木街をうろ／＼して居る不思議な婦人が窓の硝子を通して彼の眼に映つた。恐らく白痴であらうと下宿の食堂に集る人達は噂し合つて、誰が命けるともなく『カロリン夫人』といふ名を命けて居た。『カロリン夫人』は紅い薔薇の花のついた帽子を冠り、白の手套をはめ、朝から晩までその界限を往つたり來たりして居た。何を待つかと他目には思はれるやうなその婦人の姿を窓の下に見つけたことは、一層岸本の心を異郷の旅らしくさせた。

『姪ゆゑに斯様な苦惱と悲哀とを得た。』

ある佛蘭西の詩人が歌つた詩の一節になぞらへて、彼は自分で自分の旅の身を言つて見た。丁度そこへ岡といふ畫家が訪ねて來た。



## 六十七

岡は今更のやうに岸本の部屋を眺め廻した。壁紙で貼りつめた壁の上には古めかしく大きな銅版畫の額が掛つて居た。「ソクラテスの死」と題してあつて、あの哲學者の最後をあらはした圖であつたが、セエヌの河岸通りの古道具屋あたりに見つけるものと大して相違の無いやうな、佛蘭西風の銅版畫としては極く有りふれたものであつた。岸本が一年近い旅寝の寢臺はその額の掛つた壁によせて置いてあつた。

「この部屋に掛つて居る額と、岸本さんとは、何の關係があるんです——」

岡は畫家らしいことを言つて、ロココといふ建築の様式が流行つた時代のことでも聯想させるやうな古い版畫を眺めた。

「こゝの下宿のおかみさんが、あれでも自慢に掛けて呉れたんです。」と岸本が言つた。

「あゝいふものが掛つて居ても、岸本さんは氣に成りませんかね。」

「この節は君別に氣にも成らなくなりましたよ。有つても無くても僕に取つては同じことさ。旅では君、仕方が無いからね。」

國に居た頃から見ると岸本はずつと簡単な生活に慣れて來た。巴里に着いたばかりの頃は外國風の旅館や下宿の殺風景に呆れて、誰も自分の机の上を片付けて呉れる人もないのか、とよく其様な嘆息をしたものであつたが、次第に萬事人手を借りずに済ませるやうに成つた。着物も自分で疊めば、鬚も自分で剃つた。一週に一度の按摩は欠かすことの出来ないものであつたが、それも無しに済んだ。彼はずつと昔の書生にもう一度歸つて行つた。自分と同年配の人を見ると同じ心持で、國から到來した茶でも入れて年下な岡を款待さうとして居た。

「僕などは君、極樂へ島流しになつたやうなものです。」

と言ひながら岸本は椅子を離れた。岸本が極樂と言つたは、學藝を重んずる國といふ意味を通はせたので。

「極樂へ島流しですか。」

と岡も笑出した。

岸本は洗面臺の横手にある窓の下へアルコール、ランプと湯沸を取りに行つた。それは何處かの畫室の隅に轉がつて居たのを岡が探出して以前に持つて來て呉れたものであつた。留學して居た美術家の残して置いて行つた形見であつた。

『岡君、國から雑誌や新聞が來ましたよ。僕の子供のところからはお清書などを送つてよこしました。』

『岸本さんは子供は幾人あるんですか。』

『四人。』

と岸本は言浚んだ。岡はそんなことに頓着なく、

『皆東京の方なんですか。』

『いえ、二人だけ東京に居ます。三番目のやつは郷里の姉の方に行つてますし、一番末の女の見は常陸の海岸の方へ預けてあります。今生きてるのが、それだけで、僕の子供はもう三人も死んでますよ。』

『好い阿父さんの譯だなあ。』

ランプに燃えるアルコールの火を眺めながら、岸本は岡と一緒に國の方の言葉で話をするだけでも、

それを樂みに思つた。彼の下宿にはエルサイエ生れの軍人の子息でソルボンヌの大學へ通つて居る哲學科の學生と、獨逸人の青年とが泊つて居た。同胞を相手に話す時のやうな氣樂さは到底下宿の食堂では味はれなかつた。岡はまた岸本が勧めた雑誌や新聞を展げて饑ゑ渴くやうにそれを讀まうとした。

## 六十八

岡は岸本よりも半年ばかり先に巴里へ來た人であつた。岸本が旅でこの畫家を知るやうに成つたのは數々の機會からで。ベルランの藏畫を見やうとして一緒に巴里の郊外へ辻馬車を驅つた時。マデラインの寺院の附近に新畫を陳列する美術商店を訪ねた時。テアトルといふ町での忘年會に二人して過つて火傷をした時。しかし岸本が遽に親しみを感じ始めたのは、岡の好きな日本飯屋へ誘はれて行つて一緒に旅らしく酒を酌みかはした時からであつた。その晩から岸本は岡の胸の底に住む秘

密を知るやうに成つた。この男の熱意も、誠實も、意中の人の母や兄の心を動かすには足りなかつたことを知るやうに成つた。堅く相許した心のまことを置いて、この世の何物が人を幸福ならしめるであらう。左様した遺瀨ない心の述懐には岡は殆ど時の経たのを忘れて話した。意中の人の母に宛てた激しい手紙を残し、その人の兄とも多年の親しい交りを絶つて、そして國を出て来たといふこの男の憤りと恨みとは奈何なる寛恕の言葉をも聞入れまいとするやうなところがあつた。湯沸の湯が煮立つた。岸本は町から求めて来た佛蘭西出來の茶碗などを盆の上に載せ、香ばしいにほひのする國の方の緑茶を注いで岡に勧めた。

この畫家の顔を見て居ると、きまりで岸本の胸に浮んで来る年若な留學生があつた。ギャラントといふ言葉をそのまま宛嵌め得るやうな、巴里に滞在中も黄色い皮の手套を集めて居た事がまだ岸本には忘れられずにある青年の紳士らしい風采をしたその留學生は、ある身上話を残して置いて瑞西の方へ出掛けて行つた。留學生は國の方で深くねんごろにした一人の若い婦人があつたと言つた。深窓に人となつたやうなその婦人は現に人の妻であるとも言つた。私費で洋行を思立つた留學生が日本を出る動機の中には、すくなくもその若い夫人との關係が潜んで居るらしい口振であつた。その夫人の妊娠といふことにも留學生は酷く頭をなやまして居た。留學生がしばらく巴里に居る間に

はよくその話が出て、岡もそれを聞かせられたものゝ一人であつた。

『女のことで西洋へ来て居ないやうなものは有りやしません——』

そこまで話を持つて行かなければ承知しないやうなのが岡だ。それほど岡には山國の農夫のやうな率直があつた。

岡は飲み干した茶碗を暖爐の上のところに置いて、

『昨夜は乞食モデルが二三人僕の畫室へ押掛けて來ました。勝手にそこいらにある物を探して、酒を奢らないかなんて言出しやがつて……きたないモデルめ……でも酒を飲ましてやりましたら、皆で唄なぞを歌つて聞かせましたつけ。それを聞いて居たら終には可哀さうになつちまひました……』

こんな話をして聞かせる岡の旅は在留する美術家仲間でも骨が折れさうであつた。おまけに佛蘭西へ來てから以來、るく／＼畫を描く氣にすらならないといふほど心の戦ひを續けて來た岡の顔を見て居ると、岸本は餘計に外國生活の無聊な心持を引出された。

## 六十九

「國の方で炬燵にでもあたつて居る人は羨ましいなんて、よくそんな話を君にしましたつけが、もうそれでもバアク(復活祭)が来るやうに成りましたね。」

斯う岸本は岡に言つて、やがて連立つて下宿を出た。旅で逢ふ羅馬舊教の祭が来て居た。帽子から衣裳まで一切黒づくめの風俗の女達が寺詣の日らしく町を歩いて居た。天文臺前の廣場に近い町の角あたりまで行くと、並木はそこで變つて、黄緑な新芽の萌え出したブラタアヌの代りに、早や青々とした若葉を着けたマロニエが見られる。

「もうマロニエの花が咲いて居ますよ。」

と岡は七葉の若葉の生ひ茂つて來た黒ずんだ枝の上の方を岸本に指して見せた。白い蠟燭を挿したやうな花がその若葉の間から顔を出して居た。

「これがマロニエの花ですか。」と岸本が言つた。

「どうです、好い花でせう。」

「京都大學の先生がストラスブウルから葉書を呉れてね、マロニエが咲いたらなんて話がよく出たから奈何な花かと思つたら、つまらない花ですわね」なんて書いてよこした。これをけなすのは少し酷い。

一つ／＼取出して言ふ程の風情があるではないが、旅人としての岸本はどこか寂しいその花のすがたに心を引かれた。

「去年の今頃は、丁度僕は船でしたつけ。」

と岸本はそれを岡に言つて見せた。二人の足はビリエーの舞踏場の前から、ある小さな珈琲店の方へ向いた。ホルニキサンブウルの並木を前にして二人ともよく行つて腰掛ける氣の置けない店があつた。そこが岡の言ふ「シモンヌの家」だ。

店先には葡萄酒の立派をして居る勞働者風の佛蘭西人も見えた。帳場のところに居た主婦は親しげな挨拶と握手とで岡を迎へた。

奥にはテーブルを並べた一室があつた。岡と岸本とがそこへ行つて腰掛けやうとすると、二階の方

から壁づたひに階段を降りて来る十六七ばかりの娘があつた。バアアの祭の日らしく着更へた佛蘭西風の黒い衣裳は、瘠ぎすで、きやしやなその娘の姿によく似合つて見えた。娘は岡の側へ来て、微笑を見せながら白い處女らしい手を差出した。それから岸本のところへも握手を求めに來た。この娘がシモンヌであつた。

岸本が知つて居るかぎりの美術家仲間によく此娘の家へ集まつた。その中でも岡はしばしば畫室の方から足を運んで来て、この亭主を見、主婦を見、両親の愛を一身にあつめて居るやうなシモンヌを見ることを楽しみにして、部屋のテーブルの上に注文したコニヤツクの盃などを置きながら、そこで故郷への繪葉書を書いたり手紙を書いたりした。悲哀の持つて行きどころのないやうなこの畫家は、あひゞきする男女の客や人を待合せる客のためにある奥の一室を旅の隠れ家ともして別れた意中の人の面影を僅に異郷の少女に忍ぼうとして居るかのやうに見えた。

## 七十

その小さな珈琲店はヴァル・ド・グラスの陸軍病院の方からサン・ミツシエルの並木街へ出やうとする角のところに當つて居て、狭い横町の歩道を往來する人の足音が岸本等の腰掛けた部屋から直ぐ窓の外に聞えて居た。

よく働く佛蘭西の婦女の氣質を見せたやうな主婦は決して娘を遊ばせて置かなかつた。何時來て見ても娘は店を手傳つて居た。しかし主婦は四方八方に氣を配つて居るといふ風で、客の注文するものもめつたに娘には運ばせなかつた。店がいそがしくて給仕の手の明いて居ないやうな時には、主婦の妹が奥の部屋へ用を聞きに來た。さもなければ主婦自身に珈琲などを運んで來た。どうかすると奥の部屋の片隅では親子揃つて食事が始まる。シモンヌも來て腰掛ける。客商賣には似合はないほど堅氣な温かい家庭の圖が見られることがある。斯うした部屋に旅人らしく腰掛けて、岸本は岡

から娘の噂を聞いた。

『あれで主婦は何程娘を大切にしているか知れないですね。僕がシモンヌを芝居に誘ったことがありました。それをシモンヌがお母さんのところへ行つて訊いたといふもんでせう。その時主婦は、『そんなことが出来るものかね』と言つたやうな顔付をしましたつけ。』

『今が可愛いさかりだね。』と岸本も言つた。

『あれで大きくなつたら、反つていけなくなるかも知れません。ほんとに、まだ子供だ。あそこがまた可愛いところだ。』

血氣さかんな岡の言ふことに岸本は賛成してしまつた。

二人の間にはモデルと同棲する美術家達の噂が引出されて行つた。旅に來ては佛蘭西の女と一緒に住む同胞も少くはなかつた。モデルを職業とする婦人になしに、あるモヂストを相手として楽しく畫室住居するといふ美術家の噂も出た。

『好い陽氣に成つたね。』

と聲を掛けて、屋外の方から入つて來た畫家があつた。

「シモンヌの家へ來たら必と岡が居るだらうと思つて、寄つて見た——果して居た。』とその畫家が

言つて笑つた。

『僕等はまた、今々君の噂をして居たところだ。』と言つて岡も元氣づいた。

續いて二三の畫家も入つて來た。いづれも岸本には見知越しの連中で、襟飾の結び方からして美術家らしく若々しかつた。斯うして集つて見ると、岸本よりはずつと年少な岡が在留する美術家仲間では寧ろ年嵩なくらゐであつた。

『岡——奈何だい。』

最初に入つて來た畫家が岡を勵まし慰めるやうに言つた。にはかに部屋の内は賑かな笑聲で満たされるやうに成つた。その畫家は岸本の方をも見て、

『岸本君は巴里へ來て居ながら、ほんとにまだ異人の肌も知らないんですか——話せないねえ。』  
何を言つても憎めないやうなその快活な調子は一同を笑はせた。

『年は取りたくないものだ。』

斯う岡が言出したので、復た皆そりかへつて笑つた。

## 七十一

「岸本君は何をそんなに溜息を吐いてるんです。」  
と畫家の中に言出したものが有つた。その調子がいかに可笑しかつたので、復た皆くす／＼やり出した。

「僕は岸本君のためにシャンパンを抜かうと思つて待ち構へて居るんだけど、何時に成つたら飲めることやら見當がつかない。」

と岸本の前に腰掛けて居た畫家が親しげな調子で言つて笑つた。この畫家などは割合に老けて見えだが、年を聞くと驚くほど若かつた。青年の美術家同志が斯うして珈琲店に集つて居ても、美術に關する話はめつたに出なかつた。氣質を異にし流派を異にする人達は互ひに専門的な話頭に觸れることを避けやうとして居た。話好きな岡が岸本と二人で繪畫や彫刻に就いて語り合ふほどのこと

も、皆の前では持出されなかつた。やがて畫家の一人が給仕を呼んだ。給仕は白い布巾を小脇にはさみながら、皆のところへ手摺れた骨牌と骨牌の敷布の汚れたのを持つて來た。その骨牌を扇面の形に置いて見せた。各自の得點を記すための石盤と白墨とをも持つて來た。薄暗い部屋の内へ射し入る日の光は日本人だけ一緒に集つた小さな世界を照らして見せた。氣の置けない笑聲と、靜かにけふる佛蘭西の紙巻煙草の煙と、無心に打ちおろす骨牌の音のみが、そこに有つた。石造の歩道を踏む音をさせて窓の外を往來する人達も、その珈琲店へ來て珈琲の立飲をして行く近所の家婢も、帳場のところへ來て話し込む労働者もしくはお店者風の佛蘭西人も、奥の部屋に形造つた小さな世界とは全く無關係であつた。日本人同志が何を話さうと、誰も咎めるものも無ければ、解るものも無かつた。岸本も骨牌の仲間入をして、一しきり女王や兵隊の繪のついた札などを眺めて居たが、そのうちに旅の無聊は彼ばかりの激しく感じて居る苦みでも無いことを思つて來た。長い外國の滞在で骨牌にも飽きた顔付の人が多かつた。

やがて岸本は斯の珈琲店を出た。彼は巴里へ來てから送つて居る自分の旅人としての生活を胸に浮べながら下宿の方へ歸つて行つた。「巴里には何でも有る」とある巴里人が彼に話して笑つた斯の大きな都會の享樂の世界へ、連れのある度に彼も出入りして見た。時には異郷のつれ／＼を慰めやう

として、近くにあるピリエーの舞踏場などへ足を運ぶこともあり、遠くモン・マルトルの方面へ通りすがりの同胞の客を案内して行くこともあつた。東京隅田川の水邊に近い座敷で静な三味線を聞くのを楽しみにしたと同じ心持で、巴里の劇場の閉ねる頃から芝居歸りの人達が集まる樓上に西班牙風の踊などを見るのを楽しみにすることもあつた。しかし何が彼をして一切を捨てさせ、友達からも親戚からも自分の子供からも離れさせたか。その事は一日も彼の念頭を去らなかつた。

## 七十二

巴里の最も楽しい時が来た。同じ街路樹でも、真先に斯の古めかしい都へ青々とした新しい生氣を注ぎ入れるものはマロニエであつたが、後れて萌え出したプラタアヌも芽から葉へと急いで、一日は一日よりその葉が開き形も大きく色も濃く成つて行くうちに、早や町々は若葉の世界であつた。人の家の石垣越しなどに紫や白に密集つて咲く丁香花もさかりの時に成つて来た。斯の好い季節は

岸本の心を活きかへるやうにした。

斯うした蘇生の思ひを抱きながら、しかも岸本には妙に落着きの無い心持の日が続いた。旅に来て彼は何一つ贅澤を願はうではなかつた。唯、たましひを落着けることのみを願つた。彼にはその何よりも肝要なものが得られなかつた。何故東京淺草の方にあつた書齋を移して持つて来たやうな心で、二年でも三年でも巴里の客舎に暮せないのか、それは彼には言ふことが出来なかつた。齒齷い心持で、自分の下宿を出て見た、産科病院前の並木街にはプラタアヌの幹や枝の影が歩道の上に落ちて居た。その輝いた日あたりの中を教師に連れられて通る小學校の生徒の群があつた。遠足にでも出掛けるらしい佛蘭西の少年等はいづれもめづらしさうに岸本の顔を見て通つた。その無邪氣な子供等を見送つて居ると、岸本の心は遠く國の方に居る泉太や繁の方へ行つた。その年から繁も兄と連立つて學校へ通ふやうになつたかと思ひやつた。

天文臺の前へ歩いて行つて見た。そこにも男や女の子が静かな樹の下で遊んで居た。高いマロニエの枝の上に白く咲く花も盛りの時で、あだかも隠れた「春」の舞踏に向つて燭臺をさし延べたかのやうに見えて居た。

前の年にマルセエユの港に着いて初めて歐羅巴の土を踏んだ頃の記憶が復た新しく岸本の胸に歸つ



て来た。その一年ばかりといふものは、まるで歩きづめに歩いて居た旅人のやうな自分の身をも胸に描いて見た。巴里のアパルトンの屋根の下に籠つて居ることも、靴を穿いて石造りの歩道を歩いて居ることも、ほんたうに休息といふものを知らない彼に取つては殆ど同じことであつた。どうかすると居ても起つても居られないやうな日が来て、目的もなしに公園の方へ出掛けたり、あそこの町の店先に立つて見たり、こゝの飾窓を覗いて見たりして、寄りたくもない珈琲店に腰掛けるより外に、時の送りやうの無いこともあつた。それが幾日となく續きに續くこともあつた。一年の異郷の月日は彼に取つて實際に長い彷徨の連続であつた。彼は彷徨ふことを仕事にして来た自分に呆れた。

町々の若葉の間を歩き廻つて、もう一度岸本が下宿の方へ歸つて行つた時は、無駄な骨折に疲れた彼は自分の部屋へ行つて獨りて悄然と窓側に立つて見た。曾て信濃の山の上で望んだと同じ白い綿のやうな雲を遠い空に見つけた。その春先の雲が微風に吹かれて絶えず形を變へるのを望んだ。親しい友達の一人も今は彼の側に居なかつた。國から持つて来た仕事も兎角手に着かなかつた。その中でも彼は東京の留守宅への仕送りをして遠く子供を養ふことを忘れることは出来なかつた。そろそろ自分も懐郷病に罹つたのか、それを考へた時は實に忌々しかつた。どうかすると彼の部屋の板

敷の床の上へ自分の額を押宛て、泣いても足りないほどの旅の苦痛を感じた。

### 七十三

モン・パルナツスの墓地の側を通過して、岸本は岡の畫室の前へ行つて立つた。

青黒い色に塗つた扉を内から開ける鍵の音をさせて、岡が顔を見せた。鶯の鳴聲でも聞くことの出來さうな巴里の場末の方へ寄つた町の中に岡の畫室を見つけることは、來て見る度に旅の不自由と暢氣さとを岸本に思はせた。『老大』と言つて、若い連中から調戲はれるのを意にも留めずに居た岡等より年長の美術家もあつたが、その人の一頃住んだ畫室も同じ家つゞきにある。

『岸本さん、火でも焚きませう。』と岡は款待顔に言つて、畫室の片隅に置いてある製作用の縁を探しに行つた。

『もう君、火も要らないぢやないか。』と岸本が言つた。

『でも、何だか火が無いと寂しい——』  
岡は畫布を張るための白木の縁を岸本の見て居る前で惜氣もなくへし折つて、それを焚付がはりに鐵製暖爐の中へ投入れた。畫架やら机やら寢臺やらが置いてある天井の高い部屋の内には火の燃える音がして來た。岸本はその側へ椅子を寄せて、

『今日は君を見たくなつて一寸やつて來ました。』

『好く來て下さいました。僕はまたあなたを訪ねやうかと思つて居たところでした。』と岡が言つた。

激情に富んだ岡は思はしい製作も出來ずに心の戦ひのみを續けて居る苦い懶惰を切なく思ふといふ風で、新しく張つた大きな畫布のそのまゝにして部屋隅に置いてあるのを暖爐の側から眺めながら、

『岸本さん、僕はこの節お念佛を唱へて居ますよ——左様いふ心持に成つて來て居ますよ。』

奈何にでも釋れば釋れるやうなことを岡は言出した。岡は更に言葉を續いで、

『巴里へ來てから僕の有つてる舊いものはすっかり壊れてしまひました。見事にそれは壊れてしまひました。そんなら奈何いふ新しい道を取つて進んだら可いかといふに、それがまだ僕には見つかりません。僕はそれを待つより外に仕方がありません。それが僕の心に象を取るまで、あせらずに待つより外に仕方がないと思ひます。旅は僕を他力宗の信者にしました。僕はお念佛を唱へて、日々進んで行つて見やうと思ひます。僕は國の方に居るお父さんのところへ手紙を書いてやりましな——僕のお父さんといふのは、それは僕のことを心配して居て呉れますからね——「お父さん、この節はお念佛を唱へるやうな心になりましたから、そんなに心配しないで待つて居て下さい」ツて、ね。』

## 七十四

運命に忍従しようとする岡の話は藝術の生涯に關したことはあつたけれども、何となく岸本の耳には斯の畫家の熱い、烈しい、しかも失はれた戀に對する心の消息を語るやうにも聞き做された。意中の人との別れ際に「安心して居ても好いでせうね」と念を押して「え」といふ堅い返事を聞いた

といふ岡、それぎり彼女を見ることも叶はなかつたといふ岡、これほど相許した心のまことを踏みにしらうとする彼女の母親は悪魔であるときまで憤慨した手紙を送つたといふ岡、巴里へ来てからも時々彼女の兄を殺さうとするやうな夢を見て眼が覺めては冷たい汗を流すといふ岡、その岡の口唇から「旅は僕を他力宗の信者にしました」といふ聲を岸本は聞きつけた。

その時、畫室の外からコン／＼と扉を軽く叩く音をさせて、半身ばかりを顯した貧しい感じのする佛蘭西人の娘があつた。帽子も冠らずに居るその娘は畫室の内の様子を見て直にも立去らうとしたが、それを岡が呼留めた。岡は部屋の片隅から空嚔を探して来て、ビールを買ふことをその娘に頼んだ。

「モデルかね。」と岸本が訊いた。

「え、時々使つて呉れないかつて、斯様してやつて來ます。」

畫室の壁には岡がブルタアニユの海岸の方で描いたといふ一枚の風景畫が額縁なしに掛けてあつた。何時來て見てもその油繪だけは取除さずにあつた。岸本はその前に立つて岡と話しく眺め入つて居るうちに、やがて町から嚔を提げた娘が戻つて來た。

「この娘は姉妹ともモデルに雇はれて來ます。この娘は妹の方です。頼めば斯うして酒の使ぐらゐ

はして呉れますが、平素遊びにやつて來て騒いで仕方がありません。」と岡は岸本に言つて見せた。娘は通じない日本の言葉で自分の噂をされるのを聞いて、笑つて出て行つた。岡は暖爐の側へテーブルを出し、そこにビールを置いて、國の方にある親達の噂をした。

「親といふものにかけては、僕は何のくらの幸福を感じて居るか知れませんが、兩親ともよく氣が揃つて居ます。それは僕を力にして居て呉れます。こなひだもお母さんのところから手紙を貰ひました。『お父さんも大分年を取つたし、お前一人を力にして居るんだから、お前もそのつもりで成るべく早く歸つて來るやうに心掛けて居てお呉れツ』とお母さんの方から書いてよこしました。親さへなかつたら、僕は國へ歸りたくは有りません。國の方の消息を聞くことは苦痛です。寧ろ僕は長く巴里に留りたいと思ひます。例の一件の時も、親達は何のくらの僕のために心配して居て呉れたか知れませんが、僕は愛人の最終の手紙を親達の家の方で受取りました。しかもその手紙はあの人のお母さんか姉さんが吩咐けて書かしてよこしたらしい手紙です。別れの手紙です。『斯ういふものが來てる』ツて、お父さんが心配顔に渡して呉れましたから、僕は二階へ持つて行つてそれを讀みました……何時まで経つても僕が二階から降りて行かないでせう、お父さんもお母さんも心配してしまつて、お燭を一本つけて置いて僕を階下へ呼んで呉れました。酒の香氣を嗅いで見ると、僕も堪ら

なくなつて、獨りでしく／＼やり出しました。お父さんは散々僕を泣かして置いて黙つて視て居ましたが、終に何を言出すかと思ふと、その言草が好いちや有りませんか。『貴様も、女運の無い奴だなあ』ツて……』

岡は父親の言つたといふ言葉を繰返して見て、自ら嘲るやうに笑つた。

## 七十五

親さへなくば國の方へは歸りたくないといふ岡を自分の身に思ひ比べながら、やがて岸本はその晝室を出て天文臺前の方へ戻つて行つた。

『皆旅に来て苦勞するのかなあ。』

思はずそれを言つて見て、パスツウルの通りからモン・バルナツスの停車場へと取り、高架線の鐵橋の下をエドガア・キネの並木街へと出、肉類や野菜の市の立つ町を墓地の方へ行かずにモン・バ

ルナツスの通りへと突切つた。並木のかげに立つネエ將軍の銅像のあるあたりは朝に晩に岸本の歩き廻るところだ。六方から町の集まつて來て居る廣場の一方にはルエキサンブルの公園の入口を望み、一方には圓い行燈のやうな天文臺の石塔を望んだ。そこまで行くと、下宿も近かつた。

『東京の友達も奈何して居るだらう——』

斯う思ひやつて、乾き萎れたやうなプラタアヌの若葉の下を歩いて行つた。

岸本に取つては旅の心を引く一つの事蹟があつた。他でもない、それはアベラアルとエロイズの事蹟だ。英學出の彼はあの名高い學問のある坊さんに就いて精しいことは知らなかつた。でも彼がアベラアルの名に親しみ始めたのはずつと以前のことである。アベラアルとエロイズの愛。何程青年時代の岸本はその奔放な情熱を若い心に想像して見たか知れない。あの學問のある尼さんのためには男も捨て僧職も擲つたといふアベラアルの名は何程若かつた日の彼の話頭に上つたか知れない。岸本は同宿するソルボンヌの大學生の口から、その佛蘭西の青年の通つて居る古い大學こそ往昔アベラアルが教鞭を執つた歴史のある場所であると聞いた時は、全く舊知に邂逅ふやうな思ひをしたのであつた。その事を胸に浮べて、彼は自分の部屋に歸つた。旅の鞆に入れて國から持つて來た書籍の中には昔を思ひ出させる英吉利の詩人の詩集もあつた。その中にあるアベラアルとエロイズの

事蹟を歌つた譯詩の一節をもう一度開けて見た。

“Where's Héloïse, the learned nun,

For whose sake Abellard, I ween,

Lost manhood and put priesthood on ?

(From Love he won such dule and teen !)

And where, I pray you, is the Queen

Who will'd that Buridan should steer

Sewed in a sack's mouth down the Seine ?

But where are the snows of yester-year ?”

(The ballad of Dead Ladies.—Translation from Francois Villon, by Rossetti.)

東京下谷の池の端の下宿で、岸本が友達と一緒に斯の詩を愛誦したのは二十年の昔だ。市川、菅、福富、足立、友達は皆若かつた。あの敏感な市川が我と我身の青春に堪へないかのやうに、「されど去歳の雪やいづこに」と吟誦して聞かせた時の聲はまだ岸本の耳の底にあつた。夜に入つて、柔い雨が客舎の窓の外にあるブラタアヌの若葉へ來た。その雨の音のする静かさの中

で、岸本はもう一度斯の事蹟を想像して見て、獨り居る無聊を慰めやうとした。

## 七十六

そんなに叔父さんは國の方の言葉を聞きたくて居るのか、叔父さんの旅の便りを新聞で読んで斯の手紙を送る氣に成つたと節子は岸本のところへ書いてよこした。煩く便りをするやうであるが、國の方の言葉を聞くと思つて讀んで呉れと書いてよこした。節子の手紙には泉太や繁の成身して行く様子を精しく知らせてよこしたが、何時でも單純な報告では満足しないやうなところがあつた。叔父さんに心配を掛けた自分の身も、今では漸く回復して、何事も知らない人が一寸見たぐらゐでは分らないまでに成つたから安心して呉れと書いてよこした。勿論見る人が見れば直ぐ分ることであるとも書いてよこした。彼女はまた、水蟲のやうなものを兩手に煩つて兎角臺所の手傳ひも出來かねて居ると書いてよこした。相變らぬ髪の毛が抜けて心細いといふやうなことまで書いてよこし

た。斯うした節子の手紙を読む度に岸本は嘆息してしまつて、所詮國へは歸れないといふ心を深くした。

旅の空にあつて岸本が送つたり迎へたりする同胞も少くはなかつた。好い季節につれて、旅から旅へ動かうとする人達の消息を聞くことも多くなつた。以太利の旅行を終へて岸本の宿へ土産話を置いて行つた人には京都大學の<sup>ルネ</sup>古學專攻の學士がある。これから以太利へ向はうとして心仕度をして居るといふ便りを獨逸から呉れた人には美術史專攻の慶應の留學生がある。セエヌの河士にある部屋を去つて近く歸朝の途に上らうとする美術學校の助教授もあり、西伯利亞廻りで新たに巴里に着いた二人の畫家もあつた。

『岸本君が巴里に來られたことを僕はモスコウの方で知りました。』

斯う言つて舊い馴染の顔を岸本の下宿へ見せた一人の客もあつた。この客は一二ヶ月を巴里に送らうとして來た人であつた。

岡が畫室の方から來て部屋に落合つてからは、氣の置けないもの同志の旅の話が始まつた。何時逢つて見ても若々しい斯の客のやうな人を異郷の客舎で迎へるといふことすら、岸本にはめづらしかつた。よく身についた紺色の脊廣の輕々とした旅らしい服装も一層この人を若くして見せた。

『岸本君は巴里へ來て遊びもしないといふ評判ちや有りませんか。そんなにして居て君は寂しか有りませんか。』

と客が言つて笑つた。

『これで岸本さんも萬更遊ぶことが嫌ひな方ぢやないんだね。』と岡は客の話を引取つて、『人の行くところへは何處へでも行くし、皆で集つて話さうぢやないかなんて場合に、徹夜の發起人は何時でも岸本さんだ。「色地藏」だなんて岸本さんには紳名までついてるから可笑しい。戀の取持などは、これで悦んでする方なんだね。そのくせ自分では眺めてさへ居れば可い人だ。』

『だけれど、君、旅に來たからと言つて、何もそんなに特別な心持に成らなくても可いぢやないか。國に居る時と同じ心持では暮せないものかねえ。』と岸本が言出した。

一切のものゝ競ひ合ふ青春が過ぎ去るやうに、流石に若々しく見える客も時の力を拒みかねるといふ風で、さまざまな旅の話に耽つたが、岡と一緒にその人が出て行つた後まで種々な心持を岸本の胸に残した。

「今だから白状しますが、岸本君の詩集では随分僕も罪をつくりましたねえ。考へて見ると僕も不眞面目でしたよ。君の詩をダシに使つて、何程若い女を迷はしたか知れませんか。」

客の残して置いて行つた斯の聲はその人が居ない後になつても、まだ部屋の内に残つて居た。岸本が若い時分に作つた詩を幾つとなく暗誦したといふ客の顔はまだ岸本の眼前にあつた。その人はそよ／＼とした心地の好い風が顔を撫で、通るやうな草原に寝そべつて岸本の舊詩を吟じて居る若者を想像して見よとも言つた。花でも摘まうとするやうな年若な女學生がよくその草原へ歩きに来ると想像して見よとも言つた。風の持つて行く吟聲は容易に處女の心を捉へたとも言つた。そして其處女が何事も世間を知らないやうな良い身分の生れの人であればあるだけ、岸本の詩集が役に立つたとも言つた。客が清しい、ほれ／＼とするやうな聲を有つて居ることは岸本もよく知つて居た。斯の無邪氣とも言へない、しかし子供のやうに噴飯したくなるやうな告白は岸本を驚かした。彼は全く自分と氣質を異にした人の前に立つて見たやうな氣がしたのであつた。

「しかし昔のやうな空想はだんだん無くなつて行きますね。それだけ自分でも年をとつたかと思ひますね。僕は時々左様思ひますよ、戀が出来ないと成つたら人間もこれで心細いものです。自分にはまだ出来る。左様思つて僕は自分で慰めることが有りますよ。」

「僕にも出来る。」

と客の前に立つて、力を入れてそれを言つたのは岡だ。岸本はその時の二人の眼のかどやきをまだ眼前に見ることが出来た。

客が女性に近づくための方便としたといふ岸本の詩集は、作者たる彼に取つてはあべこべに女性の煩ひから離れた時に出来た若い心の形見であつた。漸く彼も二十五歳の頃で、仙臺の客舎へ行つてそれを書いた。あの仙臺の一年は彼が忘れることの出来ない楽しい時代である。ずつと後になつてもよく思ひ出す時代である。そしてその樂しかつた理由は、全く女性から離れて心の静かさを保つことが出来たからで。實際岸本は女性といふものから煩はされまいとして青年時代からその日まで歩き續けて来たやうな男であつた。

## 七十八

發つ發つといふ噂があつて發てなかつた美術學校の助教授がいよ／＼北の停車場から歸國の途に上るといふ日は、ほんたうに人を送るやうな思ひをして岸本も停車場まで出掛けて行つた。その日巴里に在留する美術家仲間は大抵集まつた。送られる助教授は歸つて行く人で、送る連中は残つて居るものだ。旅の心持は送るものゝ方にも深かつた。丁度遠い島にでも集まつて居るものゝところへ迎への船が來て、ある一人だけがその船に乗ることを許されたやうに。助教授は若い連中からも氣受の好い人であつた。日本飯屋のおかみさんの家に外國人を混ぜずの無禮講の會でもあつて、無邪氣な美術家らしい遊びに皆旅の憂さを忘れやうとする場合には、助教授は何時でも若いものと一緒になつて歌つた。斯のさばけた先達を見送らうとして、よく鎗鏑を持出した畫家と勸進帳を得意にした畫家とはダンフェール・ロシユルユウの方面から、口三味線の越後獅子に毎々人を驚かした畫

家はモン・パルナツスから、追分、端唄、浪花節、あほだら經、其他の隠し藝を有つた彫刻家や畫家は各自に別れ住む町々から別離を惜みに來た。岡はまた歸國後の助教授の口添に望みをかけて、あきらめ難い心を送るといふ風であつた。斯様な場合でもなければめつたに顔を合せることも無いやうな美術家とも岸本は一緒になつた。佛蘭西の婦人と結婚して六七年も巴里に住むといふ彫刻家にも逢つた。亞米利加の方から渡つて來て畫室住居するといふ小柄な同胞の婦人の畫家にも逢つた。

助教授を見送つて置いて、岸本は地下電車でヴザンの停留場へ出た。彼は所詮國へは歸れないといふ心を切に感じて來た。其心は國の方へ歸つて行く人を見ることによつて餘計に深められた。ヴザンから下宿をさして歩いて行くと、丁度羅馬舊教のコンミュニオンの儀式のある頃で、ノオトル・ダムの分院の前あたりで寺参りの歸りらしい幾人かの娘にも行き逢つた。清楚な白衣を着た改まつた顔付の處女等は母親達に連れられて幾組となく町を歩いて居た。彼は斯の知らない人ばかりの國へ來て是から先の自分の生涯を奈何にしやうかと思ひ煩つた。

「今日まで自分を導いて來た力は、明日も自分を導いて呉れるだらうと思ふ——そんなに心配して呉れ給ふな。」



東京の方のある友人に宛て、書いた斯の言葉を、岸本は下宿に戻つてからも想ひ出して見た。出来ることなら彼は旅先で適當な職業を見つきたいと願つて居た。出来ることなら國の方に残して置いて来た子供等までも引取つて異郷に長く暮りたいと願つて居た。それにはもつと時をかけ好い語學の教師を得て、言葉を學ぶ必要があつた。この言葉を學ぶといふことゝは、兎角兩立しなかつた。おまけに手紙の往復にすら多くの月日を要する遠い空にあつては、國の方の事情も通じかねることが多く、やゝもすると彼は眼前の旅をすら困難に感じた。

「運命は何處まで自分を連れて行くつもりだらう」

斯うした疑問は岸本の胸を騒がせた。どうかすると彼は部屋の床の上に跪き、堅い板敷に額を押宛てるやうにして熱い涙を流した。

## 七十九

知らない人達の中へ行かうとした岸本は一年ばかり経つうちに、ピョントウルの書記やプロツスの教授の家族をはじめ、ラベエの河岸に住む詩人、マダムといふ町に住む婦人の彫刻家、ベチウスの河岸に住む日本美術の蒐集家などの家族を知るやうに成つた。しかし何か斯う食足りないやうな外來の旅客としての商痒さは土地の人に交れば交るほど岸本の心に附纏つた。

六月に入つて、岸本はピョントウルの書記のお母さんから手紙を貰つた。その中にあの老婦人が長いこと病床にあつたことから書出して、定めしあなたのこととも忘れて居たかのやうにあなたには思はれやうが、決してさうで無い、この御無沙汰も自分の病氣ゆゑであると書いてよこした。次の土曜日の晩には食事に來て呉れないか、自分等一同あなたを見たいと書いてよこした。最早あなたも少しは佛蘭西語を話されることゝ思ふ、自分の家の嫁は英語を話さず伴も兎角留守勝ちのために、

しばしあなたを御招きすることもしなかつたと書いてよこした。東京の姪からも手紙で、あなたにお目に掛るかとおよく尋ねよと書いてよこした。老婦人はこの手紙を英語で書いてよこした。あの書記のお母さんは一時は危篤を傳へられたほどで、病中に岸本はビヨンクウルを訪ねても老婦人には逢はずに歸つて来たことも有つた。

『佛蘭西へ来て一番最初に逢つた老婦人が、一番多く自分のことを考へて居て呉れる。』岸本は何かにつけてそれを感じたのであつた。

パントコオトの日も過ぎた頃、岸本は復たビヨンクウルから手紙を貰つた。

その時はお母さんの手でなくて、書記の手で、二三の親しい友達や親戚のものが茶に集るから岸本にも出掛けて来るやうにと、してあつた。

ベデカの案内記なしにはセエヌ河も下れなかつた頃に比べると、兎も角も岸本は水からでも陸からでもビヨンクウルに行かれるまでに旅慣れて来た。彼は好きな佛蘭西人の家族を見る楽しみをもつて電車でセエヌ河の岸を乗つて行つた。書記の家の門前に立つて鐵の扉を押すと、例の飼犬が岸本を見つけて飛んで来たが、最早吠えかゝりさうな姿勢は全く見せなかつた。

老婦人は草花の咲いた庭に出て居て、家の入口の正面にある廣い石階の近くに幾つかの椅子を置き

そこで客を待つて居た。その邊には長い腰掛椅子を置いてあつた。ところどころに樹の葉の影の落ちて居る午後の日の映つた庭の内で、岸本は老婦人や細君や茶に招かれて来て居る婦人の客などと一緒に成つた。佛蘭西の婦人を細君にする露西亞の音楽家といふ夫婦にも引合はされた。

『私も、もう岸本さんにお目に掛れまいかと思ひましたよ。斯様に丈夫に成らうとは自分ながら夢のやうです。』

それを老婦人は岸本に言つて聞かせた。

半死の病床から再び身を起した老婦人が相變らぬ古風な黒い佛蘭西風の衣裳を着け、まだいくらか自分で自分の年老いた體軀をいたはり氣味に庭の内を靜かに歩いて居るのを見ることは、岸本に取つても不思議のやうに思はれた。彼は斯の老婦人が財産を皆に分けて呉れ、遺言までもした後で、もう一度丈夫に成つたその手持無沙汰な様子を動作にも言葉にも見て取つた。そればかりではない、しばらく話して居るうちに、彼は斯の家の人達に取つてある眞面目な問題が起つて居ることを知つた。

## 八十

佛蘭西を捨て、日本の方へ行つてしまつた老婦人の姪の噂が出た。茶の會とは言つても其日は極く内輪のものだけの集りらしく、紅茶の茶碗を手にした人達があちこちの椅子に腰掛けて思ひ思ひに話して居た。その中で岸本は老婦人の口から、東京の方にあるマドマゼエルの結婚の話聞いた。老婦人は心配顔に、

「あの手紙を持つて来て御覽。」

と細君に言つた。細君は家の正面にある石階を上つて行つて、日本から來た手紙をそこへ持つて來た。

「お母さん、瀧といふ方ですよ。」と細君はマドマゼエルの手紙を見て言つた。

「岸本さん瀧さんといふ美術家を御存じですか。」と老婦人が訊いた。

「瀧といふ苗字の美術家なら二人あることは知つてますが、しかし私は直接にはよく知りませぬ。」

斯の岸本の答は一層老婦人を不安にしたらしかつた。

「岸本さんですらよくは御存じないと仰る。」

と老婦人は細君と眼を見合せて、姪が結婚するといふ美術家は奈何いふ日本人であらうといふ意を通はせた。佛蘭西の方に居てマドマゼエルの爲にほんとうに心配して居る人は、何と言つても斯の叔母さんらしかつた。其時岸本は、「姪が彼様して日本の方へ行つてしまつたのは、私が悪いのだ。私の落度だ、と言つて皆が私を責めます」と曾て老婦人が彼に言つたことを思ひ出した。事情に疎い外國の婦人の身をもつて、果して適當な配偶者を異郷に見出すことが出來たであらうか、斯うした掛念があり／＼と老婦人の顔に讀まれた。

「この瀧さんは巴里に遊學して被入しつた事も有るそうです。手紙の中に左様書いてあります。」と細君が言つて、マドマゼエルの手紙をひろひ讀みして聞かせる中に、岸本に取つては親しい東京の番町の友人の名が出て來た。番町の友人の紹介で、マドマゼエルがその美術家を知つたらしいことも分つて來た。

「日本で結婚するなんて、儀式は奈何するんでせう。宗教は奈何するんでせう——マドマゼエルも唯一人でさぞ困ることですらね。」

と細君が言へば、老婦人もその尾に附いて、

「可哀さうな娘。」

とつぶやいた。

「兎に角、日本の若い美術家も多勢巴里に来て居ることですし、私はその瀧さんのことを訊いて進ませう。マドマゼエルだつてしつかりした人ですから、下手なことをする氣遣ひはありませんよ。」

斯う岸本は老婦人や細君を言ひ慰めた。

間もなく主人と前後して、日本の辯護士がそこへ入つて來た。老婦人はその辯護士にも瀧といふ人の事を尋ねた。あだかも法律を談ずる日本の辯護士ともあるべき人が日本の藝術界の消息に通じて居ない筈はないといふ調子で、その辯護士は瀧の名も聞いたことがないと答へたので、老婦人は主人や岸本を前に置いて平素にない苛酷しい調子を出して言つた。

「お二人とも御存じが無い。」

主人はまた東洋の果にあるマドマゼエルの身を案じ顔に、黙つてお母さんの前に立つて居た。

## 八十一

岸本は自分を斯の佛蘭西人の家族に紹介して呉れたマドマゼエルの爲に、日本の空を慕つて行つたといふ可憐な人の爲に、出来るだけその瀧といふ美術家のことを調べて見て、遠く離れて心配して居る叔母さん達を安心させたいと思つた。ビョンクウルの家を辭して、ポプリエの並木の續いた岸づたひに河蒸汽の乗場へ下りて行く道すがら、彼は自分で自分に尋ねて見た。何故ビョンクウルの人達はあれほどマドマゼエルの結婚を心配するのであるうかと。

「相手方が日本人だからではないか——」

答はどうしてもそこへ落ちて行つた。船に乗つてからも岸本はあのマドマゼエルの異國趣味が日本人と結婚するところまで突きつめて行つたかと思ひやつた。

それから数日の後、岸本はマドマゼエルの配偶者に就いて好い話を聞き込んだ。在留する美術家仲間でも、最近にスエズ廻りで國の方から来た畫家の牧野が瀧のことをよく知つて居た。牧野は岡と懇意で、東京の番町の友人とも知合の間柄であつた。「老大を送り、美術學校の助教授を送り、其他岸本が知つて居るだけでも三人の若手の美術家を送つた『巴里の村』では、この牧野、西伯利廻りで来た小竹、其他二三の新顔を加へた譯であつた。

「瀧のやうな男の細君に成つたものは、そりや仕合ですよ。」

この牧野の言葉に力を得て、早速岸本はビョンクウル宛に好い報知を送つた。好い生立ちを有つた瀧の頼母しい人柄に就いて牧野から聞取つたことを書いて、マドマゼエルは選擇を過らなかつた。決して心配することは要らないと思ふと書添へて送つた。

書記のお母さんの返事は避暑地なるセエブル・ドロンヌの海岸の方から岸本の許へ来た。老婦人は岸本の方から言つて遣つたことの禮から書出して、俾は今巴里に居るが、しかし御手紙は自分にも讀めと言つて當地へ送つて来たから、自分から御返事する、いろ／＼難有かつたと書いてよこした。もしも自分の兄が——姪の實父が今日までも生きながらへて居たなら、奈何に彼が斯の結婚を考へたであらう、それを思ふと自分はただ／＼心に驚くばかりであると書いてよこした。しかし御

申越の様子では萬事好きさそうにも思はれるし、何等の助言をも姪から自分の許へは求めても来ないから、自分等は蔭ながらこの事の都合よく運ばれるのを望んで居ると書いてよこした。老婦人はまたセエブル地方の大きく美しいことを言ひ添へて、こゝへ暑を避けに來て居る幾多の家族は皆友達のやうであり、砂上に遊び戯るゝ子供を見るのも樂いと書いてよこした。兎角季候は雨勝ちであつたが、幸ひに日も輝いて來たと書いてよこした。あなたの老友よりもしてよこした。

## 八十二

思ひがけない人の心を読んだといふ心持で、岸本はビョンクウルの書記宛にもう一度手紙を書いてやつた。そんなにマドマゼエルの結婚談が心配になるなら、東京の番町の友人はマドマゼエルの力に成る人と思ふから、萬事あの友人に相談するやうマドマゼエルの許へ言つてやつたら可からうとした手紙を送つた。

斯の手紙は老婦人の方へ廻つて行つたと見え、折返しセエブルの海岸から返事が来た。姪のことで御心配をかけて済まなかつたと老婦人は書いてよこした。申すも心苦しいが、姪は我儘者で、彼女の好きなことしかした例がない、もと／＼彼女は極くきやしやに生れついたもので、彼女の母親も父親もあれまでに彼女が育つとは考へなかつたほどである、そして彼女の空想のまゝに彼女の好めるまゝにさせて置いて両親が黙つて視て居たといふのも、恐らく其原因は彼女が長いこと弱々しかつたところにあると思ふと書いてよこした。彼女は非常に富有な家に生れて、世間といふものを知らずに居る、随つて他の忠告を容れやうとはしない、何事も彼女が獨りで出来ると思ふならば、それが出来れば實に結構であると書いてよこした。なんでも瀧といふ方は巴里遊學中には姪からの手紙には非常に遠慮深い方だとしてあるが、彼女はその瀧さんが奈何なる種類の美術家であるやすらも報告することを忘れて居ると書いてよこした。もしまたあなたが倅宛に何か御知らせ下さるやうな事が有れば、倅は相變らず圖書館の方に通つて居るし、自分もあなたの御意見によつて番町の御友人とやりに御相談するやう姪の許へ只今別に書面を送るつもりである。しかしその御友人の反對を恐れたら、あるひは姪は御相談にも參らないかも知れないと書いてよこした。彼女は半死の床にある母親を捨て、たゞ／＼彼女の娯樂のために日本の方へ去つたものである。自分等は電報で彼女

の歸國を促したが、彼女が病める母を見舞ふために巴里へ着いた時は既に萬事が終つた後であつたと書いてよこした。彼女の我儘は考へて見るだに恐ろしい、自分等には彼女の心は分らないと書いてよこした。

斯の老婦人の手紙を前に置いて見ると、岸本は自分まで一緒に叱られて居るやうな氣を起した。何事も思つた通りにしか出来ないのは、あのマドマゼエルばかりでなくて、彼自身が矢張それであるから。しかし彼は心の中でマドマゼエルを辯護した。日本といふものは自分に取つては空想の郷でしたからね』とは老婦人の述懐ではないか。言はゞマドマゼエルは叔母さんの夢見たことを實際に身に行はうとした人ではないか。その人が日本に行き、日本人と結婚するといふ場合に、何故もつと同情のある心は持てないのであらうか。半死の床にある母親を捨て、佛蘭西を出たといふことはあるひは、マドマゼエルの落度かも知れないが、それほど思ひつめたところが無くして、單々東洋の空に向ふことが出来やうかと。

## 八十三

老婦人の手紙の中には可成苛酷しいことが書いてあつた。しかし知らない土地の人でそれだけ眞實のことを岸本のところへ書いてよこして呉れる人すら、めつたに無かつた。彼は異邦人としての自分の旅がそれほど土地の人達の生活から縁遠いものであることを知つて來た。諸國から巴里に集つて來る多くの旅人を相手に生計を營んで居るやうな人達の間に醸される空氣が、非常に懇慫なもので險しく冷いものを包んで居るやうな空氣が、慣れては知らずに居るほど職業的に成つてしまつたやうな空氣が、實に濃く彼の身を圍繞いて居ることを知つて來た。佛蘭西人の家庭を見て來た眼で自分の下宿を見る度に、何時でも彼は嘆息してしまつた。

岸本の下宿には高瀬といふ京都大學の助教授が獨逸の方から來て泊つて居た。この人の部屋は岸本の部屋と壁一重隔てた直ぐ隣りにあつた。窓一つあるその部屋へ行つて見ると、高いプラタマの

並木の枝が岸本の部屋で見るとよりも近く窓際に延びて來て居て、濃い葉の縁は早や七月の來たことを語つて居た。

『千村君の居た宿屋が見えますね。』

と岸本は思出したやうに言つて、青々とした葉裏から透けて見える向ふの旅館の建築物を眺めた。高瀬を岸本のところへ紹介してよこしたのも同じ大學の教授であつた。岸本に取つてはこの下宿の食堂でしばらく食事だけを共にした千村であつた。

『千村君も、よくそれでも彼様な宿屋に辛抱したと思ひますよ。と岸本が言つた。千村君が私に左様言ひましたつけ。「あなたの部屋の方は、まだそれでも羨ましい。是方の窓から見えますと、あなたの部屋の窓には一日日が映つて居ます」ツて。高い建築物ばかりで出來た町ですから、彼様いふ日の映らない部屋もあるんですね。ホテルだなんて言ふと好きそうですが、實際千村君には御氣の毒なやうでした。』

斯う話して居るうちに、向ふの旅館へ岸本の方から押掛けて行つて夜遅くまで互ひに旅の思ひを比べ合つたり、千村の方からも食事の度にこの下宿へ通つて來て話し込んで行つたりした時のことが岸本の胸に浮いて來た。

「千村君の居る頃には、懐郷病の話などもよく出ましたつけ。お前が西洋へ行つたら、必と懐郷病に罹る」と言はれて来たなんて、そんな話もありました。」  
 と復た岸本が獨逸の方に行つて居る千村の噂をすると、高瀬も何か思ひ出したやうに、  
 「西洋へ来て居るもので、多少なりとも懐郷病に罹つて居ないやうなものは有りませんよ。」  
 斯の高瀬の嘆息は、無暗と強がつて居るやうな旅行者の言葉にも勝つて、なつかしい同胞の聲らしく岸本の耳に聞えた。

## 八十四

高瀬は千村教授と同じやうに經濟の方面で身を立てた少壯な學者であつた。岸本が巴里で逢つた頃の千村に比べると、高瀬は獨逸の方で散々いろ／＼な思ひをした揚句に巴里へ来た人で、それだけあの教授よりは旅慣れて居た。高瀬は獨逸の方で見たり聞いたりしたさまざま／＼な旅行者の話を巴里

へ持つて来た。驚くべく激しい懐郷病に罹つた同胞の話なども高瀬の口から出て来た。ある留學生は高い窓から飛んで死んだ。ある人は極度のヒステリックな状態に墮ちた。その人は親切と物數奇とを同時に兼ねたやうな同胞の連に引立てられて、旅人に身をまかせることを糊口とするやうな獨逸の女を見に誘はれて行つた。突然その人は賤しい女を見て泣出したといふ。斯様な話を高瀬から聞いた時にも、岸本は笑へなかつた。

「酷いものですな。」と岸本が言つた。「巴里にあるわれ／＼の位置は、丁度東京の神田あたりにある支那の留學生の位置ですね。よく私はそんなことを思ひますよ。これでは懐郷病にも罹る筈だと思ひますよ。今になつて考へると、あんなに支那の留學生などを冷遇するのは間違つて居ましたね。」  
 「神田邊を歩いてる時分には左様も思ひませんでしたがあ。歐羅巴へ来て見てそれが解りました。」と高瀬も言つた。

「あの連中だつて支那の方では皆相當なところから來てる青年なんでせう。その人達が旅人扱ひにされて、相應な金をつかつて、しかもみじめな思ひをするかと思ふと、實際氣の毒になりますね。金をつかつて、みじめな思ひをするほど厭なものはありませんね。私が國を出て來る時に、「歐羅巴へ行つて見ると、自分等は出世したのか落魄して居るのか分らない」と言つた人も有りましたつ



け。』

思はず岸本は支那留學生に事寄せて、國を出る時には想像もつかなかつたやうな苦い經驗を、日頃の忍耐と憤慨とを泄らさうとした。彼はバスツウルの近くに畫室住居する岡や牧野や小竹のことなどを考へる度に、淫賣婦や裏店のかみさんのやうな人達と同じ屋根の下に畫作することを胸に浮べて、あの連中の實際の境遇を憐れみには居られなかつた。自由、博愛、平等を標語とするこの國には極く富んだものと極く貧しいものとが有るだけで、自分の郷國にあるやうな中位で快適な生活はないのかとさへ疑つた。

朝に晩に旅の思ひを比べ合ふ高瀬のやうな話相手を得て見ると、岸本は名狀しがたい心持が自分ばかりの感じて居るものでもなことを知つた。屋外へ歩き廻りに行く折などには、彼は町の附近に見つけて置いた自分の好きな場所へよく高瀬を誘つて行つた。天文臺の裏手にあたる靜かな並木の續いた道へ。ルキサンブルの美術館の裏手にある薔薇園へ。時にはまたゴブランの市場に近い貧しい町々の方へ。そして、詩と科學と同時にあるやうな巴里を客舎の窓から眺めて長い研究生涯の旅の途中にしばらく息を吐いて行かうとするやうな高瀬に、自分の身を思ひ比べた。

## 八十五

『お前の旅は他の人とは違ふだらう。お前は隣室の高瀬にまで隠さうとして居ることが有るだらう。お前はそれで枕を高くしてお前の寢臺に眠ることが出来るのか。』

斯ういふ聲が來て岸本を試みた。丁度町の角にあたる岸本の部屋は、産科病院の見える並木街に向いた方で高瀬の部屋に續き、モン・トロン行の乗台自動車の通る狭い横町に向いた方で今一つの部屋に續いて居た。その部屋の方は控訴院附の辯護士だといふ少壯な佛蘭西人が寢泊するだけに借りて居て、朝早く出ては晩に遅くなつて歸つて來た。日中は居ないも同様であつた。下宿人としては高瀬・岸本の外に年若な獨逸人が居るだけで屋の内は割合にひっそりとして居た。自分の部屋に居て聞くと、どうかすると隣室を歩き廻る高瀬の靴音が岸本の耳に入る。科學的な研究を一生の仕事として居るやうな高瀬も油繪具で室内のさまでも描いて見ることが慰みにして、巴里へ來た序に左

様した餘技を試みて居るらしい。壁越しに聞えて来る靴音は、その人に面と對つて居る時にも勝つて、隣の旅客の學者らしい倦怠を傳へて來た。

岸本は置戸棚の開き戸に張つてある姿見の前に行つた。旅に來て一層白さの眼立つやうに成つた彼自身の髪の毛がその硝子に映つた。しばらく彼は自分で自分のすがたに見入つて居た。何となく自ら欺かうとするやうな人がその姿見の中に居た。

『Dead secret.』

ふとそんな忌々しい言葉が英語で彼の口に浮んだ。誰にも知れないやうに自己の行跡を葬らうとして居る岸本は、成るべく他の事に紛れて、暗い秘密に觸れることを避けやうとした。遠く國を離れて一年あまり待つうちに、『何事も知らない人が一寸見たぐらゐでは分らない迄に成つたから安心して呉れ』といふ便りを姪から受取るほどに成つた。兄が黙つて居て呉れ、節子が黙つて居て呉れ、自分もまた黙つてさへ居れば、どうやら斯の事は葬り得られそうに見えて來た。兄が黙つて居て呉れないやうなことは無かつた。兄は一度引受けたことを飽くまでも守り通す性質で、人一倍體面を重んずる人で、おまけに斯の事は娘の生涯にも關ることであるから。節子が黙つて居て呉れないやうなことは無かつた。以前に使つて居た婆やをすら恐ろしいと言つて機嫌を取つて居ると書いてよこす

ほどの彼女であるから。して見ると自分さへ黙つて居れば——黙つて、黙つて——左様岸本は考へて、更に『時』といふものゝ力を待たうとした。もとより彼は自己の鞭を受けるつもりで斯の旅に上つて來た。苦難は最初より期するところで、それによつて償ひ得るものなら自分の罪過を償ひたいとは國を出る時からの願ひであつた。

『斯様な思をして、まだそれでも足りないのか。』

と彼は自分で自分に繰返して見た。

## 八十六

節子はめづらしく岸本の夢に入つた。寝苦しさのあまり、岸本が重い毛布を跳ねのけ、壁の側の寢臺の上に半ば身を起して周圍を見廻した時は、まだ夢の覺め際の恐ろしかつた心地が残つて居た。夏らしい夜ではあつたが、妙に寒かつた。岸本は寢衣の上に國の方から持つて來た綿入を重ねて、

寢臺を下りて見た。窓に近く行つて高い窓掛を開けて見ると、夜の明けがたの蒼白い静かな夢のやうな光線が彼の眼に映つた。街路もまだ響の起らない時で、僅かに辻馬車を引いて通る馬の鈴の音と、町々を警めて歩く巡査の靴音とが、暗いプラタマの並木の間に聞えて居た。明けそつで明けない短か夜の空は國の方で見るともすつと長い黄昏時と相待つて、異國の客舎にある思をさせる。隣室の高瀬も、佛蘭西人の辯護士もまだよく寢入つて居る頃らしかつた。岸本は喫み慣れた強い佛蘭西の巻煙草を一服やつて、めつたに見たことのない節子の來た夢を辿つた。乳腫で救開の手術をしたといふ彼女が胸のあたりを氣にして居る容子が岸本の眼にちらついた。あだかも一種の恐怖に満ちた幻覺によつて、平素はそれほど思はない物の意味を切に感ずるやうに。

「叔父さんは知らん顔をして佛蘭西から歸つて被入つしやいね。」

と東京淺草の家の方節子の言つた言葉、岸本が旅仕度でいそががつて居た頃に彼女の近く來て言つたあの言葉が、ふと胸に浮んだ。岸本は獨りでそれを思出して見て、ひやりとした。

窓掛を開けたまゝにして置いて、復岸本は寢臺に上つた。もう一度眠に落ちた彼が眼を覺ました頃は、大分遅かつた。その朝、恐ろしかつた夢の心地は、起出して机に對つた時でもまだ彼から離れなかつた。

「節ちゃんは奈何して彼様だらう。奈何して彼様な手紙を度々寄すんだらう。」

斯う岸本はそこに姪でも居るかのやうに獨りで言つて見て、溜息を吐いた。成るべく「あの事には觸れないやうに、それを思出させるやうなことさへ避けたくて居る岸本に取つては、節子から度々手紙を貰ふさへ苦しかつた。彼は以前にこの下宿に泊つて居た慶應の留學生からある獨逸語を聞いたことがある。その言葉が英語の *incast* を意味して居て、偏つた頭腦のもの、間に見出される一つの病的な特徴であると説明された時は、そんな言葉を聞いた丈でもぎよつとした。彼はまたある若い夫人に關係があつたといふ他の留學生の身上話を聞かされた時にも、その若い夫人が夫の旅行中に妊娠したといふ話を聞かされた時にも、そんな話を聞いた丈で彼は酷く心に責められたことがある。況してその年若な留學生が自己の美貌と才能とを飾るかのやうにその話を始めた時には、彼は獨りで激しい心の苦痛を感じずには居られなかつた。何故、不徳はある人に取つて寧ろ私かなる誇りであつて、自分に取つて斯様な苦惱の種であるのだらう、と嘆いたことさへあつた。この一年あまりといふもの、彼は旅に紛れることによつて、僅に心の眼を塞がうとして來た。

## 八十七

なつかしい故國の便りは繪葉書一枚でも實に大切に思はれて時々舊い手紙まで取出しては讀んで見たいほどの異郷の客舎にあつても、姪から貰つた手紙ばかりは焼捨てるとか引裂いてしまふとかして、岸本はそれを自分の眼の觸れるところに残して置かなかつた。蔭ながら彼は節子に願つて居た。旅にある自分のことなどは忘れて欲しい、生先の長い彼女自身のことを考へて欲しいと。その心から彼は成るべく節子宛に文通することを避け、彼女に書くべき返事は義雄兄宛に書くやうにして來た。しかし、もう好い加減に忘れて呉れたかと思ふ時分には、復た彼女から手紙が來て、その度に岸本は懊惱を増して行つた。神戸以來幾通となく寄して呉れた彼女の手紙は疑問として岸本の心に残つて居た。あの暗い影から——一日も離れることの無かつたほど附纏はれたといふあの暗い影から、漸く離れることが出來たと言つて書いて寄した時からの彼女は、何となく別の人である。あれ

ほどの深傷を負はせられながら、彼女は全く悔恨を知らない人である。岸本に言はせると、若い時代の娘の心をもつて生れて來た節子のやうな女が、非常に年齢の違つた、しかも鬢髪の既に半ば白い自分のやうなものに對つて、彼女の小さな胸を展げて見せるといふことが有り得るであらうかと。左様思ふ度に、岸本は節子が一人の男の兒の母であることを想つて見た。離れ易く忘れ易い男と女の間にあつて、何程その關係が根深いものであるかを想つて見た。そこまで想像を持つて行つて見なければ、彼女の書いて寄す手紙は奈何しても岸本の腑に落ちないふし／＼が有つた。

「子供を持つと彼様いふものかしら——」

何時の間にか岸本は思ひ出したくないことを思ひ出して、獨りで部屋の内に茫然と腰掛けて居た。彼は、節子が不義の觀念を打消すことによつて彼女の母性を護らうとして居るのではないかと疑つた。遠く離れて節子のことを考へる度に、彼は罪の深いあはれさを感じるばかりでなかつた。同時に言ひあらはし難い恐怖をすら感ずるやうに成つた。部屋の扉を外から叩く音がした。岸本は椅子を離れて扉を開けに行つた。

## 八十八

扉を叩いたのは岡であつた。新しい展覽會の催しがあると言つては誘ひに来て呉れ、マデラインの寺院に近い美術商店に新畫が掛替つたと言つては誘ひに来て呉れる斯の畫家の顔を見ると、岸本も氣を取直した。岡は國へ歸りたくないといふやうな思ひ屈したもつばかりでなく、何時でも血氣壯な若々しいものを一緒に岸本の許へ持つて來た。

「岡君、君はアベラアルのことを聞いたことは有りませんか。」  
と岸本が言出した。

古い歴史の多い巴里に居て見ると斯の大きな藏のやうな都からは何が出て來るか知れないといふことから始めて、岸本はアベラアルとエロイズの事蹟が青年時代の自分の心を強く引きつけたこと、巴里に來て見るとあのアベラアルが往昔ソルボンヌの先生であつたこと、あの名高い中世紀の坊さ

んあたりの時代から今のソルボンヌの學問の開けて來たこと、それから巴里のペエル・ラセエズの墓地にあの二人の情人の墓を見つけた時の驚きと喜びとを岡に語つた。

「この下宿には今、柳といふ博士も飯だけ食ひに通つて來て居ます。千村君の居たホテルに泊つて居ます。矢張京都の大學の先生でサ。その柳博士に、隣に居る高瀬君に、僕と、三人でペエル・ラセエズを訪ねて見ましたよ。なか／＼好い墓地でした。突當りには「死の記念碑」とした大理石の彫刻もあつたし、丘に倚つたやうな眺望の好い地勢で、禮拜堂のある丘の上からは巴里もよく見えました。散々僕等は探し廻つた揚句に、古い御堂の前へ行つて立ちました。それが君、アベラアルとエロイズの墓サ。二人の寢像が御堂の内に置いてあつて、その横手のところには文字が掲げてありました。斯の人達は終生變ることのない精神的な愛情をかはしたなんて書いてありました。まあ比翼塚のやうなものです。でも君、青苔の生えた墓石に二人の名前が彫りつけてゐるもあつて、それを訪ねて行くんなら比翼塚の感じもするが、どうして其様なものぢやない。男と女の寢像が堂々と枕を並べて居るから驚く。『流石にアムウルの國だ』なんて、高瀬君が言つて笑ひましたつけ。」

斯の岸本の旅らしい話は岡を微笑ませた。岸本は言葉を繼いで、  
「しかし、カトリックの國でなければ見られないやうな、古めかしい、物靜かな御堂でしたよ。御

参りに行くやうな人も君・澤山あると見えて、その御堂を圍繞いた鐵柵のところには男や女の名が一ぱいに書きつけて有りましたつけ。彼様いふところは西洋も日本も同じですね。皆あの二人の運命にあやかりたいんですね——」

そこまで話して行くと、岡は岸本の言葉を遮つた。

「岸本さん、あなたは奈何思ふんです。あなたの年齢になつても、まだ戀を想像するやうなものでせうか。」

「そりや君、年をとれば取つたで、ずつと若い時分とは違つた。複雑な戀愛の境地があるとは僕も考へるね。しかし、戀なんてことは最早二度と僕には來そうも無い。」

若かつた日の岸本は斯様な話を口にするさへ直ぐ顔が紅くなつた。まだ昔のやうに熱い涙の流れて來るやうなことはいつても、彼の頬は最早めつたに染まらなかつた。

## 八十九

「岸本さん、僕は御願ひがあつて來ました。」とその時になつて岡が言つた。「實は僕はまだ今朝から食ひません。」

岸本は眼を圓くして岡の方を見た。旅に來ては互に助けたり助けられたりする間柄で、斯様なことはめづらしくは無かつたが、あまりに率直な岡の調子が岸本を驚かした。彼は斯の話好きな畫家が「飢」を側に置いて、「戀」に就いて語つて居たことを知つた。

「岡君も有る時には有るが、無い時にはまた莫迦に無い人だねえ。」と岸本は心易い調子で言つて笑つた。「まあ、奈様にかしようぢやないか。そんなら君はシモンヌの家で晝食でもやりながら待つて居て呉れ給へ。僕は直ぐに後から出掛けて行きますから。」

岸本の旅も足りたり、足りなかつたりであつた。それは高瀬のやうな旅とも違つて、多くの月日の

間には故郷の方の事情の變つて行くところからも來、巴里に來て出来るつもりの仕事が兎角果せないところからも來て居た。「外國に來て困るのは、ほんとに困るんだからなあ。斯様なことを獨りで言つて見て、一步先に出て行つた岡の後を追つた。」

シモンヌの家へ行つて見ると、例の奥まつた部屋の片隅には亭主から給仕まで一緒に集つて、客商賣の家らしく可成遅い食卓に就て居た。シモンヌはますます可愛らしい娘になつて行つた。彼女は母親の傍に腰掛けて佛蘭西の麵麩などを頬張りながら喰つて居た。この家族の食事するさまを樂しげに眺めながら、同じ部屋に居て岡も簡単な晝食を始めて居た。そこへ岸本はいくらかの用意したものを持つて行つた。

牧野、小竹の二人がこの珈琲店に落合つてから、岡は餘計に元氣づいた。三人の晝家の中でも、小竹が一番年長で、その次が岡、牧野の年順らしかつた。牧野も、小竹も、岸本に取つては國の方で名前を聞いて居た人達であつた。牧野には、岸本はもつと激烈な人を想像して居た。逢つて見た牧野は存外やさしい、綿密な、しかも氣鋭な美術家であつた。光澤のある頬の色は紅味勝ちな髪のと好く調和して、一層この人を若々しく見せた。小竹には、岸本はもつと親しみ難いやうな人を想像して居た。旅で一緒に成つた小竹は直ぐにも親しめそうな、人を毛嫌ひするところの少い美術家

で、誰にでも好かれそうな沈着な性質を見せて居た。二人は巴里へ來てまだ月日も淺し、旅らしい洋服までが黒い煤にも汚れずにあつた。

「牧野は矢張牧野だ。もつと弱つてゝも來るかと思つたら、君の元氣なものには感心した。」と岡が言つた。

「そりや岡なんかとは違ふよ。」牧野は戯れるやうに。

「斯うして集つて見ると、矢張僕が一番年長かなあ。」と岸本が言つた。

「岸本さんなどは、もう老人の部ですよ。」と復た牧野が戯れるやうに言つて笑つた。

「でも、國の方に居ると斯様に皆集るやうなことも無いし、何と言つても旅は面白いね。」と小竹が言つた。「岡の最願なマドマゼエルもよく拜見したしサ——」

「兎に角旅に來ると、自分といふものを省るやうには成るね。」と岡はやゝ眞面目になつて答へた。しばらく岸本は斯の人達と一緒に楽しい時を送つて居た。彼は、何を見聞しても面白さうな心になだかまりの無い牧野や小竹を羨ましく思つた。

## 九十

國の方に残して置いて来た子供のことも心に掛つて、遠く離れて居る泉太や繁を養ふためにも、岸本は果したいと思ふ仕事を客舎で急がうとした。七月も下旬に入つた頃であつた。窓の外へは時々雷雨が来て、どうかすると日中に燈火を欲しいほど急に部屋の内を暗くすることも有つた。岸本が稿を繼がうとしたのは東京淺草の以前の書齋で書きかけた自傳の一部ともいふべきものであつた。部屋に居て机に對つて見ると、その稿を起した頃の心持が、まだ斯の旅を思立たない前に恐ろしい嵐の身に迫つて来た頃の心持が、あの淺草の二階でこれが自分の筆の執り納めであるかも知れないと思つた頃の心持が、岸本の胸の中を往來した。巴里の客舎にあつて、もう一度その稿を繼ぐことが出来るかと考へるさへ彼には不思議のやうであつた。

岸本がアウストリア對セルビア宣戰の布告を読んだのは、丁度その自分の仕事に取掛つて居る時で

あつた。一日は一日より何となく町々の様子がおだやかでなくなつて来た。不思議な、壓しつけるやうな、底氣味の悪い沈黙は町々を支配し始めた。岸本が毎日食堂で見る顔觸は、産科病院側の旅館から通つて来る柳博士に隣室の高瀬の二人で、若い獨逸人の客は最早見えなかつた。食堂へ集る度に、高瀬等と岸本とは互ひに不思議な顔を見合せるやうに成つて行つた。

来るべき大きな出来事の破裂を暗示するやうな不安な空氣の中で、岸本は仕事を急いだ。あのノルマンデイ生れの佛蘭西の作家が『聖アントワヌの誘惑』を起稿したのは普佛戰爭の最中で、巴里の籠城中に筆を執つたとやら。丁度あの作家は五十歳でその創作を思ひ立つたとやら。岸本はそんなことを旅の身に想像し、國の方に居る頃から友達とよく話し合つたあの作家が四十何年前には巴里で物を書いて居たことを想像し、それによつて自分を慰め勵まさうとした。時々彼は執りかけた筆を置いて、部屋の窓へ行つて見た。驟雨のまさに來やうとする前のやうなシーンとした静かさが感じられた。食堂の方へも行つて見た。そこには、おそろしく儉約に暮して居る下宿の主婦が、燈火を點け惜んで、薄暗い食堂の隅に前途の不安を思ひながらシヨンボリ立つて居た。

『岸本さん、御覽なさい、あれは何かの前兆です。』

と主婦は食堂の窓の側に立つて、黄昏時の空氣のために紅味勝ちな紫色に染まつた産科病院の建築



物を岸本に指して見せた。主婦の姪でリモオジュの田舎の方から来て居る髪の赤く縮れた娘も一緒にその窓から血の色のやうな夕映を眺めた。

『戦争は避けられないかも知れませんが。』

と言つて主婦は佛蘭西人らしく肩を動つて見せた。

アウストリア對セルビア宣戦の日から數へて六日目頃に、漸く岸本は國の方へ郵便で送るだけの仕事の一部を終つた。日頃往來の人の多い並木街も何となく寂しく、出歩くものすら少かつた。

### 九十一

平和な巴里の舞臺は實に急激な勢ひをもつと變つて行つた。今日動員令が下るか明日下るかと思はれて居た頃に、岸本は高瀬と連立つて白耳義行の人を北の停車場まで送りに行つた。序に東の停車場へも立寄つて見た。その停車場内の掲示の前で、佛獨國境の交通は既に斷絶し、鐵道も電線も不

通に成つてしまつたことを知つた。巴里を立退かうとしてその停車場に群がり集る獨逸人もしくは奥地利人はいづれも旅裝束で、構内の敷石の上へ直接に足を投出し汽車の出るのを待つて居た。岸本は自分の直ぐ眼前で突然卒倒しかけた労働者風の男にも遭遇した。荷物をかゝへた旅客、別離を惜む人々、泣き腫らした婦人の顔などまでが時局の急を告ぐるかのやうに見えた。岸本は高瀬と一茶緒に急いで下宿の方へ引返して實に容易ならぬ場合に際會したことを思つた取あへず岸本は自分の部屋に籠つて、國の方の義雄兄宛に形勢の迫つて來たことを書いた。今後のことは測り難いと書いた。子供のことは何分頼むと書いた。彼は東京にある二三の友人へもいそがしく手紙を認め

たが、西伯利亞經由とした故國からの郵便物は既にもう途絶して居ることをも知つた。夕方に、町へ出て見た。彼は早や大きな戦争を豫想して悲壯な感じに打たれて居るやうな市民の渦の中に立つた。そここゝに貼付された三色旗の印刷してある動員令、大統領の諭告、貨物輸出の禁止令などを讀まうとする人達が、今まで鳴を潜めて沈まり返つて居たやうな町々に満ち溢れた。何となく殺氣を帯びて來た人々の歩調も忙しげに岸本の胸を打つた。夫や、兄弟や、あるひは情人の身を案じ顔な婦女までが息をはづませてその間を往つたり來たりした。

僅か一週ばかりの間に岸本は斯様な空氣の中に居た。急激な周圍の變化はあだかも舞臺面の廻轉に

よつて劇の光景の一變するにも等しいものがあつた。名高い社會黨の首領で平和論者であつた佛蘭西人が戦争の序幕の中に倒れて行つたことは一層この劇的な光景を物凄くした。岸本は自分の部屋へ行つて獨りでいろ／＼なことを思つた。遠く故國を離れて來て闘はず動亂の中に立つた自分の旅の身に思ひ當つた。夜の十一時頃には雨が降出して、窓から外に見える並木も暗かつた。

## 九十二

壯丁といふ壯丁は續々國境に向ひつゝあつた。出征する兵士の並木街を通るやうな光景が既に二日ばかりも續いた。早獨逸人の斥候が東佛蘭西の境を侵したといふ報知すら傳はつて居た。下宿では主婦も、主婦の姪も食堂の窓のところへ行つて、街路を通る歩兵の一隊を見送らうとした。岸本が同じ窓に近く行つた時は、主婦は彼の方を振向いて、

「岸本さん、争はれないものぢや有りませんか。吾家に居た若い獨逸人の客が、ちゃんと戦争を知

つて居ましたぜ。親の許から手紙が來ると大急ぎで巴里を發つて行きましたぜ。確かに彼の男は獨探ですよ。」

と言ひながら自分の鼻の側へ人差指を宛行つて見せた。さも／＼彼様な客を泊めたことを口惜しく思ふかのやうに。

「ホラ、この町を毎日のやうにうる／＼した變な婦人が有りましたらう。皆さんで「カロリイン夫人」だなんて綽名をつけた婦人が有りましたらう。どうも彼の婦人の様子がをかしい／＼と思ひました。あれは偽の白痴ですよ。偽の婦人ですよ。白粉なんかをいやに塗けてると思ひましたが、今になつて考へると、あれは男の顔ですよ。」

と復た主婦が言つて見せた。疑心に驅られたこの佛蘭西の女は自分の下宿の客ばかりでなく、町を徘徊した白痴の婦人までも獨探にしてみました。

窓の外を通る兵士の群を見送つた眼で主婦の姪を見ると、岸本はリモオジュの田舎から出て來た此娘が紅く顔を泣腫して居るのに氣がついた。彼女の兄も許婚にあたる人も共に出征の途に上るであらうと主婦が岸本に言つて聞かせた。岸本は自分の部屋へ行つた。列をつくつて通る召集された市民の群はその窓の外に續いた。いづれも烏打帽子を冠り、小荷物を提げ、佛蘭西の國歌を歌つて、

並木のかげに立つ婦子供に別離の叫聲を掛けては通過した。一切の乗合自動車も軍用のために徴發され、モン・トオロン行の車の響も絶えた。十八歳から四十七歳までの男兒は皆この戦争に参加するとのことで、それらの人達を根こそぎ持つて行かうとするやうな大きな潮が流れ去らうとして居た。

巴里在留の外國人で立退きたいと思ふものは早く去れ、獨逸もしくは奥地利以外の國籍を有するものは在留を許すとのことであつた。この出來事につけても、從軍の志望がしきりに岸本の胸中を往來した。所詮國へは歸れないと思ふ心の彼は、進んで戦地の方へ出掛けたいと願つたが、身を苦めることばかり多くて思はしい通信を書くことも出來なからう、と思ひ直しては自己を制へた。戒嚴令は既に布かれ、巴里の城門は堅く閉され、旅行も全く不可能になつた。事實に於いて彼は早や歸城する身に等しかつた。

### 九十三

到頭岸本は一年餘の巴里を離れたいと思立つやうに成つた。動員令が下つてから三週間あまりといふものは何事も手に着かなかつた。昨日は白耳義ナミュウルの要塞が危いとか今日は獨逸軍の先鋒が國境のリイルに迫つたとか、左様いふ戰報を朝に晩に待受ける空氣の中にあつては、唯々市民と一緒に成つて心配を分け、在留する同胞の無事な顔を見て互ひに前途のことを語るの外は無かつた。隣室の高瀬が柳博士と連立つて英國倫敦へ向け戦亂を避けやうとする際に、岸本も同行を勧められたが、彼はむしろ佛蘭西の田舎へ行くことにして、北の停車場で高瀬と手を分つた。敵の飛行船が巴里に襲つて來た最初の晩は眠られなかつたといふ畫家の小竹も、その一行に加はつて八月の半には既に英吉利海峡を越えて行つた。

岸本が知つて居る僅かの佛蘭西人の中でも、ピオンクウルの書記はエルサイユの兵營の方にあり、

ラベエの詩人は巴里の自動車隊に加はり、プロツスの教授は戦地の方へ行つた二人の子息の身の上を案じつゝあつた。ピョントウルの書記からは特に兵營から岸本の許へ手紙を呉れ、われらは互ひに同じ聯合軍の側に立つと考へるのも嬉しいと書いてよこした。東京にある瀧新夫人(老婦人の姪)からも夫と一緒に佛蘭西へ來遊の意を傳へて來たが、この戦争では奈様することが出來やうと書いてよこした。岸本の隣室を借りて癡泊りして居た控訴院付の辯護士も何時の間にか見えなくなつた。例の『シモンヌの家』の珈琲店の主人、下宿の家番の亭主、これらの人達迄がいづれも戦地を指して出發した。

露西亞軍が東獨逸に入つたといふ戦報の傳はつた日は、岸本は自分の部屋に居て荷造りに日を暮した。彼の下宿では半ば引越しの騒ぎをした。主婦も、主婦の姪も、彼よりは一日前にリモオジュへ向けて發つて行つた。一部の旅行が許されるやうに成つたので、彼も下宿の人達に誘はれて主婦の郷里の方へ出掛けることにした。これを機會に佛蘭西の田舎をも見やうとした。戦争以來旅行も不自由になつた。旅客一人につき三十キロ以上の手荷物許されなかつた。早くやつて來るリモオジュの方の寒さを豫想して彼は自分の両手に提げられるだけの衣類を鞆に入れて持つて行かうとした。書籍などは皆置捨てゝる思ひをした。蟬の聲一つ聞かない巴里の町中でも最早何となく秋の空氣が通

つて來て居た。部屋の壁に残つた蠅は來て旅の鞆に取付いた。

寂しい夕方が來た。岸本は獨りきりで部屋に残つて、兎も角も一年餘を遠い旅に暮したことを思ひ、消息の絶え果てた故國のことを思ひ、せめて巴里を去る前に短い便りなりとも國の方の新聞宛に書送らうとして鞆の側に腰掛けて見ると、無暗と神経は亢奮するばかりで僅に東京の留守宅へ宛てた手紙を書くに止めてしまつた。宵の明星の姿が窓の空にあつた。時々その一點の星の光を見やうとして窓側に立つと、凄じい群集の佛蘭西國歌を歌つて通る聲が街路の方に起つた。夜の九時といへば町々は早寂しく、燈火の數も減り、餓えた犬の鳴聲が何となく彼の耳についた。この都會に残つて居る人達は奈何なるだらう、婦女は奈様な目に逢ふだらう、それを思ふと普佛戦争の當時巴里の籠城をした人達は暗い穴藏のやうな地下室に隠れて鼠まで殺して食つたと言はれて居るが、それと同じやうな日が復た來るだらうかとは、考へたばかりでも恐ろしいことであつた。翌朝の早い出發を思つて、彼はろく／＼眠らなかつた。

## 九十四

ドルセエの河岸の停車場から岸本は汽車で出掛けた。この田舎行には彼は牧野の外に巴里在留の三人の畫家をも伴つた。戦争は偶然にも巴里のやうな大きな都會の響からしばらく逃れ去る機會を彼に與へた。あの石造の街路を軋る電車と自動車と荷馬車との恐ろしげな響から。あの層々相重なる究屈な石造の建築物から。あの人を弱くするやうな密集した群集の空氣から。

同行五人の旅は汽車の中をも楽しくした。前年の五月に岸本がマルセエユからリオンへ、リオンから巴里へと向つた時は殆んど夜中の汽車旅であつたから、今度の車窓に映るものは初めて見るものゝやうであつた。彼は佛蘭西中部の平坦な耕地、牧場、それから森などを珍らしく見て行つた。オート、井エンヌ州に近づくにつれて故國の方の甲州や信州地方で見るやうな高峻な山嶽を望むことは出来ない迄も、一年餘を巴里に送つた身には久振で地方らしい空氣を吸ふことが出来た。途中の

停車場で負傷兵を満載した列車にも逢つた。戦地の方から送られて来たそれらの負傷兵は白耳義方面の戦ひの激しさを事實に於いて語つて見せて居た。

七時間ばかりもかゝつて岸本は連と一緒にリモオジュの停車場に着いた。丁度出征する軍人を見送るために町の人達が停車場の附近に集つて居る時で、生れて初めて日本人といふものを見るかのやうな土地の男や女が右からも左からも岸本等の顔を覗きて来た。

一日先にこの田舎町へ着いて居た巴里の下宿の主婦は停車場まで姪をよこして呉れた。主婦は姉にあたる人の家で牧野や岸本を待受けて居て呉れたが、まだ部屋の用意が出来なかつた。岸本等は停車場前の宿屋でその日を送ることにした。食事にだけ来いと言つて、夕方には主婦の甥子が使に來たので、五人の一行は町はづれの家の方へ歩いて行つた。日本人のめづらしい土地の子供等は後になり前になりしてぞろぞろと隨いて來た。岸本が巴里から一緒にやつて來た美術家の中には極旅慣れた人も居た。あまりに土地の子供等が煩く隨いて來て、どうかすると後方から駆け抜けるやうにしては五人の顔を見やうとするので、その畫家はわざと子供等の方へ大きな眼球を突き付けながら、

「御覽」

と戯れて見せたこともあつた。岸本等が着いたことは是程土地の人にはめづらしかつた。入口の庭

には葡萄棚があり裏には野菜畠のあるやうな田舎風の家で、岸本は巴里の方から来た主婦や主婦の姪と一緒に成つた。

『この一番年長の方が岸本さんです。こちらは牧野さんと仰つて矢張巴里に来て被入つしやる美術家です。』

こんなことを言つて、主婦は姉といふ人に岸本等を引合はせた。黒い佛蘭西風の衣裳を着けた脊の低いお婆さんは物靜かな調子で一々遠來の客を迎へた。

土地の子供の煩さかつたことは、葡萄棚に近く窓のある食堂で岸本等が楽しい夕飯に有付いた時にも石垣の外から覗きに来るものがあるくらゐであつた。斯うした場所にも關はらず、停車場前に戻り、そこに一夜を送つて、サン・テチエンヌ寺の塔を宿屋の窓の外に望みながら朝霧の中に鶏の聲を聞いた時は、實に彼は胸一ぱいに好い空気を呼吸することの出来る靜かな田舎に身を置き得た心地がした。

### 九十五

國を出て早や十五ヶ月ほどに成つた。十五ヶ月とは言つても岸本に取つては随分長い月日であつた。過ぐる十五ヶ月は三年にも四年にも當るやうに思はれた。彼はもう可成長い月日の間、故國を見ずに暮したやうに思つた。その間、日頃親しかつた人々の誰の顔を見ることも出来ず、誰の聲を聞くことも出来ずに暮したやうに思つた。彼は歩きづめに歩いてまで宿屋に辿り着くことの出来ないう旅人のやうに自分の身を考へた。この佛蘭西の田舎へは彼は心から多くの希望をかけて來た。何よりも彼の願ひは、たましひを落着けたいと思ふことであつた。どうやらその願ひが叶ひそうにも見えて來た。『君は斯様な田舎が好いのか。こゝにはブルタアニユの海岸に見つけるほどの野趣も無いではないか。左様かと言つて田舎の都會らしい潤ひにすらも乏しいではないか。こゝは思ひの外平凡な土地ではないか。』斯う巴里から一緒に來た美術家の一人が彼に向つて訊いたくらゐである。

それにも拘らずサン・テチエンヌ寺の立つ高い岡の上に登つてあの古い寺院を後背にした眺望の好い遊園の石垣の上から耕作と牧畜との地たるリモオジユの町はづれを眺めた日から、しみじみ歐羅巴へ来てから以來の旅のことが思はれた。井エンヌ河はその町はづれを流れて居た佛蘭西の國道に添ふて架けてある、石橋驛馬に引かせて河岸の並木の間を通る小さな荷馬車などが眼の下に見える。彼はその石垣の上からしばらく自分の宿とする田舎家までも見ることは出来なかつた迄も、耕地の多い對岸の傾斜に並ぶ佛蘭西の田舎らしい赤瓦の屋根を望むことは出来た。

佛國オート・井エンヌ州、リモオジユ町、バピロン新道、そこが岸本の牧野と一緒に宿をとつたところだ。彼は喇叭を吹いて新聞を賣りに来る女のあるやうな在郷臭い町はづれへ来て居た。その家の二階に沈着いて三日目に、彼は巴里にある岡から手紙を受取つて、非常に形勢の迫つたことを知つた。急いで書いたらしい岡の手紙の中には、「巴里に歸ることを止めらるべし。必ず、」としてあつた。巴里に在留する三人の美術家は英國へ逃れやうとして不可能となつたともしてあつた。

## 九十六

岡からは牧野岸本兩名宛で同時に別の手紙が来た。

「到頭巴里立退きの幕と成つた。既に佛蘭西政府は他へ移つたらしい。大使館でも昨夜書類の焼却などをやつて居た。昨日午後獨逸軍の飛行機が巴里市に六つの爆弾を落した。一つはガアル・ド・リオンに、一つは東の停車場に、一つはサン・マルタンの商店をこはした。最早巴里包圍は免れぬらしい。敵の騎兵は八十キロメートルの處まで来て居る。昨夜一同集合して最終の相談をして、今日の具合で英國へ渡れなければリオンに一同出發する。今日の中には兎に角巴里を出る。かゝる譯で君等の荷物も、無論吾儕のも其儘置捨てることにした。あゝ巴里も、わが巴里も、遂に獨逸の奴原に蹂躪せらるゝのか。小シモンヌが涙ぐんだのを見て巴里を離れるのは慚愧を感じる。僕には此處は旅の土だ。彼等には墳墓の地だ。感慨無量だ。」

巴里から同行した美術家仲間は斯の手紙を見てリオンへ向けて發つて行つた。リモオジュには牧野と岸本だけが残つた。三日ばかり経つと、巴里から最終の報告が来た。それを讀んで岸本は巴里の天文臺及びモン・パルナツスの附近にあつた二十一人の同胞を一組とした繪畫彫刻科學等の方面の人達が思ひ／＼にあの都を立退いたことを知つた。十一人は英國へ。一人は米國へ。二人はニスへ。一人はリオンへ。デイエツプ行の列車も明日の朝の三時が最後だとか一歩遅れれば籠城の外はないと言はれる中であつて、倫敦へと志した人々があるひはアーヴル經由か、あるひはブルタアニユのサン・モアかと、戦亂を避け感ふた光景がその報告で想像された。市街の夜の燈火が悉く消され、プウロンニユの森には牛、豚、羊の群が籠城の食糧の用意に集められたといふ巴里を美術家仲間では最終に去つたのは岡と今一人の彫刻家であつたらしいことをも知つた。在留した同胞の殆んどすべては既に巴里を去つたことをも知つた。

リオン行の美術家仲間からも汽車旅の混雑と不安とを岸本の許へ知らせて来た。それで見ると、車掌さへ行先を知らない列車に幾度か乗換へ六箇所の停車場で三時間あるひは六時間を待ち都合四十時間もかゝつて漸くリモオジュからリオンに辿り着くことが出来たとしてあつた。岸本等の宿へは、主婦の姉の娘夫婦にあたる人達が巴里から避難して来た。この人達は岸本等が七時間で来たリモオ

ジュまでの汽車旅に三十時間を費したと話した。巴里ばかりでなく北の國境の方からの多數な避難者の群は荷物列車にまで溢れて居るとの話もあつた。

「僕等はまだ好いとしても、獨逸の方に居た連中はさぞ困つたらうね——」

と岸本は隣室の牧野を見る度に言ひ合つた。佛獨國境の交通斷絶以來全く消息を知ることの出来なかつた伯林の千村教授や、ミュニツヒの慶應の留學生が倫敦に落ち延びたことも分つて来た。歐羅巴へ來てから岸本が知るやうに成つた同胞の多くは皆戦争の爲にちり／＼ばら／＼に成つてしまつた。

前途のことは言ふことが出来なかつた。しかし岸本と牧野とは宿の人達の厚意で比較的安全な位置に身を置くことが出来た。主婦は岸本のために何處からか机を借りて來て、夫を二階の部屋の窓の側に置いて呉れた。蔓の延びて來て居る葡萄棚を越して窓の外にはバビロン新道が見えた。岡の地勢を成した牧場はその新道まで迫つて來て居て、どうかすると赤い崖の上へ來る牛の顔が窓の硝子に映つた。



## 九十七

大風の吹き去つた後のやうな寂しさは斯の田舎にもあつた。働き盛りの男子は皆島や牧場を去り、馬は徴發され、小屋も空しくなり、陶器の工場も閉され、商家も多く休み、中學や商業學校の校舎まで戦地の方から送られて来る負傷兵のための收容所となつて居た。岸本の眼に觸れるものは何一つとして戦時らしい田舎の光景でないものは無かつた。野菜島には戦地にある子を思ひ顔な老人が耕して居た。麥島には婦女の手だけで收穫の仕末をしやうとする人達が働いて居た。井エンヌ河の岸に沿うて高く立つサン・テチエンヌ寺への坂道の角には、十字を彫り刻んだ石の辻堂がある。香華を具へた聖母マリアの像がその辻堂の中に祠つてある。體縮み背縫の跣つた老婆が堂の前で細長い蠟燭を賣つて居る。その蠟燭の日に並び點る火影には、黒い着物のまゝ石段の上にひさまづいて、戦地にある人のために無事を祈らうとするやうな年若な女も居た。

從軍の志望を果さなかつた岸本はこのリモオジュの町はづれへ來てから、巴里の方で見聞した開戦當時の光景や、在留する同胞の消息や、牧野等と一緒にあの都を立退くまでの籠城の日記とも言ふべきものを書いて故國に居て心配する人達のために報告を送らうとした。時々彼は筆を措いて家の周圍を歩き廻つた。梨・桃は既に熟し林檎の實もまさに熟しかけて居る野菜島の間を歩いて、紅い薔薇や白い夾竹桃の花のさかんに香氣を放つ石垣の側を歩いても、あるひは斯のあたりに多い羊の群の飼はれる牧場の方へ歩き廻りに行つても、彼は旅らしい心地を味ふに事を缺かなかつた。左様いふ折には彼はよく主婦の甥子に當るエドワアルをも伴つた。

「ムツシュウなんて彼のことを御呼びに成らないで、エドワアルと呼捨になすつて下さい。あれはまだほんの子供ですから。」

と主婦は十六ばかりになる少年を前に置いて言つたが、牧野も岸本も相變らず「ムツシュウ、ムツシュウ」と呼んで土地の事情に精しいその少年を朝晩に相手とした。牧野は近くにある牧場を選んで畫作に取りかゝつた。そこへ岸本が歩いて行つて見る度に、必と牧野の後に足を投出して眼前の風景と畫布とを見比べて居るエドワアルを見つけた。岡の地勢を成した牧場の内の樹木から遠景に見えるリモオジュの町々、古い寺院の塔などが牧野の畫の中に入られられてあつた。牛の踏みちら

した牧場の草地へはところ／＼に白い鶏の來るのも見えた。岸本がそこへ行つて草を藉き足を投出して見た時は、あの四時間も五時間も高瀬と一緒に警察署の側に立ちつゞけたやうな巴里の混亂から逃れて來たといふばかりでなく、佛蘭西の旅に來てからの初めての休息らしい休息をその井エンヌの河畔に見つけたやうに思つた。

## 九十八

二月近く静かな田舎に暮して見ると、歐羅巴へ來てから以來のことばかりでなく、國を出た當時のことまでが何となく岸本の胸に纏まつて來た。彼は左様思つた。假りに人生の審判があつて、自分も亦一被告として立たせらるゝといふ場合に當り、奈何なる心理を盾として自己の内部に起つて來たことを言ひ盡すことが出來やうか！。何物を犠牲にしても生きなければ成らなかつたやうな一生の危機に際會したものが、どうして明白な、條理の立つた、矛盾の無い、道理に叶つたことが言へ

やう。長い限りの無い惡夢にでも襲はれたやうにして起つて來た恐怖——親戚や友人に對してさへ制へることの出來なかつた猜疑心——眼に見えない迫害の力の前に恐れ戦いた彼のたましひ——夢のやうに急いで來た遠い波の上——知らない人の中へ行かうとのみした名のつけやうの無い悲哀——何といふ恐ろしい眼に遭遇したらう。何といふ心の狼狽を重ねたらう。何といふ一生の失敗だつたらう。斯の深い感銘は時と共にますます／＼はつきりとして來ることは有つても、薄らいで行くやうなものでは無かつた。しかし一時のやうな激しい精神の動搖は次第に彼から離れて行つた。不幸な姪に對する心地のみが残るやうに成つて行つた。その時になつて彼は心靜かに自分の行爲を振り返つて見た。どうかして生きたいと思ふばかりに犯した罪を葬り隠さう隠さうとした彼は、假令いかなる苦難を負はうとも、一度姪に負はせた深傷や自分の生涯に留めた汚點を奈何することも出來ないかのやうに思つて來た。彼は自分を責めれば責めるほど、涙ぐましいやうな氣にさへ成つた。

その心で、岸本は田舎家の裏にある野菜畠へ行つた。一寸ちの小徑を中央にして兩側に果樹の多く植てある畠の中を歩いて見た。そこは牧野とも一緒によく休みに來て、生つて居る桃を枝から直ぐにもぎ取つては味つたり、土の香氣を嗅ぎながら歩き廻つたりするところであつた。最早十月下旬の季節が來て居た。枝にある佛蘭西の青梨は薄紅く色づいたのが澤山生り下つて居たばかりでは無

く、どうかすると熟した果實は秋風に揺れて、まるで石でも落ちるやうに彼の足許へ落ちるのもあった。

その島は一方は町はづれの細い抜道に接し、他の一方は田舎風の赤い瓦屋根の見える隣家の裏庭に續いて居た。岸本は木の靴などを穿いて通る人の足音を一方の抜道の方に聞き、野菜島の中から傳はつて来る耕作の鋤の音を一方の裏庭の方に聞きながら、桃や梨の樹の間を歩いて新しい果實の香氣を嗅ぎ廻つた。あだかも成熟した樹木の生命を胸一ぱいに自分の身に受納れやうとするかのやうに。

オート・井エンヌの秋は何となく柔かな新しい心を岸本に起させた。彼は長い年月の間ほと／＼失ひかけて居た生活の興味をすら回復した。假令罪過は依然として彼の内部に生きて居るやうなものであつても、彼はいくらか柔かな心でもつて、それに對ふことが出来るやうに成つた。

## 九十九

四十日も要つて来る郵便物がポツ／＼届くやうに成つてから、岸本は戦時以來全く絶え果てた故國の消息をリモオジュの田舎に居て知る事が出来た、歐洲の戦亂は奈何に東京の方の留守宅の人達を驚かしたであらう。節子からもそれを心配した手紙を呉れた。岸本は彼女や子供に宛て、記念の繪葉書を送る氣に成つた。假令僅かの言葉でも斯うして姪の許へ書くといふのは、旅に來てからの岸本には珍らしいことであつた。彼は姪へ送るためにサン・テチエンヌ寺の遠景に見える繪葉書を選び、泉太へ送るために羊の群の見える牧場のついた繪葉書を選んだ。前のは井エンヌ河の手前から取つた風景で、樹木から道路から橋迄が彼には既に親しみのあるものであり、遠く古い石塔の聳え立つ寺院は彌撒などのある度によく彼の行つて腰掛ける場處であつた。後のは森を背景にした牧場のさまで、遠く森の間に一軒の田舎家も見えた。浅い谷間の草を食ひに來る羊の群、その柔和な長い耳、

細い足——左様したためづらしい佛蘭西の田舎の光景は國の方に留守居する子供等の眼を悦ばすであらうと思はれた。すこし行けばツウルウス街道(佛蘭西國道)に出られる彼の宿の周圍には、その繪葉書に見るやうな牧場が行先に展けて居た。

書いた葉書を投函するために岸本は宿を出た。日本人をめぐらしがつて煩く彼に附纏ふた界限の子供等も、二月ばかり経つうちに彼を友達扱ひにするものも多かつた。ある町はづれまで行くと、そこには繩飛びの仲間入を勧める小娘が集つて居た。ボン・ナフといふ石橋の畔まで歩いて行つて見ると、そこには彼の側へ来て握手を求める男の兒が居た。

「ムツシュウ。」

と呼んでよくその兒は走り寄つて來た。その兒は彼が外出する度に立寄つては腰掛ける橋畔の小さな珈琲店の一人子息であつた。

井エンヌ河はその石橋の下を流れて居た。休息の時を送らうとして岸本は水邊まで下りて行つた。岸に並んで洗濯する婦女の風俗などを見ても、田舎にある都會の町はづれとは思はれないほど鄙びたところであつた。石の上で打つ砧の音も靜かな水に響けて來た。しばらく岸本は戦争を外に砧の音を聞いて居た。その時、つと見知らぬ少年が彼の側へ来て聲を掛けた。

「異人さん、すこし日本の方のことを聞かせて下さい。」

見ると小學校の上の組の生徒か、あるひはこの町にある簡易な商業學校の下の組の生徒かと思はれるほどの年頃の少年だ。

「佛蘭西と日本と何方が奇麗でせう。日本の方が佛蘭西よりはもつと奇麗でせうか。」

斯の少年の間は岸本を困らせた。

「そんなことが君、比べられるもんですか。」と岸本が言つた。君の國だつて奇麗なところも有り、左様で無いところも有るでせう——僕等の國もその通りでさ。」

「日本の海は奈何な色でせう。」と復た少年が訊いた。「黄色でせうか。」

「どうして君、青い色でさ——透明な青い色でさ——それは美しい海ですよ。」

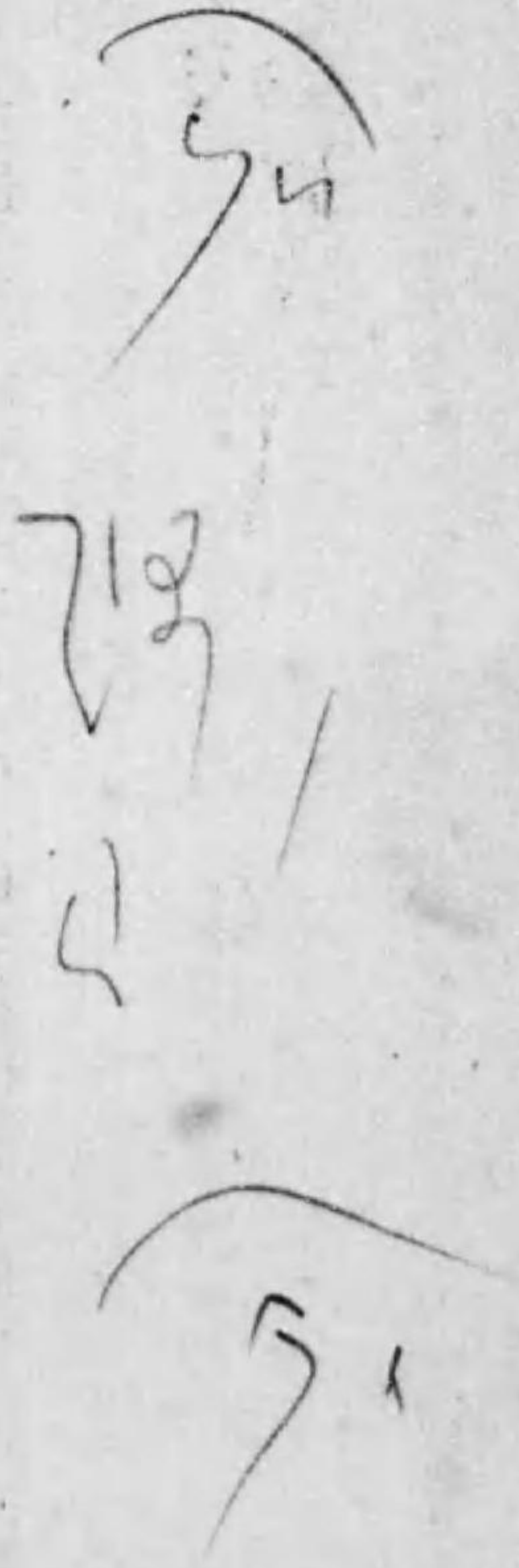
伶俐さうな少年の瞳に見入りながら岸本が左様答へると、少年はまだ見たことのない東洋の果を想像するかのやうに、

「透明な青い色か。」と繰返した。

カ  
2  
①  
カ

ある日、復た岸本は同じ橋の畔へ出た。黄ばんだプラタアヌの並木の葉は最早毎日のやうに落ちた。そこは佛蘭西國道の續いて来て居るところで、橋に近い石垣の上からは井エンヌ河の兩岸を望むことも出来、國道の並木の間にサン・テチエンヌ寺の石塔を望むことも出来るやうな位置にあつた。何となく疲れが出て仕事も休まうと思ふやうな日には、岸本の足はよくその橋の畔にある小さな珈琲店へ向いた。彼はそこで温めて呉れる一杯の濃い珈琲を味ひながら、往來の角に立つ石造りの水道栓の柱を眺め、水瓶を掲げて集る婦女を眺め、その邊に腰掛けて編物する老婆の鄙びた風俗を眺めては、獨りで時を送るのを樂みにした。白く斑に剝けたプラタアヌの太い幹の下あたりには、しきりと落葉を集め廻つて遊んで居る子供の群も見えた。その中には拾ひ集めた落葉を岸本の腰掛けて居るところへ持つて来て見せるほど慣れた二三の小娘もあつた。近くの菓子屋で子供の悦びそ

百



菓子を一袋奢つたのが始まりで、その小娘達は岸本を見掛ける度に側へ来るやうに成つた。

『皆好い兒だね。リモオジュのお土産にその葉を小父さんが貰つて行きませうか。』

と岸本が言ふと、小娘等は嬉しげに並木の下の方へ飛んで行つて、幾枚となく落葉を拾つては復た彼の側へ来た。小娘等が持つて来たプラタアヌの葉の中には八つ手ほどの大きさのものもあつた。

『こんなに大きいのは貰つても困る。一番小さなやつを拾つて来て下さい。』

と復た岸本が言ふと、子供等は馳出して行つて、『もう澤山、もう澤山』と彼の方で言つても聞入れないほど澤山なりリモオジュ土産を彼の前にあるテーブルの上に置いて見せた。その小娘等に誘はれて、こわく彼の方へ近づいて来たまだ馴れない一人の女の兒もあつた。

『もつと日本人の傍へお出なさいよ。』

と他の小娘達に手を引かれて、神経質らしいその女の兒も彼の前までやつて来たが、急に朋輩の手を振りほどいて一步引退つた。

『オ、可恐い。』

とその女の兒は氣味悪さうに岸本の方を見て言つた。

『お出。丁度あなた方と同じ年ぐらゐな子供を小父さんも國の方に残して置いて来ました。この小

神経質

父さんはそんなに可憐いものでは有りませんよ。」  
 斯う岸本は言つて、それから三人の小娘に歌を所望した。パトアと稱へる方言で出来た小唄のあることを彼は宿の主婦からも聞き、少年のエドワアルからも聞いて居た。斯の岸本の所望は歌好きな小娘達を悦ばせた。遠く泉太や繁から離れて来て居る旅の空で、無邪氣な子供の口唇から佛蘭西の田舎の俗謡を聞いた時は、思はず岸本は涙が迫つた。

## 百一

うちしめつた秋らしい空気の中を岸本はバビロン新道の方へ引返して行つた。丁度宿の前あたりで野外の畫作を終つて歸つて来る牧野と一緒に成つた。少年のエドワアルも牧野の代りに油繪具の箱などを肩に掛け、町はづれの國道の方から連立つて歸つて来た。

「復た好い畫が一枚出来ましたよ。」

エドワアルはそれを岸本に言つて見せ、入口の庭にある葡萄棚の下あたりを歩いて居る主婦にも言つて見せた。

「リモオジュのお土産が澤山お出来に成りますね、ほんとに牧野さんのはすん／＼描いておしまひなさる。」

と主婦が庭に居て言ふと、主婦の姉さんも臺所の窓から顔を出して年老いた婦人らしく皆の話すところを聞いて居た。その背後から顔を見せる主婦の姪もあつた。

岸本は牧野と一緒に入口の石階を上つて田舎家らしい樓梯の欄に添ひながら二階の方へ行つた。リモオジュの秋は牧野に取つても收穫の多かつた時で、引續き／＼出来た風景や静物の畫のまだよく乾かないのが二階の部屋の壁を一面に占領したくらゐであつた。岸本は牧野の部屋に行つて見る度に、先づその油繪具の乾く強い香氣に打たれた。牧野の旅の骨の折れるらしいことは岡に變らなかつたが、氣鋭で綿密な斯の畫家は岡が考へ苦んで思はしい製作も出来ずに居る間に、どしどし畫筆を着けながら疑問を解いて行くといふ風であつた。旅に来て岸本が懇意に成つた畫家の中でも、岡と牧野とはそれほど氣質を異にして居た。東京の方にある中野の友人の噂をしたり、倫敦へ戦亂を避けて行つた高瀬や岡や小竹の噂をしたり、時には夜遅くまで藝術上の談話に耽つたりして、田舎へ来て

から岸本が唯一人の親しい話相手であり、慰藉と刺激とを與へて呉れたのも斯の牧野であつた。野外の製作に疲れたらしい牧野が靴を脱ぐところを見て、岸本は自分の借りて居る部屋の方へ行つた。橋の畔から歸りがけに聞いて來た井エンヌ河の水聲はまだ彼の耳の底にあつた。彼は巴里の狭苦しい下宿に身を置いたよりも、その田舎家の二階の部屋の方に、反つて歐羅巴の旅らしい心持をしてみじみと味ふことが出來た。彼は親しみのある宿屋の燈火の前に漸くのことで自分を見つけた旅人のやうな氣もして居た。飾りとても無い部屋で、唯一つある窓のところへ行けば朝晩の露に濡れる葡萄の葉が見られ、寢臺の置いてある部屋の隅へ行けば枕頭に掛る黒い木製の十字架が見られ、暖爐の前に行けば幼い基督を抱いた聖母の畫像が羅馬舊教の國らしく壁の上を飾つて居るぐらゐに過ぎなかつた。しかし彼はその部屋に居る心を移して、あの澁み果てた生活から身を起して來た東京淺草の以前の書齋の方へ直ぐに自分を持つて行つて考へることも出來た。あの冷い壁を見つめたざり、身動きすることも、家のものと口を利くことも、二階から降りることすらも厭はしく思ふやうに成つた七年の生活の終りの方へ。あの光りと、熱と、夢のない眠より外に願はしいことも無くなつてしまつたやうな懷疑の底の方へ。あの深夜に獨り床上に坐して苦痛を苦痛と感ずる時こそ麻痺して自ら知らざる状態にあるよりはより多く生くる時であると考へたやうな自分の身のどんづまり

の方へ。あの『生の氷』に譬へて見た際涯の無い寂寞の世界の方へ。あの極度の疲勞の方へ。あの眼の眩むやうな生きながらの地獄の方へ。あの不幸な姪と一緒に墮ちて行つた畜生の道の方へ——不思議な幻覺が來た。その幻覺は佛蘭西の田舎家に見る部屋の壁を通して、夢のやうな世界の存在を岸本の心に暗示した。曾ては彼が記憶に上るばかりでなく、彼の全身にまで上つた多くの悲痛、厭惡、畏怖、艱難なる勞苦、及び戰慄——それらのものが皆燃えて、あだかも一面の焰のやうに眼前の壁の面を流れて來たかと疑はせた。

## 百二

寺院の鐘の音が響き渡つた。ツツサン（死者の祭）の日の來たことを知らせるその鐘の音は樹木の多い町はづれの空を通して、靜な煙の立登る赤瓦の屋根の間へも傳はり、黄葉の萎れ落ちた畠へも傳はつて來た。パピロン新道の宿でもその日は鉢植の菊などを用意し、主婦や少年のエドワアルが

墓参りのために近くにある村の方へ出掛けやうとして居た。

岸本がビョンクウルの老婦人の亡くなつたことを聞いたのは、斯の死者の祭に先だつ數日前であつた。今はエルサイエの兵營に自轉車隊附として働いて居るあの書記の留守宅から出た通知状は巴里の下宿の方を廻つて岸本の手許に届いた。それにはあの老婦人の遺骸が巴里のペエル・ラセエズの墓地に葬られるといふ事が認めてあり、子息さんの書記を始め親戚一同の名前がその下の方に精しい親戚関係と共に列記してあつた。例へば亡き人の姪のだれそれ、亡き人の義理ある兄弟のなにがしといふ風に。あの老婦人が大きな戦争の空氣の中で病み倒れて行つたといふ事は一層その死を痛ましくした。リモオチユの客舎で聞く寺院の鐘が特別の響を岸本の耳に傳へたのもそのためであつた。岸本は佛蘭西へ来て最初に自分を迎へて呉れたのがあの老婦人であつたことを思出した。異郷にある旅人として、自分のことを一番多く考へて居て呉れたのもあの老婦人であつたことを思出した。王朝時代の昔を忘れかねて居たやうなあの佛蘭西の婦人が心の中心を失つた結果として東洋諸國に對する夢のやうな憧憬を抱いたのか、奈何か、その邊までは彼にも言ふことが出来なかつたが、兎に角趣味性の發達した、生れついて女らしい徳のある、惜しい人であつたことを思出した。全く佛蘭西の言葉も知らずに旅に上つて來た彼が異邦人としての沈黙から紛れる方法もなかつたやうな折

にも「あなたは急いで佛蘭西語を學ぶが可い、もしあなたが僅かの書籍でも讀み得るやうに成ればそれほどの無聊を感じないで済むであらう、自分が書き送る斯の數行の言葉でもあなたを慰めることが出来れば仕合せである」などといふ手紙を寄せて勵まして呉れたのもあの書記のお母さんであつたことを思ひ出した。「斯の悲しい戦争が一日も早く終りを告げることを心から願つて居る」といふ意味の言葉で結んだセエブル出の手紙があの老婦人から貰つた最後の消息であつたことを思ひ出した。

知らない國の人が亡くなつたとも思はれないやうな力落しを感じながら、岸本は獨りでサン・テチエンヌの古い寺院の方へ歩いて行つた。

## 百三

丁度死者のための大きな彌撒が行はれて居るところであつた。并エンヌ河の岸に添ふて高く岡の上



に立つその寺院は、ゴシック風の古い石の建築からして岸本の好ましく思ふところで、まるで樹と樹の枝を交叉した林の中へでも入つて行くやうな内部の構造まで彼には親しみのあるものと成つて居た。よく彼はそこへ腰掛けに來た。その日もあの亡くなつた老婦人の生涯を偲ぶうためばかりでなく、しばらくその静かな建築物の中で自分のたましひを預けて行くことを楽しみにした。あだかも樹蔭に身を休めて行かうとする長途の旅人のごとくに。

大理石の水盤で手を濡らし十字架のしるしを胸の上に描きながらその日の儀式に参列しようとする婦人の連は幾組となく岸本の側を通つた。戦時以來初めての死者の祭のことで、負傷した佛蘭西の兵士等まで戦友を弔ひ顔に集つて來て居た。羅馬舊教の寺院には何等かの形で必ず表し掲げてある『十字架の道』——その宗教的な繪物語の盡きたところまで右側の廻廊について奥深く進んで行くところ、そこに空いた椅子があつた。岸本は高い石の柱の側を選んで、知らない土地の人達と一緒に腰掛けた。古めかしく物錆びた堂の内へ響き渡る少年と大人の合唱の肉聲は巨大な風琴の樂音と一緒に成つて嚴肅に聞えて來て居た。丁度暗い森の樹間を通して洩れる光のやうに、聖者の像を描いた高い彩硝子の窓が紺青、紫、紅、緑の色にその石の柱のところから明るく透けて見えて居た。

祭壇の方から香つて來る没薬と乳香の薫は何時の間にか岸本の心を誘つた。彼は斯うした羅馬舊教

の寺院の空氣の中に實際に身を置いて見て、あの人間の醜惡を覗つくした末に修道院の方へ歩いて行つたばかりでなく終には僧侶に等しい十字架を負ふ人と成つたといふ極端な近代人の生涯を想像して見た。彼はまた、あの男色の關係すらあつたと言ひ傳へらるゝ友人との争闘より牢獄にまで下つた末にデカダンスの底から清淨な智慧の眼を見開いた名高い佛蘭西の詩人の生涯を想像して見た。

#### 百四

合唱の聲が止むと、大きな風琴の響のみが天井の高い石の建築物の内部に溢れた。やがて白い法服を着けた年とつた僧侶が多勢の信徒を見下すやうな位置にある高い説教臺の上に立つた。戦時のツツサンの祭に際會して死者を弔ふやうな説教が夫から可成長く續いた。岸本の心は慷慨な口調を帯びた僧侶の説教の方へ行き、王冠の形した古めかしい説教臺の方へ行き、その説教臺と相對した位置にある耶穌の架像の方へ行つた。しかし彼は何時の間にかそんなことを忘れてしまつた。彼は、

赤い法服を着け金色の十字架を胸のあたりに掛けた二三の老僧や黒い法服を着けた十幾人かの中年の僧侶が祭壇の前に並んで居ることも忘れ、白い冠りものを冠つた尼僧が教へ子らしい女生徒を引連れて聴衆の中に混つて居ることも忘れ、つい側に腰掛けた黒づくめの風俗の婦人達が説教に耳を傾けて居ることも忘れ、三本づゝ並んでとぼる長い蠟燭の火が祭壇のあたりをかゞやかして居ることも忘れてしまった。唯彼は石の柱の側に黙然と腰掛けて、假令僅の間なりとも「永遠」といふものに對ひ合つて居るやうな旅人らしい心持に歸つて行つた。

傾きかけた秋の日は高い岡の上に立つ寺院の窓を通して堂内の石の柱に映つた。窓といふ窓の彩硝子は輝いた。あるひは十字架を花の環の形に、あるひは菱形に、あるひは圓形に意匠したその窓々の尖端、或ひは緑と紅との色の中心形に描かれてある聖者の立像、それらが皆夕日に輝いた。斯うしたゴシック風の古い建築物の内部にあつては、その中に置かれた羅馬舊教風な金色に鍍た裝飾も左程目立つては見えなかつた。あらゆる石の重みと、線と、組立とが高い天井の下に集められて、一つの大きな諧調を成して居た。日は長い儀式の中で次第に暮れて行つた。窓々に映る夕日も消えて行つた。あだかも深い林の中に消えて行く光のやうに。そこには眼ばたきするやうに輝いて來た室内の燈火と、時々響き渡る重い入口の扉の音と、嚴肅に沈んで行く黄昏時の暗さが残つた。

岸本がこの寺院を出て、ボン・ナフの石橋の畔へかゝつた頃は、まだ空はいくらか明るかつた。井エンヌ河の兩岸にあるものは皆水に映つて居た。彼は牧野と二人でのリモオジユの滞在も最早僅に成つて來たことを思つた。二度と斯うした佛蘭西の田舎に來て好きな寺院に腰掛ける時があらうとも思はれなかつた。バピロン新道の宿を指して歩いて行く途すがら、彼は斯の田舎の都會にある他の寺院にサン・テチェンヌを思ひ比べて見た。濃み沈んだ羅馬舊教の空氣の中にあつて、何程の「人」の努力があつた古いサン・テチェンヌの寺院を活かして居るかを想像して見た。

## 百五

リモオジユには岸本は葡萄の熟するからやがて酒に醸されるまで居た。マルヌの戦ひも敵軍の總退却で終り、巴里包圍の危険も去り、此町へ避難して來た人達も最早大抵歸つて行つた。戦時の不自由は田舎に居るも巴里に行くも牧野や岸本に取つて殆ど變りが無かつた。宿の主婦は姪を連れて復

た巴里の方へ歸らうとして居た。牧野も同時にこの町を引揚げやうとして居た。

「僕は一步先に出ます。こゝまで来た序にポルドオの方を廻つて見て來ます。君等は巴里の方で待つて居て呉れたまへ。」

この話を岸本は牧野にした。

早や毎朝のやうに霜が來た。暖爐には薪を焚くやうに成つた。彼はこの田舎で刺激された心をもつて、もう一度巴里の空氣の中へ行かうとして居た。旅の序に、日頃想像する南方の佛蘭西をも見るといふ樂みを胸に描いて居た。そこでポルドオを指して出掛けた。開戦當時のやうな混雜には遭遇しないまでも、改札口のところに立つ警戒の兵士に警察で裏書して貰つて來た戦時の通行券を示すやうな手数は要つた。

リモオジュの停車場まで送つて來た牧野や少年のエドワアルと手を分つてからは、彼は獨りの旅となつた。やがて彼の乗つた汽車はリモオジュの町はづれを通過した。二月半の滞在は短かつたとは言へ、彼は可成樂しい氣の置けない時をそこで送つたことを思ひ、歐羅巴へ來てから此方ほんとうに溜息らしい溜息の吐けたのもそこであることを思ひ、よく行つて草を藉いた牧場にも、赤々とした屋根や建築物の重なり合つた對岸の町々にも、リモオジュ全體を支配するやうなサン・テチエン

ヌの高い寺院の塔にも、別離を告げて行かうとした。汽車の窓から井エンヌ河も見えなくなる頃は秋雨も歇んだ。

岸本は全く見知らぬ佛蘭西人と三等室に膝を突合せて氣味悪くも思はない迄に旅慣れて來たことを感じながら、汽車の窓に近く身を寄せて秋のまさに過ぎ去らうとして居る佛國中部の田舎を見て行つた。彼は雨あがりの後の黄ばんだ雜木林を眺めたり、丘つゞきの傾斜に白樺、樺、栗などの立木を數へたりして乗つて行つた。時としては線路に添ふた石垣の上に野生の萩かとも見まがふ黄な灌木の葉の落ちこぼれて居るのを見つけて、國の方の東北の汽車旅、殊に白河あたりを思出した。その葉の色づいたのはアカシヤの若木であつた。枯草を満載した軍用の貨物列車、戦地の方の兵士等が飲料に宛てるらしい葡萄酒の樽を積んだ貨物列車も、幾臺となく擦違つて窓の外を通つた。

オート・井エンヌから隣州のドルドオニユへ越え、コキユといふ小さな田舎らしい停車場を過ぎ、南へ行く旅客はベリギユウで乗換へた。ポオブイエの附近を乗つて行く頃から、車窓の外に見える地味も變り、人家も多くなり、青々とした野菜畠すら望まれるやうに成つたばかりでなく、車中の客の風俗からして變つた。それらの人達の話し合ふ言葉の訛や調子を聞いたばかりでも岸本は次第に西南の佛蘭西に入つて行く思ひをした。ジロンド州の地方を通過して、暗くなつてガロンヌ

河を渡つた。平時ならば六七時間で来られそうな路程に十一時間も要つた。彼は汽車の窓を通して暗い空に映る無数の燈火を望んだ。そこが佛蘭西政府と共に日本の大使館までも移つて来て居るポルドオであつた。

是程楽しみにしてやつて来れば、それだけでも澤山だ、とは岸本が自分で自分に言つて見たことであつた。彼には南方の佛蘭西を想像して来た樂みがあり、そこまで動いたといふ樂みがあつた——假令ポルドオで彼を待受けて居て呉れたものは二日とも降り続いた雨ではあつたが。ポルドオのサンジャン停車場前の旅館では、何がなしに彼は國の方へ宛て、旅の便りを書送りたいと思ふ心が動いた。やゝ單調ではあつたが汽車の窓から望んで来たポルドオ附近の平野、見渡すかぎり連り續いた葡萄畑、それらの眺望はまだ彼の眼にあつた。幾度となく彼は旅館の一室で暖爐の前に紙を展げて見たり、部屋の内をあちこちと歩いて見たりして、兎角思ふやうに物書くことも出来ないのを残念に思つた。部屋の壁には小さな海の畫の模寫らしい額が掛つて居た。それを見てさへ彼の胸には久しぶりで海に近く来た旅の心持を浮べた。

深い秋雨に濡れながら岸本は町を出歩いた。そこにある大使館を訪ねて巴里の方の様子を聞くために。あるひはサン・タンドロの寺院を見、あるひはポルドオの美術館などを訪ねるために。時とする

と新たに戦地の方へ向はうとする歩兵の群が彼の行く道を塞いだ。灰色が、つた青地の新服を着けた兵士等の胸には黄や白の菊の花が挿され、銃の筒先にまでそれが翳されてあつた。夫を、兄弟を、あるひは情人を送らうとして、熱狂した婦人がその列に加はり、中には兵士の腕を擁へて搔口説きながら行くのも有つた。

ガロンヌ河はこの都會の中を流れて居た。岸本に取つては縁故の深いあの隅田川を一番よく思ひ出させるものは、リオンで見て来たソオンの谿流でもなく、清いセエヌの水でなく、リモオジュを流れる并エンヌでなくて、雨に濁つたこのガロンヌの河口であつた。そこには岸本の足をとどめさせる河岸の眺めがあつたばかりでなく、どうかすると雨が揚がつて、對岸に見える工場の赤屋根には薄く日が映つた。ちぎれた雲の間を通して、度々日本の方で見るやうな青い空の色を望むことも出来た。つくづく岸本は郷國を離れて遠く来たことを思つた。

## 百六

再び巴里を見るのは何時の事かと思つて出て来たあの都の方へもう一度歸つて行く楽しみを思ひ、新しい言葉の世界が漸く自分の前に展けて来た楽しみを思ひ、ポルドオから岸本は夜汽車で發つた。今度歸つて見たら奈何いふ冷い風があつた。都を吹き廻して居るだらう、幾人の同胞に逢へることだらう、と彼は思ひやつた。窓の外は暗し、車中で眠らうとしても碌々眠れなかつた。同室の乗客が皆ひどく疲れた頃に汽車の中で夜が明けかゝつた。

朝に成つて反つて氣の緩んだ岸本はいくらかでも寝て行かうとした。一眠りして眼を覺すと、その度に彼は巴里が近くなつて来たことを感じた。心持の好い朝で、何を眺めても眼が覺めるやうであつた。次第に巴里の近郊から城塞の方へ近づいて行つた。車窓に映る建築物の趣なぞも何となく變つて来た。リモオジュあたりで見えて来た地方的なものが堅牢な都會風の意匠となり、二層三層の高

さが五層にも六層にもなり、城廓のやうに聳えた建築物と建築物の間には積重ねた煉瓦の断面のあらはれたのが高く望まれるやうに成つた。

朝の八時頃に岸本はドルセエ河岸の停車場に着いた。荷物と一緒に乗つた辻馬車の中から彼は右を眺め左を眺めして行つた。ポルドオの公園の方で古池の畔に深い秋を語つて居た黄ばんだ柳の葉を眺め、南國的なマグノリアの生々とした濃い緑を眺めて来た眼には、町々は早や全くの冬景色であつた。並木も枯々として居た。冷い街路を踏んで行く馬の蹄の音までが耳についた。彼は思つたよりも寂寞として巴里に歸つて来たことを感じた。

産科病院の前へ着いて取りあへず岸本は家番のかみさんを見舞つた。入口の階段に近く住む家番のかみさんは彼を見ると、いきなり部屋から飛んで出て来た。

『岸本さん。』

と言つて彼の前に立つた家番のかみさんの顔には、籠城同様の思ひをしてすつと巴里に居た人達の心があり／＼と讀まれた。

變らずにある下宿を見るのも岸本には嬉しかつた。主婦も、主婦の姪もリモオジュから先に着いて居て岸本を迎へて呉れた。彼は廊下の突當りにある自分の部屋を見に行つた。二月半ほど留守にし

た間に、置捨て、行つた荷物でも書籍でも下手に觸られないほどの塵埃が溜つて居た。主婦の姪は部屋を覗きに來て、

「まあ、何といふ塵埃でせう。これでも叔母さんと二人で昨日は一日掃除に掛つて居たんですよ。と言つて笑つて、岸本の留守中に届いた國からの小包や新聞や雑誌を食堂の方から運んで來て呉れた。その中には長い日數をかけて、よくそれでも失はれずに届いたと思ふものもあつた。岸本は部屋の窓へ行つて見た。暗い巴里の冬が最早その並木街へやつて來て居た。往來の人も稀であつた。向ふの産科病院の門、珈琲店、それから柳博士や千村教授がしばらく泊つて居た旅館の窓、何もかも眼に浸みた。

## 百七

隣室もひつそりとして居た。控訴院附の辯護士でその部屋を借りて居た少壯な佛蘭西人は召集され

て行つたぎり宿の主婦のところへ音も沙汰も無いといふことであつた。「可哀そうに、あの辯護士もひよつとすると戦死したかも知れませんか」と主婦は岸本に話し聞かせた。隣室にはあのノルマンディあたりの生れの人にも見るやうな佛蘭西人が残して置いて行つた蔵書や雑誌の類がそつくり其儘にしてあつた。岸本はその空虚な部屋を覗いて見て、悽慘な戦争の記事を読むにも勝る恐るべき冷たさを感じた。その冷たさが壁一重隔てた自分の部屋の極く近くにあることを感じた。岸本は屋外へ出て日頃よく行く店へ煙草を買ひに寄つて見た。その亭主はまた片脚失ふほどの負傷をして今は戦地の病院の方に居るとのことであつた。

午後には牧野が訪ねて來た。リモオジュからリオンの方へ分れて行つた美術家の連中が既に巴里へ歸つて居ることを岸本は牧野の話で知つた。ずつと巴里に残つて居た一二の畫家もあつたことを知つた。

「牧野君、町を見に行かうぢや有りませんか。斯様に巴里が寂しくなつてるとは思ひませんでしたね。」

「リオンの連中が歸つて來た時はもつと寂しかつたそうです。」

岸本は牧野と二人で話し／＼宿を出た。サン・ミツセルの通りまで行つて、例の『シモンヌの家』の

人達を見に一寸立寄つた。その亭主は白耳義方面の戦場へ向つたぎり行方不明に成つてしまつた。

非常な恐怖が過ぎて行つた後のやうな寂しさは町々を支配して居た。岸本は牧野と並んで長いサン・ミツセルの通りをセエヌ河の方へと歩いて行つて見た。外国人は去り、多くの市民も避難し、僅の老人と婦人と子供とだけが日頃人通りの多いあの並木街を歩いて居た。牧野はずつと巴里に残つて居たといふ畫家の話を歩き／＼岸本にして聞かせた。一時はこの都も獨逸軍の包圍を覺悟し、避難者のためにあらゆる汽車を開放したといふ話をした。麵麩などを乞ふものには誰にでもたゞで呉れたといふ話をした。多くの市民は乗るものもなく、皆徒歩で立退いたといふ話をした。それらの人達が夜の街路に續いて、明方まで絶えなかつたといふ話をした。

シヤトレエの廣小路まで歩いた。そこまで行くと、いくらか巴里らしい人の往來が見られた。二人はセエヌの河岸についてサン・ルイの中の島へと橋を渡り、そこから古いノオトル・ダムの寺院の裏手が望まれるところへ出た。石垣の下の方には並んで釣をして居る黒い人の影も見えた。セエヌの水も寂しさに流れて居た。

「冷たい石の建築物に、黒い冬の木——いかにも巴里の冬らしい感じですね。」

と牧野は畫家らしい觀察を語つた。岸本はこの人と連立つて枯々とした並木の間を影のやうに動いた。石造の歩道を踏んで行く自分等の靴音の耳につくの聞きながら、今は巴里にある極く僅の日本人の中の二人であることを感じた。

## 百八

「早く英吉利を切揚げたまへ。斯の沈痛な巴里を味ひたまへ。」

斯う岸本は高瀬へ宛て、手紙の端に書いて送つた。倫敦にある高瀬から其後の様子を尋ねてよこした時の返事として。

この周囲の寂しさにも關らず、岸本はもう一度自分の部屋の机に對つて見た。灰燼の巷と化し去ることを免れた旅窓の外に見える町々も、變らずにある部屋の内の道具も、もう一度彼を迎へて呉れるかのやうに見えた。ピアノを復習ふ音が復た聞えて來た。例の無心な指先から流れて來るやうな

その幽かなメロディばかりでなく、床を歩き廻る小娘らしい靴音までが階上から聞えて来て居た。心の悲哀を忘れるために學び始めた新しい言葉の芽も一息に延びて来た。讀まう／＼としても讀めずに藏つて置いた書籍を取出して見ると、何時の間にか意味が釋れるやうに成つて居た時は、彼は青年時代の昔と同じやうな嬉しさを感じた。大きな藏の中にでも納つてある物のやうな氣がして居たラテン民族の學藝の世界は遽かに彼の前に展けて来た。あそこに詩の精神がある、こゝに歴史の精神がある、と言ふことが出来るやうに成つた。何等の先入主に成つたものをも有たなかつた彼に取つては、殆ど應接するに暇の無いやうな斯の新天地の眺望ほど旅の不自由を忘れさせるものはない。かつた。

異郷の生活を続けやうとする心を移して、岸本は遠く國の方にある自分の身内のものゝことを思ひやつた。足掛二年の月日は遠く離れて居る親戚の境遇をも變へた。姪の愛子は夫に随つて樺太の方に動いて居た。根岸の嫂は臺灣の方へ出掛けて行つて民助兄と一緒に暮して居た。恩人の家の弘が結婚したことも、鈴木の子が郷里の方で病死したことも、岸本は旅に居る間に知つた。

何となく速く成つて来た國の方の消息の中で、東京の留守宅の様子を岸本のところへ精しく知せてよこすのは節子であつた。彼女からの便りで、岸本は義雄兄の家族に托して置いて来た二人の子供

の成長して行くさまを思ひやる事が出来た。「あなた方の身體は鐵ですか」と丈夫な子供等に向つて言暮して居るといふ嫂の言葉、鶴竿を手にして蜻蛉釣りに餘念がないといふ泉太や繁の遊び廻つて居る様子——耳に聞き眼に見るやうにそれらの光景を思ひやる事の出来るのも、彼女からよこして呉れる手紙であつた。

『あの事さへ書いてないと、筒ちゃんの手紙はほんとに好いんだがなあ——』

と岸本は獨りでよくそれを言つて見た。節子はまた以前の淺草の住居の方から移し植ゑた萩の花のさかりであるといふことなどに事寄せて、岸本が見たことの無い子供の誕生日の記念のために書いてよこすことを忘れなかつた。

## 百九

あれほど便りをするのに碌々返事も呉れない叔父さんの心は今になつて自分に解つた、と節子は力



の籠つた調子で書いた手紙を送つてよこした。長い冬籠りの近づいたことを思はせるやうな日が来て居た。ルエキサンブルの公園にある噴水池も凍りつめるほどの寒さが来て居た。部屋の煖爐には火が焚いてあつた。岸本はその側へ行つて、節子から来た手紙を繰返し讀んで見た。叔父さんはこの自分を忘れようとして居るのであらうと彼女は書いてよこした。そんなら、それでいい、叔父さんがそのつもりなら自分は最早叔父さんに宛てて手紙を書くまいと思ふと書いてよこした。あれほど自分が送つた手紙も叔父さんの心を動かすには足りなかつたのかと書いてよこした。叔父さんのことを思ひ、自分の子供のことを思ふ度に、枕の濡れない晩は無いと書いてよこした。そんなに叔父さんは沈黙を守つて居て、この自分を可哀さうだと思つては呉れないのかと書いてよこした。

名状しがたい心持が岸本の胸中を往來した。日頃一種の侮蔑をもつて女性に對して来たほど多くの失望に失望を重ねた自分の心持がそこへ引出された。姪を憐み、姪を恐れることはあつても、決して彼女の想像するやうなものでは無かつた自分の心持がそこへ引出された。節子のことを考へる度に、きまりで思出すのは義雄兄の言葉であつて、「お前はもうこの事を忘れてしまへ」と言つて呉れたあの兄に對して来た自分の心持もそこへ引出された。この岸本は堅く閉じた心の扉の外に来て自

分を呼びつけて居たやうな姪の最後の聲を聞く氣がした。根氣も力も盡き果てたかと思はれるやうにその扉を叩いた最後の精一ばいの音を聞きつけたやうな氣がした。

煖爐には赤々とした火がさかんに燃えて居た。儉約な巴里の家庭では何處でも冬季に使用する龜の子形の小さな炭圍が石炭と一緒に混ぜて焚いてあつた。岸本は嘆息して、姪から来た手紙も、覺束ない羅馬文字で彼女自身に書いてよこした封筒も、共に煖爐の中へ投入された。見る間に紙は燃え上つて、節子の文字は影も形もなくなつた。岸本は喪心した人のやうに煖爐の前に立つて、投入された紙片が灰に成るのを眺めて居た。

## 百十

それぎり節子の消息は絶えた、薄暗く、陰氣くさく、ろく／＼日光も見られず、極く日の短い時分には午後の三時半頃には最早暮れかけて、一晝夜の大部分はあだかも夜であるかのやうな巴里の冬

が復た旅の窓へやつて来た。到頭岸本は戦時の淋しい降誕祭を迎へ、子供等に別れてから二度目の年を異郷の客舎で越した。

黄なミモサの花や小さな水仙のやうなナアシスに僅に春待つ心を慰める翌年の二月半のことであつた。一旦消息の絶えた節子からの便りが思ひがけなく岸本の許へ届いた。最早手紙は書くまいと思つたが、叔父さんから送つて呉れた旅の紀念の繪葉書を見るにつけても、つい禁を破つて斯の便りをする氣に成つた、と彼女は書いてよこした。其手紙には兎角彼女が煩ひ勝である事や、淺草時代の自分は何處かへ行つてしまつたかと思はれるほど弱くなつたことや、兩手にひろがつた水蟲のやうなものは未だ癒らなくて難儀をして居るといふことばかりでなく、母親に對して氣まづい思ひをして居ることが今迄に無い調子で書いてあつた。讀みかけて、岸本は眉をひそめずには居られなかつた。何故といふに、節子の手紙を通して聞くあの嫂の言葉は、兄一人だけしか知らない筈の自分の秘密を感じて居るとしか思はれなかつたから。其時岸本は左様思つた。何故、あの義雄兄は嫂にまで隠さうとするやうな方針を取つて呉れたらう。何故、節子はまた母親だけに身の恥を打明け、て詫びるといふ心を起さなかつたらうと。

節子の手紙で見ると、どうかすると彼女は彼女の幼い弟達の前で、母から「姉さん」といふ言葉で

呼ばれずに「お婆さん」と呼ばれることがあるとしてある。煩ひ勝ちで裏所の手傳ひも思ふやうに出来ないといふ彼女は、斯の皮肉を浴びる時の辛さを書いてよこした。そればかりでは無い、彼女の母の言葉として斯様なことまで書いてよこした。「お婆さんでは、なんぼなんでも可哀さうだ——左様だ叔母さんが可い——この人の姉さんぢやなくて、岸本の叔母さんだよ——」母の言ふことは斯うした調子だと書いてよこした。

「岸本の叔母さん。」

當てこすりで無くて是が何であらう、と岸本はその言葉を繰返して見た。彼は節子から来た手紙をよく讀んで見るにも堪へない程、今迄にない彼女の調子にひどく胸を打たれた。彼女は病的と思はれるまで傷ましい調子で書いてよこした。氣でも狂ひそうな調子で書いてよこした。その時ほど、岸本は自分故に苦しんで行く姪のすがたをまさしくと見せつけられたことは無かつた。

## 百十一

言ひあらはし難い恐怖と哀憐とは、節子の手紙を引裂いて焼捨て、しまつた後まで岸本の胸に残つた。すつと以前に岸本が信濃の山の上に田舎教師をしながら籠り暮した頃、城址の方にある學校へ行かうとして浅い谷間を通過ぎたことがある。ある神社の裏手にあたるその浅い谷間の水の流のところで、一羽の小鳥を見つけたことがある。飛去りもせず居る小鳥を捉へるつもりもなく捉へやうとして、谷川の石の間を追廻すうちに、何時の間にか彼の手にした洋傘は小鳥の翼を打つことがある。何かに追はれたか、病んで居るか、いづれ譯があつて飛去りもしない小鳥を傷つけたと気がついた時はもう遅かつた。血にまみれながら是方を見た時の眼は小鳥ながらに恐ろしく、その小さな犠牲を打殺すまでは安心しなかつたことがある。そして半町ばかりも歩いて城址に近い鐵道の踏切のところへ出た頃に、手にした洋傘の柄の折れて居たのに気がついたことがある。丁度あの小鳥

の眼が、想像で描いて見る節子の眼だ。可傷しい眼だ。鋭いナイフで是方の胸を貫徹さすには置かないほどの力を有つた眼だ。

一度犯した罪は何故斯う意地悪く自分の身に附纏つて來るのだらう、と岸本は嘆息してしまつた。佛蘭西の詩人が詩集の中に見つけて置いた文句が彼の胸に浮んだ。

“Que m'importe que tu sois sage

Sois belle et sois triste……”

分別さかりの叔父の身で自分の姪を無垢な處女の知らない世界へ連れて行つたやうな心の醜さは、斯の悲痛な詩の一節の中にも似よりを見出すことが出来る。あの北極の太陽に自己が心胸を譬へ歌つた歌、岸本が東京淺草の住居の方でよく愛誦した歌を遺して置いて行つたのも同じ佛蘭西の詩人である。岸本は左様した頽廢した心を有つた人が極度の寂寞を感じながら曾て斯の世を歩いて行つたことを想つて見た。その人の歌つた紅くしてしかも凍り果るといふ太陽は北極の果を想像しないまでも、暗い巴里の冬の空に現に彼が望み見るものであることを想つて見た。

町に出て、岸本は節子のために彼女の煩ひ苦しんで居るといふ手の薬を探し求めた。子供等へ送るつもりで買つて置いた佛蘭西風の黒い表紙のついた手帳と一緒にして、歸朝する人でもある折にそ

れを托さうと考へた。斯うした心づかひも、よく／＼不幸な節子のやうな姪が斯の世に生きながらへて居ると思ふことを奈何することも出来なかつた。その惱ましきは、折角リモオジュの田舎の方で回復した新しい旅の心に掩ひ冠さつて来た。

## 百十二

濃い霧で町の空も暗い日が續いた。時としては町々の屋根に近い空の一部に淡黄な光のほのめきを望み、時としてはめづらしく明るく開けた空に桃色の雲の群を望むやうな日があつても、復た／＼暗く閉ぢ籠められた心持で暮しがちであつた。戦時の寂しい冬らしく萬物は皆な凍り果てた。寒い雨の来る晩などは、岸本は遠く離れて居る友人等の名前を呼んで見たいと思ふことすら有つた。彼は東京の加賀町の友人から繪葉書のはしに書いてよこして呉れた「寂寞懷君」といふ言葉などを胸に浮べながら、窓に行つて眺めた。

六頭の馬に挽かれた砲車の列が丁度その町を通つた。一砲車毎に彈藥の函を載せた車が八頭の馬に挽かれて其の後から續いた。街路に立つて見る市民の中には一語熱狂した叫び聲を發するものもなかつた。いづれも皆靜肅な沈黙を守つて馬上の壯丁を見送るものゝみであつた。戦時の空氣はそれほど濃い沈鬱なものと成つて来て居た。岸本は水を打つたやうにシーンとした斯の町の光景を自分の部屋から眺めて、數月前よりは反つて一層胸を打たれた。彼ガリモオジュから歸つて来てから以來、一日は一日より斯の空氣の中へ浸つて行つた。激しい興奮と動搖との時は過ぎて、忍耐と抑制との時がそれに代つて居た。

岸本は自分の部屋を見廻した。戦争以前よりはもつと濃い無聊がそこへやつて来て居た。

「あゝ、復た始まつた。」

とそれを思ふにつけても、よく目的もなしに町々を歩き廻り、寄りたくもない珈琲店へ行つて腰掛けたりするより外に時の送りやうの無いやうな、その同じ心持が復た繰返し起つて来ることを忌々しく思つた。窓から射して来て居る灰色な光線は、どうかすると暗い部屋の内部を牢獄のやうに見せた。周圍が冷い石で繞はれて居ることもその一つである。寝る道具から顔を洗ふ道具から便器まで室内に具へつけてあることもその一つである。親戚や友人や小供等から全く離れて居ることもネ

の一つである。訪れるものも少なく、よし有つても故國の食物の話や女の話などに僅かに徒然を慰め合ふのもその一つである。全く外界に縁故の無いのもその一つである。信じ難いほどの無刺戟もその一つである。到底行ひ得べくも無いやうな空想に驅らるゝのもその一つである。のみならず岸本は自分で自分の鞭を脊に受けねば成らなかつた。心に編笠を冠る思ひをして故國を出て來たものが斯の眼に見えない幽囚は寧ろ當然のこのやうにも思はれた——孤獨も・禁慾も。

## 百十三

斯の佗しい冬籠りの中で、岸本の心はよく自分の父親の方へ歸つて行つた。しきりに彼は少年の頃に別れた父のことが戀しくなつた。異郷の客舎に居て前途の思ひが胸に塞がるやうな折には、彼は部屋の間にある寢臺に身を投げ掛けて白いレネスの上敷に顔を埋めることも有つた。例のソクラテスの死をあらはした古い額の掛つた壁の側で、斯の世に居ない父の前へ自分を持つて行き、父を呼び、

そのたましひに祈らうとさへして見た。あだかも父に別れたまゝの少年の時のやうな心をもつて。

岸本の父は故國の山間にあつて三百年以上も續いた古い歴史を有つ家に生れた人であつた。峠一つ越して深い谿谷に接した隣村には、矢張同姓の岸本を名乗る家があつた。その家が代々、あるひは代官、あるひは庄屋、あるひは本陣、あるひは問屋の職をつとめたことは、岸本の父の家によく似て居た。その家から岸本の母は嫁いて來た。義雄兄はまた幼少の時から貰はれて行つてその母方の家を繼いだ。義雄兄の養父——節子から言へば彼女の祖父さんは、岸本が母の實の兄にあつて居た。岸本が父母の膝下を離れ、郷里の家を辭して、東京に遊學する身となつたのは漸く九歳の時であつた。十三歳の時には東京の方に居て父の死を聞いた。彼は父の側に居て暮した月日の短かつたばかりでなく、母のいつくしみを受ける間もまた短かつた。彼がしみじみ母と一緒に東京で暮して見たのは艱難な青年時代が來た頃であつて、しかも僅かに二年ほどしか續かなかつた。彼は仙臺の方へ行つて居る間に母の死を聞いた。

これほど岸本は父のことに就いて幼い時分の記憶しか有たなかつた。四十四歳の今になつて、もう一度その人の方へ旅の心が歸つて行くといふことすら不思議のやうに思はれた。半生を通して繞りに繞つた憂鬱——言ふことも爲すことも考へることも皆そこから起つて來て居るかのやうな、あの

名のつけやうの無い、原因の無い憂鬱が早くも青年時代の始まる頃から自分の身にやつて来たことを話して、それを聞いて貰へると思ふ人も、父であつた。何故といふに、岸本の半生の悩ましかつたやうに、父もまた悩ましい生涯を送つた人であつたから。假りに父が斯の世に生きながらへて居て、自分の子の遠い旅に上つて来た動機を知つたなら何と言ふだらう……けれども、岸本が最後に行つて地べたに額を埋めてなりとも心の苦痛を訴へたいと思ふ人は父であつた。

## 百十四

「ちゝはゝの

しきりにこひし

雉子の聲。」

岸本の胸に浮ぶは斯の句であつた。この短い言葉の蔭に隠されてある昔の人の漂泊の思ひもひどく

彼の身に浸みた。何時来るかも知れないやうな春を待たび、身の行末を案じ煩ふやうな異郷の旅でもなければ、これほど父の愛を喚起す事もあるまいかと思はれた。幼い時の記憶は遠く郷里の山村の方へ彼を連れて行つて見せた。廣い玄關がある。田舎風の爐邊がある。民助兄の居る寛ぎの間がある。村の旦那衆はよくそこへ話し込みに来て居る。次の間があり、中の間がある。母や嫂がその明るい光線の射し込む部屋で針仕事をひろげて居る。遠い山々、展げた谷、見霞むやうに廣々とした平野までも高い山腹にある位置からその部屋の障子の外に望まれる。坪庭の扉を隔て、石垣の下の方には叔母の家の板屋根なども見える、奥の間がある。上段の間がある。一方には古い枝ぶりの好い松の木や牡丹などを植ゑた静かな庭に面して、廂の深い父の書院がある。それが岸本の生れた家だ。

岸本は赤い毛氈を掛けた父の机の上に父の好きな書籍や、時には和算の道具などの載せてあつたことを記憶でまだあり〜と見ることが出来た。よく肩が凝るといふ父の背後へ廻つて、面白くも可笑くもない歴代の年號などを暗誦させられながら、「享保、元祿……」とまるで御経でもあげるやうに父の肩につかまつて唱へたり叩いたりしたあの書院の内を記憶でまだ見ることが出来た。夜遅くまで物書く父の側に坐らせられ、部屋一ぱいにひろげた白紙の前で、眠い眼をこすり〜持たせら

れたあの蝟燭の火を記憶でまだ見ることも出来た。父は嚴格で、子供の時の岸本が父の膝に乗せられたといふ覚えも無いくらいの人であつた。父は家族のものに對して絶對の主權者であり、岸本等に對しては又、熱心な教育者であつた。岸本は學校の書籍を習ふよりも前に、父が自身で書いた三字文を習ひ、村の學校へ通ふやうに成つてからは大學や論語の素讀を父から受けた。彼はあの後藤點の栗色の表紙の本を抱いて、おづ／＼と父の前へ出たものであつた。何かといふと父が話し聞かせることは人倫五常の道で、彼は子供心にも父を敬ひ、畏れた。殊に父が持病の疝でも起る時には非常に恐ろしい人であつた。岸本は末子のことでもあり年齢もまだちひさかつたから、それほど目の目にも逢はなかつたが、どうかすると民助兄などは弓の折で打たれた。有體に言へば、少年の岸本に取つては、父といふものはたゞ／＼恐いもの、頑固なもの、究屈で堪らないものとしか思はれなかつた。

## 百十五

少年の時の記憶はまた東京銀座の裏通りの方へ岸本を連れて行つて見せた。土蔵造りの家がある。玄關がある。往來に面して鐵の格子の嵌つた窓がある。日の光は小障子を通して窓の下の机や本箱の置いてあるところへ射し入つて居る。そこが岸本の上京後、小父夫婦やお婆さんの監督の下に少年の身を寄せて居た田邊の家だ。

父から錢別に貰つた五六枚ほどの短冊、上京後の座右の銘にするやうにと言つて父があの子帳面な書體で書いて呉れた文字、それを岸本はまだあり／＼と眼に浮べることが出来た。少年の彼は窓の下の本箱の抽斗の中にその座右の銘を入れて置いて、時には幾枚かある短冊を取出して見た。「行ひは必ず篤敬……」などとしてある父の手蹟を見る度に、郷里の方に居る嚴しい父の教訓を聞く氣がしたものであつた。覺束ないながらも岸本が郷里へ文通するやうに成つてから、父はよく彼の許へ

手紙を呉れた。彼の上京後も父は断えざる助言者であつた。彼はまだ學校の作文でも書くやうに父へ宛て、書いたが、田邊の小父にそれを見せると言はれた時はよく顔が紅くなつた。この田邊の家へ父が一度郷里の方から出て來た時のことは、岸本に取つて忘れ難い記憶の一つであつた。父は旅の毛布やら荷物やらを田邊の家の奥二階で解いて、そこで暫時逗留した。郷里に居る頃の父はまだ昔風に髪を束ねて、それを紫の紐で結んで後の方へ垂れて居るやうな人であつたが、その旅で初めて散髪に成つた話などした。『あれは彼様と、これは斯様と——』そんなことを獨語のやうに言つては、自分の考へを纏めやうとするのが父の癖であつた。父は旅の包の中から桐の箱に入つた鏡などを取出した時に、『お父さん、男が鏡を見るんですか』と彼の方で尋ねると、父は微笑んで、鏡といふものは男にも大切だ、殊に旅にでも來た時は自分の容姿を正しくしなければ成らないと話したこともあつた。

父は随分奇行に富んだ人で、到るところに逸話を残したが、しかし子としての彼の眼には面白いといふよりも氣の毒で、異常なといふよりも突飛に映つた。その上京で殊に彼はそれを感じた。父は彼の學校友達の家へも訪ねて行かうと言出したことがあつた。三十間堀の友達の家には、友達の母親が後家で子供達を育て、居た。そこへ彼は父を案内して行つた。父の爲ることは、唯少年の彼に

は心配でならないやうなものであつた。學校友達の家を訪ねて行くと、先方でも大變喜んで呉れたが、別れ際に父は友達の母親から盆を借りて土産ばかりに持つて行つた大きな蜜柑をその上に載せた。それを友達の母親の方へ差出すことかと彼が見て居ると、父は左様しないで、いきなりその蜜柑を佛壇へ持つて行つて供へた。斯うした父の行ひが少年の彼の眼には唯奇異に思はれた。彼は父の精神の美しいとか正直なとかを考へる餘裕はなかつた。何がなしにその學校友達の家を早く辭して田邊の方へ父を連れ歸りたいのみ思つた。その時の彼の心では、久し振で父と一緒に成つたことを悦ばないではなかつたが、矢張郷里の山村の方に父を置いて考へたいと思つた。一日も早く父が東京を引揚げ、あの年中櫓火の燃えて居る爐邊の方へ歸つて行つて、老祖母さんや、母や、兄夫婦や、それから年とつた正直な家僕などと一緒に居て貰ひたいと思つた。後になつて考へると、それが彼の上京後唯一度の父子の邂逅であつたのである。それぎり彼は父を見なかつた。



## 百十六

岸本が父を知るやうに成つたのは、寧ろ父が亡くなつてからの後のことであつた。漸く彼が青年期に入つて彼自身の遽かな成長を感じ始めた頃、郷里の方にある老祖母さんの死去を聞いて一度歸省したことがある。民助兄もその頃は既に東京で、彼は兄の代理として老祖母さんを吊ひかた／＼郷里に留守居する母や嫂の方へ歸つて行つた。その時、彼は久しぶりで自分の生れた家を見たばかりでなく、その遺した藏書を見せやうと云ふ母の後に隨いて裏庭の方へ出た。母屋の横手から土藏の方へ通ふ野菜畑と桑畑の間の徑、老祖母さんの隠居所となつて居た離れの二階座敷、土藏の前に植ゑてある幾株かの柿の木、それらは皆な極幼い頃に見たと變らずにあつた、母は暗い金網戸の閉つた土藏の石段の上に立つて、手にした大きな鍵で錠前をガチャ／＼言はせ、やがて彼を二階の方へ案内した。そこに老祖母さんの嫁に來た時の長持が残つて居る。こゝに母の長持が置いてある。それら

の古い道具を除いては土藏の二階にあるものは父の遺した澤山な書籍であつた。壁によせて積重ねてある古い本箱からは主として國學に關する書籍が出て來た。それを見て、彼は自分の父が何程あの古典派の學說に心を傾けたかを感じた。彼が英學を修め始めた時はまだ父は生きて居て、非常に心配した手紙を呉れたが、あの父の心持も思ひ當つた。その頃から彼は一層よく父を知らうとするやうに成つた。父に關したことは、いかなる小さな話でも心に留めて置かうとした。折ある毎に彼は身内のものや父を知つて居る人達に父のことを尋ねた。民助兄にも。義雄兄にも。田邊の小父にも。田邊のお婆さんにも。そして、それらの人達の記憶に残るきれ／＼な話から父の生涯を想像しようとした。意外にも彼は人から聞いた話よりも、彼自身の内部に一層よく父を見つけて行つた。彼は自分の内部から押出すやうにして延びて來る生命の芽が、一切の物の色彩を變へて見せるやうな憂鬱な世界の方へ自分を連れて行く度に、特にそれを感じた。彼は年とれば年とる程、自分の性質が父に似て行くことを驚き恐れた。仙臺の旅から歸つたのは彼が二十六歳の頃であつた。彼は一夏を郷里の鈴木の家を送つて、あの姉の口から父の聲を聞きつけたことも有つた。『捨吉は俺の子で、あれは學問の好きな奴で、どうかして俺の後を繼がせたいものだなんて、お父さんがよく左様仰つたぞや。』と姉は郷里の訛のある調子でそれを

彼に話し聞かせた。その頃は鈴木の見も郷里の家に暮して、最も得意な月日を送つて居た。姉に取つても楽しい時であつた。姉は久しぶりで一緒になつた弟を前に置いて、夫に向つて、「まあ、捨吉の坐つてゐるところを見てやつて下さい、あれの手などはお父さんに彷彿です」と話して笑つた。その時彼は自分の身體の中に父の手までも見つけた。尤も、父は足袋なども圖無しを穿いたと言はれる方で、彼の幼い記憶に残るのは彼よりもずつと背の高い人であつたが。

## 百十七

父の憂鬱は矢張岸本と同じやうに青年時代に發したといふことである。岸本が同年配の他の青年の知らないやうな心の戦ひを重ねたのもその憂鬱の結果であつたが、しかし彼は狂じみたといふ程度に踏みこたへた。父のは、それが本物であつた。斯うした父の持病は一生を通して父を苦しめたと言へ、しかし岸本は父にも健かな月日の多かつ

たことを想像することが出来る。その證據には、父は平田篤胤の門人であつたといふし、維新の際には家を忘れて國事に奔走したといふし、飛驒の國にある水無神社の宮司にもなつたといふし、それから郷里に退いて晩年を子弟の教育に送つたともいふことである。今は臺灣の方で民助兄と一緒に暮して居る嫂が父の日常のことをよく知つて居て、曾て東京の根岸の家でその話を岸本にして聞かせたことも有つた。お父さんの疝の起らない時には、それは優しい人でしたよ。子供に灸一つすゑられないやうな人でしたよ。」と嫂は話して呉れた。

この嫂を通して、岸本は父が最後に座敷牢で送つた日のことを聞いた。幻を眞と見る父の感覺は眼に見えない敵のために惱まされるやうに成つて行つた。敵が攻めて来る。敵が攻めて来る。」と父はよく言つたとか。その恐ろしい幻覺から、終には父は岸本家の先祖が建立したといふ村の寺院の障子へ火を放たうとした。それが父の牢獄にも等しい部屋の方へ趨く最初の時であつた。日頃柔順な子として聞えた民助兄も餘儀なく父の前に立つて、御辭儀一つして、それから村の人達と一緒に父を後手に縛りあげた。父のために造つた座敷牢は裏の木小屋にあつた。そこは老祖母さんの隠居部屋と土藏の間を堀井戸について石段を下りて行つたところにあつた。前には古い池があり、一方は米倉に續き、後には岸本の家に附いた竹藪が茂つて居た。そこで父は最後の暗い日を送つた。母は

別室に居て父の看護を怠らなかつたばかりでなく、日頃父のことを「お師匠様」と呼ぶ村の人達まで晝夜交代で詰めて居たといふことである。

嫂の話は父が座敷牢で暮した頃の細目を傳へたが、鈴木姉はまた父の感情を傳へた。姉は最早家出をした夫と別れ住む頃であつた。郷里から一寸出て来て、東京淺草の方にあつた岸本の家の二階でその話を弟にした。どうかすると父は座敷牢でも物を書きたいと言つて、硯や筆を取寄せ、「熊」といふ字を大きく一ぱいに紙に書いて人に見せたことも有つた。そして自ら嘲るやうに笑つて、終にはもう腹を抱へて轉げるほど笑つたかと思ふと、悲しげに涙がその後からさめざめと流れた。「きりぎりす啼くや霜夜のさむしろに衣かたしき獨りかも寝む。」——父はこの古歌を幾度となく口吟んで見て、自分で自分の聲に聞入るやうにして、暗い座敷牢の格子につかまりながら慟哭したといふ。「慨世憂國の士をもつて發狂の人となす、豈に悲しからずや。」とは父がその木小屋に遺した絶筆であつたといふ。父は最後に脚氣衝心で斯の世を去つた。

## 百十八

それから鈴木姉の上京後、まだ園子の達者で居た時分、岸本は父の墓を建てるために一度歸省したこともある。その時は郷里の鈴木の家を姉に見に立寄り、あれから木曾川に添うて十里ばかり歩いた。郷里とは言つても、岸本があゝの谿谷の間の道を歩いて見たことは數へるほどしか無かつた。通る度毎に舊い驛路の跡は變つて居た。母の生れた村まで行くと、古い大きな屋敷は最早見られなかつたが、そこには義雄兄の留守宅があつて、節子の母親が祖母さんと二人で子供を相手に暮して居た。深い谿谷の地勢はそのあたりで盡きて、山林の間の坂の多い道を辿つて行つたところに岸本の村がある。遠い先祖の建立したといふ寺には岸本の家についた古い苔蒸した墓石が昔を語り顔に並んで居た。岸本は岡の傾斜のところに造られた墓地を通りぬけて、杉の木立の間から村の一部の望まれるやうな位置へ出た。二つの墳が彼の眼に映つた。そこに両親が眠つて居た。

村には父の教を受けたといふ人達がまだ多く住んで居た。日頃岸本の家と懇意な隣家の酒屋の主人もその一人だ。その人に誘はれて、眺望の好い二階座敷に上つて見ると、一段高い石垣の上の位置から以前の屋敷跡が眼の下に見えた。村の大火は岸本の父の家を桑島に變へた。母屋も、土蔵も最早見られなかつた。何となく時雨れて來た空の下には、桑島間に色づいた柿の葉の枝に残つたのが故郷の秋を語つて居た。岸本は隣家の主人と一緒にその桑島を指して、そこに父の書院があつた。そこに父の愛した古い松の樹があつた、と語り合つた。家を舉げて東京に移り住むやうに成つた頃から、以前の屋敷跡は矢張隣家の所有であつたから、岸本は酒屋の主人の許しを得て獨りで裏づたひに桑島の間に出て見た。甘い香氣のする柿の花が咲くから、青い帯の附いた空な實が落ちるまで、少年の時の遊び場所であつた土蔵の前あたりの過去つた日の光景はまだ彼の眼にあつた。父の遺した藏書を見るために母と一緒に暗い金網戸の前の石段に立つた日のことなぞもまだ彼の眼に残つて居た。亡くなつた老祖母さんの隠居所であつた二階座敷から、裏の方へかけて、あの邊だけが僅に焼残つて居て、岸本は變らずにある木小屋を見ることが出來た。臺灣の方へ行つた嫂が話して呉れたのも、その小屋のことだ。前にある高い石垣、古い池、後に茂る深い竹藪は父の佗しい暗い最後の月日を想像させた。

## 百十九

すべてこれらの父に關する記憶が旅にある岸本の胸に纏まつて來た。早く父に別れた彼は多くの他の少年が享け得るやうな慈愛もろく／＼享けず仕舞であつた。そのかはりまた大きくなつて、酷い父と子の衝突といふものをも知らずに済んだ。彼はよく左様思つた。自分の學ぶこと、爲ること、考へることは父と何の交渉があるだらう、もしあの父が生きながらへて居たら奈様なことに成つたらうと。彼は自分の意のままに父の嫌ひな外國語を修め始めやうとした少年の日から、既にもう父の心に負き去つたのである。

不思議にも斯の異郷の客舎で、岸本の心は未だ曾て行つたことの無いほど近く父の方へ行くやうに成つた。父の聲は復た彼の耳の底に聞えて來た。紅い太陽が輝くといふことなしに、さながら銅盤を懸けたかのごとく暗い寒空を通過するやうな日に、凍つた石の建築物の中で旅の前途を考へて居

ると、

「捨吉。捨吉。」

と子供の時に聞いた父の聲がもう一度彼の耳に聞えて来るやうに思はれた。

そればかりでは無い。父が生前極力排斥し、敬視した異端邪宗の教の國に来て、反つて岸本は父を視る眼をさへ養はれた。自分の國の方に居た頃の彼は、平田派の學說に心を傾けた父等の人達があの契沖や眞淵のやうな先驅者の歩いた道に満足しないで、神道にまで突きつめて行つたことを寧ろ父等のために惜んだ。今になつて彼は古典の精神をもつて終始した父等が當時の愛國運動に参加したことや、學問から實行に移つたことを可成重く考へて見るやうに成つた。彼はこの旅に上る前の年に、記念することがあつて父の遺した歌集を編み、僅の部數ではあつたがそれを印刷に附し、父を知る人達の間に分けたことも有つた。その遺稿の中には父が飛驒の國で讀んだかす／＼の旅の歌があつた。それを彼は思ひ出して、あの水無神社の官司として飛驒の山中に籠つて居た頃が父の生涯の中でも寂しい時であり、懐しみの多い時でもあることを想つて見た。彼は又、父が苦しんだ精神病の原因を考へた。それを若い時に想像したやうなロマンチックな方へ持つて行かないで、もつと簡単な衛生上の不注意に持つて行つて考へて見た。假りに父の發狂が左様した外來の病毒か

ら来て居るとしても、そのために父に對する心はすこしも變らなかつた。恐い、頑固な、究屈な父は、矢張自分等と同じやうな弱い人間の一人として、以前にまさる親しみをもつて彼の眼に映るやうに成つた。

斯の父の前に、岸本は自分の旅の身を持つて行つた。羞ぢても、羞ぢても、羞ぢ足りないほどの心で國を出て來た時、暗夜に港を離れ行く佛蘭西船の甲板の上に立つて最後に別れを告げた時の彼は、實はあの神戸も見納めのつもりであつた。彼の旅も、これから先の方針を定めねば成らないところまで行つた。

## 百二十

「お客さん、お支度が出来ましてございます。」

佛蘭西風の縞の前垂を掛けた下女が部屋の扉を開けて、岸本のところへ晝食の時を知らせに來た。

下宿屋でも主婦の姪はリモオジュへ歸つて、田舎出の下女が備はれて来て居た。暗い廊下を通つて、岸本は食堂の方へ行つて見た。二年近い月日を旅で暮す、ちに彼は古顔な客としての自分をその食堂に見た。

『さあ、どうぞ皆さんお席にお着き下さいまし。』と肥つた主婦は佛蘭四麵麴を切りながら言つた。『私共は田舎料理で、ノルマンデイから被入つたお客さまのお口には合ひますか奈何ですか。』

町の近くにあるヴァル・ド・グラスの陸軍病院に負傷した夫を見舞ふためノルマンデイの地方から出て来たといふ女の客、ある家庭の子供を教へに通つて居る中年の女教師、それらの人達が岸本の食堂で落合ふ顔揃であつた。最早羅馬舊教のカレームが始まつて居た。毎年の例のやうに主婦が豚の腸詰などを祝ふ『肉食の火曜』も過ぎて居た。四十日間の宗教季節が復たやつて来たことは、佛蘭西で暮した月日の長さを岸本に思はせた。

『岸本さん、お國からお便りがございますか。お子さん方も御變りもございませんか。さぞ父さんをお待ちでございませう。』

と主婦も一緒に食卓に就きながら言つて、大きな皿に盛つた精進日らしい手料理を順に客の前へ廻した。斯の主婦はノルマンデイから来た女の客の巴里で買つたといふ帽子を褒め、家庭教師の新調し

た着物の好みを褒め、『まあ結構な』とか、『實にまあ御見事な』とか、褒められるだけ褒めた。リモオジュの田舎から出た人だけに、お料理から世辭まで山盛にしなければ承知しなかつた。岸本は斯の人達の世間話にも聞飽きて、費用のみ要る外國の旅のことを思ひながら食つた。食堂から自分の部屋へ戻つて見ると、つく／＼岸本には異人といふ心が浮んだ。左様々々長く留るべき場所ではなし、又長く續けて行くべき境涯でも無いといふ氣がして来た。自分のことを心配して居て呉れたビヨンクールの老婦人のやうな温情のある人は亡くなつた上に、時局は一層彼の旅を不自由にした。折角熱意になつた佛蘭西人で國難のために夢中になつて居ないものは無かつた。學問も、藝術も、殆ど一切休止の姿だ。彼の周圍には、戦争あるのみだ。

岸本は異郷の土になるつもりで國を出て来た自分の決心が到底行はれ難いことを感じて来た。國には彼を待つ頼りの無い子供等があつた。彼は、あだかも冷たく嚴かな運命の前に首を垂れる人のやうにして、斯うした一生の岐路に立たせられるよりは寧ろ與へられた生命を返し、いとまで嘆いた。彼は亡き父の前に自分を持つて行つて、『この生命を取つて下さい』とも祈つた。

## 百二十一

「旅人よ、足をとどめよ。お前は何をそんなに急ぐのだ。何處へ行くのだ。何故お前の眼はそんなに光るのだ。何故お前はそんなに物を捜してばかり居るのだ。何故お前はそんなに離脱として歩いて居るのだ。」

——旅人よ。お前はこの國を見やうとしてあの星の光る東の方から遙々とやつて来たのか。この國にあるものもお前の心を満すには足りないのか。

——旅人よ。夕方が来た。何を前は涙ぐむのだ。お前の穿き慣れない靴が重いのか。この夕方が重いのか。それとも明日の夕方が苦しいのか。

——旅人よ。何故お前は小鳥のやうに震へてゐるのだ。假令お前の生命が長い長い恐怖の連続であらうとも、何故もつと無邪氣な心を有たないのだ。

——旅人よ。足をとどめよ。この國の羅馬舊教の季節が来て居る。お前も来て、主の受難を記念する夕方に憩へ。お前に食はせる麴麩、お前に飲ませる水ぐらゐはこゝにも有らうではないか……」

書齋でもあり寢室でもある部屋の机に對つて、岸本は自分の書いたものを取り出した。窓側の壁に掛けてある佛蘭西の曆は三月の来たことを語つて居た。その窓側で彼は書きつけた自分の旅情を読み返して見た。

部屋を見廻すと、まだく彼は長い冬籠りの有様から抜け切ることが出来なかつた。町の空も暗かつた。しかし、正月、二月あたりはもつと暗い日の續くことが多かつた。彼は恐ろしい低氣壓が、十五日も續いた低氣壓が、自分の心の内部を通過して行つたことを感じた。冷い感じのする硝子を通して望まるゝ町の空は暗いと言つても早や何となく春めいた紅味を含み、遠い建築物の屋根や煙突も霞んで見え、戦時の冬らしく凍り果てた彼の旅の窓へも、漸く底温かい春が近づいたかと思はせた。

久し振りで聞く軍隊の相圖の笛が岸本の耳についた。喇叭卒を先に立てた佛蘭西歩兵の一隊がゴブランの市場の方角から進んで来た。そして町の片端で足を休めて行かうとするところであつた。窓

から望むと、冬枯のプラタマの並木の下あたりは寄せ集めた銃や肩から卸した銃袋で埋められた。騎馬から下りて休息する將校も見えた。眼の下に動く兵卒等の軍帽を包んだ紺の布や、防寒用の新服はいづれも酷く汚れて、風雪の勞苦が思ひやられた。

「生きたいと思はなうものは無う——」

と彼は自分に言つて見た。

町々の婦女は出て兵卒等をねぎらはうとした。葡萄酒を奮發する珈琲店のかみさんがあれば、パン菓子を皿に盛つて行つて勧める菓子屋のかみさんもあつた。岸本も部屋にちつとして居られなかつた。彼は急いで帽子を冠り、階段を降りて、斯の人達の中に混らうと思つた。夫や兄弟や従兄弟のことを心配顔な留守居の婦女、子供、それから老人などが休息する兵卒等の間を分けて、右にも左にも歩いて居た。岸本は自分の隠袖の中から巻煙草の袋を取出し、それを側に居る五六人の兵卒にすゝめて見た。

## 百二十二

一日は一日より岸本の旅の心は濃くなつて來た。暇さへあれば岸本は自分の下宿を出て、戦時の催しらしい管絃樂の合奏を聴くためにソルボンヌの大講堂に上り、巴里の最も好い宗教樂があると云はれるソルボンヌの古い禮拜堂へも行つて腰掛けた。彼はまた人と連立つて、サン・ゼルマンの長い並木街をセエヌの河岸まで歩きに行つて見た。ルウヴル宮殿の古い建物やチュレリイ公園の石垣が對岸に見える河の畔まで行くと、水の流れも何となく霞んで見え、岸に立つマロニエの並木も芽ぐんで來て居た。左様いふ日には殊に春待つ心が彼の胸に浮んだ。

二年近くかゝつて育てた新しい言葉も延びて行く時であつた。彼は旅人らしく自分の周圍を見廻すと、來るべき時代のためにせつせと準備して居るやうなもの、あるのに氣がついた。彼の眼には、どう見てもそれは芽だ。間斷なく怠りなく変度して居るやうな芽だ。それは可成もう長いこと萌し



に萌して来たものであるとも言へる。けれども何人の骨髓にまでも浸み渡るやうな歐羅巴の寒い戦争が来て、一層その發芽力を刺激されたやうにも見える。左様したものが彼の周圍にあつた。そしてその芽の一つとして、曾て一度は頽廢したものの再生でないものは無かつた。

斯の觀望は岸本が旅の心を一層深くさせた。彼の周圍には死んだジャン・ダクすら、もう一度佛蘭西人の胸に活きかへりつゝあつた。彼は淫祠にも等しいやうな古いカソリックの寺院を多く見た眼でリモオジュのサン・テチエンヌ寺を見、あのサン・テチエンヌ寺を見た眼を移して巴里のフランソア・ザビエー寺などを見、更に眼を轉じて「十字架の道」と志す幾多の新人のあることに想ひ到ると、左様した再生の芽を古い古い羅馬舊教の空氣の中にすら見つけることが出来るやうに思つた。その芽が岸本にさゝやいた。

「お前も支度したら可いではないか。澁み果ては生活の底から身を起して来たといふお前自身をそのまま、新しいものに更へたら可いではないか。お前の倦怠をも、お前の疲勞をも——出来ることならお前の胸の底に隠し有つ苦惱そのものまでも。」

## 百二十三

町に出て往來の人々に混りたいと思ふやうな午後が来た。岸本は下宿を出やうとして、丁度バスツウルに近い畫室の方から訪ねて来る牧野に逢つた。

岡も、小竹も相前後して既に英吉利の方から巴里へ戻つて来て居る頃であつた。牧野は岡の意中の人が國の方で他へ嫁いたといふ消息を持つて来た。戦争前、美術學校の助教授が巴里を發つといふ際にも、其他の時にも、まだ岡は一縷の望みをそれらの人達の歸國に繋いでゐた。最早岡の意中の人も行つてしまった。それを思ひやつて、岸本は牧野と顔を見合せた。

「今僕の畫室へ岡や小竹が集つて居ます。と牧野が言つた。」どう慰めやうもなくして僕等は困つてるところなんです。あなたにでも来て頂かなくちや——」

「僕なぞが君、出掛けて行つたところで奈何することも出来ないぢやないか。」

斯う岸本は言つたものゝ、岡のことも心に掛つて、呼びに來た牧野と一緒に下宿を出た。

二人はボオル、ロワイアルの並木街を歩いて行つた。暮の降誕祭前に、佛蘭西政府がボルドオから移つて來た頃あたりから、町々はいくらかづゝの賑かさを増して來たが、しかしまだく淋しかつた。戦争が各自の生活に浸潤して行く光景は特に黒い喪服を着け黒い紗を長く垂下げて歩く婦人の多くなつたことを取りたて、言ふまでもなく、二人はそれを町で行き逢ふ奈何なる人の姿にも讀むことが出來た。汚れた顔の子供にも、荷馬車に石炭を積んで巨大な馬を驅つて行く男にも、子供の手を引き腰掛椅子を小脇に擁へながら公園の方へ通ふ乳母にも、烏打帽子を冠つた年若な勞働者にも、小犬を連れのお婆さんにも、赤い花や櫻の實の飾りのついた帽子を冠り莫迦に踵の隆い靴を穿き人の眼につく風俗をしてその日の糧を探し顔な婦人にも、

天文臺前の廣場まで行くと、二人は十七八歳ばかりの青年の一群にも遭遇つた。それらの青年は皆學生であつた。普通の服に革帯を締め、腕章を着け、脚絆を巻きつけ、銃を肩にし、列をつくつて兵式の訓練を受けるためルキサンブールの公園の方へ行くところであつた。中にはまだ若々しい聰明な面さしものも混つて居た。

『あんな人達まで今に戦争に行くんでせうか。僕等のことにしたら、短い袴を穿いて學校へ通つて

る時分の年齢ですがなあ。』

二人は斯様な言葉をかはしながら、いづれ國難に赴かうとして居るやうな佛蘭西の若者達を見送つた。

過ぐる年に比べると並木の芽出もすつと後れた。プラタアヌの木などは未だ冬枯のまゝであつた。

モン・パルナツスの並木街をノオトル・ダム分院の前あたりまで歩いて行くと、その邊には漸くマロニエの青い芽が見られた

『もうそれでもマロニエの芽が見られるやうに成りましたね。』

牧野は岸本と並んで歩きながら言つた。

『牧野君もよくあの畫室に辛抱しましたね。なんだか今年の冬は特別に長いやうな氣がしました。』と岸本も足早に歩きながら答へた。彼の胸には逢ひに行く岡のことや、自分の旅のことが往來した。

## 百二十四

「君等は感心だ。よくそれでもお互に助け合ふね。」

と岸本はパスツウルの通りまで歩いて行つた頃に牧野の方を見て言つた。

「僕のところへ来るモデルもそれを言ひましたよ。「日本人は皆貧乏だ。そのかはり感心に助け合ふ、他の國から來てるものには決して左様いふことは無い」ツて。」

と牧野が答へて、自分の家の方へでも歸つて行くやうに書室のある横町の方へ岸本を誘つて行つた。モン・バルナツスの停車場の裏側からその邊の並木のある通りへかけては、岸本に取つても通慣れた道だ。巴里を圍繞く城塞の方に近いだけ、いくらか場末の感じもするが、それだけまた氣が置けない。よく岸本が牧野の許へ自炊の日本飯を呼ばれに行つて、葱などを買ひに出た野菜の店もその通りに見える。そこまで行くと書室も近かつた。

岡や小竹はビールを置いた机を圍み乍ら牧野の歸りを待つて居た。

「や。どうもお使御苦勞さま。」と小竹は牧野の方を見た。

「牧野、岸本さんも來たから、一緒に一ばい遣らんか。」と岡も飲みさしたコップを前に置いて言つた。

「あゝ。」

牧野は主人役と女房役とを兼ねたといふ風で、何か歎待顔に書室の隅でゴト／＼音をさせて居た。

斯の光景を見たばかりでも岸本には「巴里村」の氣分が浮んで來た。彼は岡と差向ひに腰掛けた。岡は言葉も少かつた。辯のやうに力を入れた肩と熱意の溢れた額とに物を言はせ、小竹や岸本のためにビールを注いだ。あだかも行く人を送るために互に盃を擧げやうとするかのやうに。

「物の解つた人が側に附いて居ながら斯ういふ結果に成つたかと思ふと、そればかりが僕には残念なんです。」

岡はそれを言つた。

「岡君と僕の場合とを比べることも出来ないが——第一、岡君から見ると僕はずつと年も若かつたし、境遇も違つて居ました。でも、互ひに心を許したといふ點だけでは似てるかと思ふ。僕は死を

もつて争つた。それでも行く人を奈何することも出来なかつた。僕は自分の方から別離を告げましたよ——尤も僕の場合には、先方に許婚の人がありましたがね。」

岸本は平素めつたに口にしたためしも無いやうなことを皆の前に言出した。

## 百二十五

岸本は斯の佛蘭西の旅に上つて來た時、神戸の旅館で思ひがけなく訪ねて來て呉れた二人の婦人に邂逅つたことを忘れずに居る。二十年の月日を置いて逢つて見たあの人達はもう四十を越した婦人でも、二十年前に亡くなつた人は何時までも同じ若さの女として岸本の胸に残つて居る。彼が岡や小竹を前に置いて思はず言出したのは、あの神戸で邂逅つた婦人等の舊い學友にある勝子のことであつた。青木、市川、菅、足立——それらの友人と互に青春を競ひ合ふやうな年頃に、岸本はあの勝子に逢つた。すべてまだ若いさかりの彼に取つて心に驚かれるばかりであつた。不思議にも、世

に盲目と言はれて居るものが、あべこべに彼の眼を開けて呉れた。彼の眼は勝子に向つて開けたばかりでなく、それまで見ることの出来なかつた隠れた物の奥を讀むやうに成つた。彼は自分の身の周囲にある年長の友達や先輩の心にまで入つて行くことが出来たばかりでなく、ずつと遠い昔に情熱の香氣の高い詩歌などを遺した古人の生涯を想像し、誰しも一度は通り過さねば成らないやうな女性に對する情熱をそれらの人達の生涯に結び着けて想像するやうに成つた。若い生命がそれから展けて行つた。

しかし彼の前に展けた若い生命とは、左様明るく楽しいばかりのものではなくて、寧ろ慘憺たる光景に満たされた。彼は自分の手から挽ぎ放されて結局父親の命するまゝに他へ嫁いて行く勝子を見た。簡単に言へば、彼が貧しかつたからである、彼は同じ年の若さであつても、今少し豊かな家に生れたならば彼女を引留め得べき多くの暗示を受けたことを忘れる事が出来なかつた。彼のさうげ得るものとは、一片の心のまことに過ぎなかつた。「わたしはお前を愛する、わたしの身體はもう死んだものと同じものだ、残るものは唯お前を慕ふ心があるばかりだ。」斯う言ひながら勝子は父親の手に引かれて行つてしまつた。彼はそれを自分の身に経験したばかりでなく、彼の周囲にあつた友人の場合にも経験した。市川のやうな賢い青年であつても、情人の姉なり親戚なりに經濟上の安心を與

へ得なかつたものは失敗した。そして日本橋傳馬町の鏗節問屋に生れた岡見は成功した。斯の事實は彼の若い心に深い感銘を刻みつけた。愛の爲すなきを悟つたのは實にその時であつた。小竹や牧野の楽しい笑聲が岸本の前で起つた。國の方に細君を残して置いて来たといふ斯の二人の畫家はわだかまりの無い笑聲に紛らして、岡の心を慰めやうとして居た。一切を葬る時が来たと言はぬばかりに腕組して考へて居る岡を見ると、岸本は若い時の自分を眼前に見るといふ程ではない迄も、すくなくともそれに似よりの心持を起した——勝子がまだ生きて居た頃の彼と、岡とは、弟と兄ぐらゐの年齢であつたから。

## 百二十六

若かつた日のことを思ひ出すと同時にきまりで岸本の胸に浮んで来る青木の名は、よく彼の話に出るので、岡や牧野にも親しみのあるものと成つて居た。彼はあの二十七歳ばかりで惜しい一生を終

つた友人の言葉を岡の前で思ひ出した。

「青木君が左様言ひましたつけ。」この世にあるもので、一つとして過ぎ去らないものは無い、せめてその中で、誠を残したい、」ツて。僕は岡君にあの言葉をすゝめたいと思ふね。」

斯う岸本は岡の方を見て言つた。日の暮れる頃まで彼はその畫室で話した。その年の正月に巴里にある心易い連中だけが集まつて、葡萄酒を置き、モデルに歌はせ、皆子供のやうに楽しい一夕を送つた時の名残は、天井の下の壁から壁へ渡した色紙も古びたまゝで、まだ牧野の畫室に掛つて居た。やがて岸本は辭し去らうとした。牧野は町まで買物があると言つて、岡のことを心配しながら岸本に隨いて来た。

牧野は町に出てから言つた。

「今度といふ今度は流石の岡も力を落したやうですよ。」

「まあ、さんぐ、哭き給へとも言ふより外に仕方が無いね。」と岸本も一緒に日暮方の歩道を踏みながら、「あの人のことだから、いづれ何かその中から掴んで来るでせう。」

「僕の妹を假りに呉れると言はれた所で、僕だつて考へますよ。美術家同志といふものはあんまり内幕を知り過ぎて居て反つていけない。妹にまで同じ苦勞をさせやうとは思ひませんからね。」

斯様な言葉をかはしながら歩いて、往きかふ人の可成にあるバスツウルの通りで岸本は牧野に別れた。

マロニエの並木の芽も一息に延びさうな、何となく三月らしい日暮方であつた。七時の夕飯まではまだ間があつた。岸本は牧野の畫室で引出された心持や、若い時分の友達のことや、それに連れて一緒に胸に浮んで来るあの勝子のことなど思ひながら、底暖かい町の空氣の中を自分の下宿の方へ歸つて行つた。

『今だに盛岡のことなどをよく思ひ出すところを見ると、矢張あの人には女らしい好いところが有つたんだナ。』

道すがら岸本はそれを云つて見た。盛岡とは勝子の生れた郷里だ。傳馬町とか、西京とか、昔はよく市川や菅など、一緒になる度には其様符牒が出たものだ。

岸本が岡の落膽を思ひやる心は、やがて勝子の結婚を聞いた時の昔の自分の心だ。確かにそれは若い時の彼に取つて打撃であつた。見知らぬ新婚の夫婦などを町で見かけたばかりでも彼の若い心は傷んだ。しかし勝子の死を聞いたことは、それよりも更に大きな打撃であつた。彼女は結婚して一年ばかり経つた後、妊娠中のつわりとやらで、まだ女の若いさかりの年頃で亡くなつた。その話を

聞いた時の彼には何となくそこいらが黄色く見えて、往來の土まで叩前で持上るかのやうにすら感じられた。暗い月日がそれから續いた。多くの艱難も身に襲つて來た。彼は自分の沮喪した意氣を回復する迄に何程の長い月日を要したかを今だによく想ひ起すことが出来る。

仙臺の旅は斯うした彼の心を救つた。一生の清しい朝はあの古い靜かな東北の都會へ行つて始めて明けたやうな氣がした。しかし彼はもう以前の岸本では無かつた。それから後になつて彼が男女の煩ひから離れやう／＼としたのも、自分の方へ近づいて來る女性を避けやうとしたのも、そして自分獨りに生きやうとしたのも——すべては皆一生の中の最も感じ易く最も心の柔かな年頃に受けた苦い愛の經驗に根ざしたのであつた。

## 百二十七

『青木君が亡くなつてから、もう何年に成るだらう。』

四十いくつかの窓に燈火の望まれる産科病院の前に歸つてからも、岸本は自分の部屋の煖爐の上に置いてある洋燈の前に行つて、昔の友人に別れてから以來のことを辿つて見た。あの青木や、足立や、菅や、市川や、それから岡見兄弟などと一緒に踏出した時分の心持を辿つて見た。夕飯後に、下宿の女中が来て、大急ぎで部屋の窓を閉めて行つた。

『窓から燈火が見えると、警察でやかましくございますから。』  
と女中はそんな戦時らしい言葉を残して出て行つた。

岸本は黄色な布の蓋のはまつた古めかしい感じのする洋燈を自分の机の上に移した。その燈火に對つて居ると、彼の心は容易に妻を迎へる氣に成らなかつた結婚前の時へも行き、先輩の勧めで婚約した園子は曾て娘の時分に同じ學校を早く卒業したあの勝子から物を習つた人であつたことなどへも行き、初めて園子と一緒に小鳥の巢のやうな家を持つた楽しい新婚の當時へも行つた。

「父さん、私を信じて下さい……私を信じて下さい……」

あの園子の言葉、結婚して十二年の後に夫の腕に顔を埋めて泣いたあの園子の言葉は、岸本が妻から聞いた一番懐しみの籠つた忘れ難い言葉であつた。愛することを粗末にも考へまいとして、彼は苦い人生を経験した。彼は尖つたものを取返さうとして、反つて持つて居る者までも失つた。園子

が産後の出血で、殆ど子供等に別れの言葉を告げる暇もなく斯の世を去つた頃は、彼は唯茫然として女性といふものを見つめるやうな人になつてしまつた。もし彼がもつと世にいふ愛を信ずることが出来たなら、子供を控へての獨身といふやうな不自由な思ひもしなかつたであらう。親戚や友人の助言にも素直に耳を傾けて、後妻を迎へる氣にも成つたであらう。信の無い心——それが彼の墮ちて行つた深い深い淵であつた。失望に失望を重ねた結果であつた。そこから孤獨も生れた。退屈も生れた。女といふもの、考へ方なども實にそこから壊れて來た。

旅に來て、彼は姪からかすくの手紙を受取つた。いかに節子が彼女の小さな胸を展げて見せるやうな言葉を書いてよこさうとも、彼にはそれを信ずる心は持てなかつた。恐ろしい懐疑。

## 百二十八

ツクラテスの死をあらはした例の古い銅版畫の掛つた壁を後方にして、寢臺に近く岸本は腰掛け

た。そして自分の半生を思ひ續けた。

『情熱あるものといへども、眞にその情熱を寄すべき人に遇ふことは難い。』

これは岸本が春待つ旅の宿で故國の新聞紙への便りの端に書きつけて見た述懐の言葉であつた。夜の九時と言へば窓の外もひつそりとして、往來の人の靴音も稀にしか聞えないやうな戦時らしい空氣の中で、岸本は自分で書いた言葉を繰返して見た。漸く八歳の頃に既に激しい初恋を知つたほどの性分に生れつきながら、異性といふものを信ずることも出来なくなつてしまつたやうな半生の矛盾を考へて見た。

京都大學の高瀬が隣室に居た頃、柳博士等と連立つて訪ねて行つたあのペエル・ラセエズの墓地にあるアベラアルとエロイズの墓は、まだあり／＼と岸本の眼に残つて居た。あの名高い中世紀の僧侶は弟子であり情人である尼さんと終生變ることのない愛情をかはしたといふばかりでなく、死んだ後まで二人で枕を並べて、古い黒すんだ御堂の内に眠つて居た。そこにあるものは深い恍惚の世界の象徴だ。想像も及ばぬ男女の信頼の姿だ。『流石にアムウルの國だ』など、言つて高瀬は笑つたが、岸本にはあの墓が笑へなくなつて來た。假令アベラアルとエロイズの事蹟が一種の傳説であるといふにしても。岸本はあの四本の柱で支へられた、四つのアーチの何の方面から見られるカッ

リック風な御堂の中に、愛の涅槃のやうにして置いてあつた極く靜かな二人の寢像を思出した。あの古い御堂を圍繞く鐵柵の中には、秋海棠に似た草花が何かのしるしのやうにいちぢらしく咲き亂れて居たことを思出した。彼はその周圍を廻りに廻つて二つ横に並んだ男女のすがたを頭の方からも足の方からも眺めて、立ち去るに忍びない氣のしたことを思出した。まるでお伽話だ、と彼は眼に浮ぶ二人のことを言つて見た。しかし、お伽話の無い生活ほど、寂しい生活は無い。彼は最早自分の情熱を寄すべき人にも逢はず仕舞に、この世を歩いて行く旅人であらうかと自分の身を思つて見た。左様考へた時は寂しかつた。

其晩、岸本は遅く部屋の寢臺に上つた。枕に就く前にも、床の上に半ば身を起して居て、若い時分の友達のことや、自分の青年時代のことを思ひ出した。あの早くこの世を去つた青木に別れた時から數へると、やがて二十年近くも餘計に生き延びた自分の生涯を胸に浮べて見た。彼は唯持つて生れたまゝの幼い心でその日まで動いて來たと考へて居た。氣がついて見ると、どうやらその心も失はれかけて居た。

『左様だ。何よりも先づ自分は幼い心に立ち歸らねば成らない。』  
と言つて見た。旅に來てその晩ほど、彼は自分の若かつた日の心持に歸つて行つたことは無かつ



た。

## 百二十九

頭を岸本の心にも漸くある轉機が萌した。もし國の方へ歸らないことに方針を定め、全然知らない人の中へ踏込んで行かうとするには、斯の戦時に際して奈何いふ道が彼の前にあつたらう。今は十八歳から四十九歳迄の佛蘭西人が國難に赴いて居る。學藝に携はるものでも、ピョンクウルの書記のやうに自轉車隊附として働いて居るものがあり、ラベエの詩人のやうに輸送用の自動車に乗つて働いて居るものもある。もし義勇兵に加はつても知らない人の中へ行かうとするほどの心を有つならば、無理にも行く道が無いではなかつた。けれども岸本は是以上深入して、國の方に残して置いて來た子供等を苦めるには忍びなかつた。そこまで行つて、漸く彼には歸國の決心がついた。義雄兄からは成るべく早く歸つて來て呉れとした手紙が來るやうに成つた。岸本は兄に宛て、斯の

決心を書送つた。兎も角も來る十月の頃まで待つて呉れ、それまでには歸國の準備をしたいと思ふし、二度と出掛けて來るやうな機會が有らうとは一寸思はれないから、出來るだけ斯の旅を役に立てたいと思ふと書送つた。

『岸本さん、スエスを経由して日本の方へ歸ります。』

短い言葉に無量の思ひを籠めた繪葉書が千村教授の許から届いた。それを手にして見ると、岸本は旅の空で懇意になつたあの千村の聲を親しく聞く氣がした。千村は郵船會社の船で倫敦から歸東の旅に上る時にその便りを呉れたのであつた。亞米利加廻りで歸りたいといふ便りのあつた高瀬の出發も最早遠くはあるまいと思はれた。

岸本は部屋の窓へ行つて、千村が泊つた居て旅館を望んだ。窓の外にあるプラタアヌの並木はまだまだ冬枯そのまゝであつた。その疎な枝と枝の間を通して、千村の舊い部屋の窓や、その下の方の珈琲店の暖簾や、食事の度に千村が通つて來た町の道路などをよく見ることが出來た。あの人達が去つた後でもまだ續いて居る歐羅巴の戦争、獨り見る巴里の三月の日あたり、それらの耳目に觸れるものから起つて來る感覺は一層岸本の心を居残る旅らしくした。彼はその窓際に立つて遠く歸つて行く旅の人を見送らうとするかのやうに、千村の航海を想像した。彼の心は神戸から自分を乗せ

て駛つて来た佛蘭西船へ行き、あの甲板の上から望んで来た地中海へ行き、紅海へ行き、亞刺比亞海へ行つた。恐ろしい永遠の眞夏を見るやうな印度洋の上へも行つた。コロンボ、新嘉坡、其の他東洋の港々の方へも行つた。彼は往きと還りの船旅を思ひ比べ、歐羅巴を見た眼でもう一度殖民地を見て行く時の千村を想像し、漠然とした不安や驚奇やは減する迄も、より豊かな旅の感覺の働きは反つて還りの航海の方に多からうと想像した。彼はまた千村が再び母國を見得るの日を思ひやつて、二年前一切を捨てる思ひをして遠く波の上を急いで来た自分の身にも、それと同じやうな日がいづれは来るやうに成つたことを不思議にさへ思つた。

## 百三十

溫暖い雨がポツ／＼やつて来るやうに成つた。来るか来るかと思つて斯の雨を待たびて居た心地はなかつた。五箇月も前から——旅の冬籠りの間——岸本は唯そればかりを待つて居たやうなもので

あつた。リモオジュの旅以來、彼の周圍には何が有つたらう。佛蘭西國境の山地寄りの方では壘壕が深く積雪のために埋められたとか、戦線に立つものゝ霜焼を救ふために毛布を募集するとか、左様した勞苦を思ひやる市民の心がその日まで續いて来た。彼の耳にする話は一つとして戦争の慘苦を語らないものは無かつた。開戦以來、五六十万の佛蘭西人は既に死んで居るとの話もあつた。斯の戦争が終る頃には満足な身體で巴里へ歸つて来るものは少からうとの話もあつた。彼が町で行き遇ふ留守居の子供でも婦女でも老人でも、やがて来る春を待たびて居ないものは無かつた。寒苦、寒苦——斯の避け難い戦争の悩みの中で、世界の苦の中で、草木の再生がやがて自分等の再生であることを願つて居ないものは殆ど無いかのやうに見えた。

毎日のやうに岸本は部屋の壁に掛る佛蘭西の曆の前へ行つた。日も餘程長くなつて来た。空も明るくなつて来た。最早煖爐なしに暮すことも出来た。一雨毎に彼は春の來るのを感じた。漸くマロニエの芽もふくらんで来るやうに成つた。彼はあらゆる草木が復活る中で、やがて来る若葉の世界を待つのを楽しみにした。白い蠟燭を立てたやうなマロニエの花が若葉の間に咲いて、冷い硝子窓からも、石の壁からも、春の焰が流れて来るのは最早遠くは無からうと思はれた。

そよ／＼と吹いて来る夕方の南風に乗つて獨逸の飛行船までがやつて来るやうに成つた。ある佛蘭

西の記者の言草ではないが、あの『空中の海賊』が巴里の市中と市外とに爆弾を落して行つた最初の夜は、岸本はその騒ぎも知らずに熟睡して居たくらゐであつた。翌晩、けたましい物音に彼は床の上で眼を覺した。喇叭を鳴して飛ぶ警戒の自動車が深夜の町々を駆け巡つた。復た彼は敵の飛行船の近づいたことを知つた。急いで部屋を出て見ると、臺所には震へながら祈禱をあげて居る下宿の主婦がある。屋外には暗い空を仰いで稻妻のやうな探海燈の光を望む町の人達がある。斯うした巴里に身を置いても、彼はそれほど恐ろしくも思はない迄に戦時の空氣に慣れて來た。『燕のかはりに飛行船が飛んで來ました。』そんなことを云つて下宿の人達を苦笑ひさせた位であつた。それよりも彼は斯うした巴里の狀況が電報で傳へられて、遠く國の方に居る親戚や知人を心配させることを氣遣つた。

岸本は旅の窓で、自分を待暮して居る泉太や繁のことを思ひ、義雄兄宛に知らせてやつた歸國の時間が子供等の耳に入る日のことを想つて見た。それから、もう一度あの不幸な節子を見る日の來ることをも想つて見た。それを考へると思はず深い溜息が出た。

眼前の戦争から、岸本はその中に動いて居るいろ／＼な人の心を讀むやうに成つた。丁度あの『ア  
ンナ・カレニナ』の終りに書いてあるヴォンスキイの出發のやうにして、進んで戦地に赴き、自ら救は

うとする若い佛蘭西人のあることを彼は想像するに難くなかつた。戦争を遊戯視し、まるで申談でも爲に行く人のやうにして親しい家族や友人に停車場まで見送られたといふプロツスの教授の子息さんのことも彼は聞いて知つて居た。その心を思ふと、實に可傷しかつた。死の中から持來す回生の力——それは彼の周圍にある人達の願ひであるばかりでなく、また彼自身の熱い望みであつた。春が待たれた。

後

篇

後  
篇

三年近い月日が異郷の旅の間に過ぎた。遠い島にでも流された人のやうに自分の境涯をよく譬へて見た岸本は、自分で自分の手錠を解き腰繩を解く思ひをして、佗しい自責の生活から離れやうとして居た。

歸國の日も近づいて来た。降誕祭の前には既に來る筈であつたその日も半年ほど延びて、旅で迎へる三度目のあの祭と、翌年の正月とをも、岸本は巴里の下宿の方で送つた。あの佛國汽船でマルセエユの港に辿り着き、初めて佛蘭西の土を踏んで見た頃から數へると、最早足掛四年にも成る。國を出た當時の彼の決心から言へば、全く後方を振返つて見ないで、知らない土地へ行き、知らない人

の中へ入り、そして心の悲哀を忘れやうとしたのであつて、生きて還れる日のあるか奈何かと云ふやうなことは全く考へられもしなかつた。ひよつとすると神戸の港を見納めだ。左様思つて出て来た國の方へもう一度足を向けやうとする事は、いかにもおめ／＼と歸て行くやうな氣を起させる。けれども戦時以來旅の方法も盡きて来て、この上は滞在は人に心配を掛けるばかりであつたし、國の方に残して置いて来た子供のこともひどく心に掛つた。それに抑制と忍耐との三年近い苦行(?)をまがりなりにも守りつゞけて来たことは多少なりとも彼の旅の心を軽くした。彼は出獄の日を待てる囚人のやうにして、もう一度國の方に自分の子供等を見得るの日を待受けた。そろ／＼遠い旅支度をも心掛けねば成らなかつた。靴に入れて國から持つて来た和服の中には、部屋衣としてよく取出して着た羽織や着物がある。その中には亡くなつてからも何年になるかと思はれるほどの妻の園子の形見として残つた一枚の下着もある。その下着の紺絹のついた裏などはすっかり擦切れてしまつた。巴里に滞在中、東京の元園町の友人の家からわざ／＼送り届けて呉れた襦袢は随分役に立つて、長い冬の夜などは洋服の上にそれを重ね寛濶な和服の着心地を樂みながら机に對つたものであつたが、その丈夫な襦袢ですら裾から白い綿が見えるほどに成つた。秋の末から春のはじめへかけて毎年のやうに身に着けた脊廣の服は國の方へ持つて行かれないほど着古してしまつ

た。彼は赤い着物でも脱ぎ捨ててやうに、その古い脊廣を脱ぎ捨てやうとして居た。旅の末には、下宿の部屋の汚れも眼についた。彼はその長く住慣れた部屋にも別れを告げやうとして居た。ある時は眼に見えない牢屋のやうな思ひをしたこともある部屋の石の壁にも。ある時は我と我身を抱き締めるやうにして、旅の前途を思ひ煩ひながら眺め入つたこともある部屋の硝子窓にも。

『還るのを赦されるのだ。』

と彼は自分で自分の歸國のことを言つて見た。

## 二

歸支度をする頃の岸本には、何となく國も遠くなつてしまつた。彼は三年近くも見ない自分の子供等の急激な成長を何程のものともはつきり想像することすら出来なかつた。彼の眼にあるは舊の新橋停車場で別れて来たまゝの何時までも同じやうに幼い子供等の姿に過ぎなかつた。歐羅巴の戦争

はまだ續いて居て、下宿と同番地の家番の亭主などは出征したぎり、稀に戦地の方から休暇を貰つて歸つて来て顔を見せるくらゐのものであつたが、そこに留守居する家番のかみさんの子供等は驚くほど大きく成つた。階段の昇降に、岸本はそこいらに遊び戯れて居る佛蘭西の子供等の側へよく行つた。皆が幾歳になるかといふことをよく尋ねた。黒い上衣に短い半ズボンを穿いて脛をあらはした佛蘭西風の子供の風俗は、國の方で見るとは似てもにつかないやうなものばかりだ。でも岸本は側へ来る子供の青い眸などに見入つて、國の方に自分を待つ泉太や繁の成長を想像した。これから彼が歸つて行つて見る泉太はもう十二歳、繁の方は十歳にも成る。

國を出る時子供を頼んで置いて来た節子のことも、泉太や繁の成長を想像すると同時に、岸本の胸に浮んで来た。下宿の主婦の姪といふ人は、可哀さうにあの人の婚約して置いた末頼母しい佛蘭西人も戦地の方へ行つて死んだとやらで、今ではリモオジユの田舎の方に歸つて居るがあの主婦の姪が丁度節子と同年代だ。彼女は氣味の悪いほど赤く縮れた髪をもつた、嚴整な體格の女で、リモオジユから主婦の手傳ひに巴里へ出て来たばかりの頃はいかにも田舎臭い娘であつたが、その人がもう一度田舎の方へ歸つて行く頃には見違へるほど巴里の風俗を學んで、働き好きな娘らしい手などにも流石に若い女のさかりを思はせるものがあつた。脊は主婦よりも高かつた。この人を通して岸本

はよく自分の姪の成長を想像した。若い娘のやうにばかり思つて居た節子がもう二十四だ。

節子からの便りは岸本が下宿を引揚げる前に届いた。彼女はつゝまじやかな調子で、叔父さんのために歸國の旅の無事を祈るといふことや、留守宅の子供も極く丈夫で叔父さんの歸りを待たびて居るといふことや、しかし叔父さんが遠からず國に歸つてこの留守宅の様子を見たら奈何思うであらうか、それが氣遣はれるといふことなどを書いてよこした。

『力強い御留守居も出来ないで、ほんとに御免なさいね。』

こんな言葉もその中に書いてあつた。

最早一頃のやうに恐ろしく神経の尖つた、可傷しい調子は彼女の手紙の中に無かつた。殊にその最近の便りは、旅に来て岸本が彼女から受取つたかずくの手紙の中でも一番心易く讀めるやうな、わだかまりの無い調子で書いてあつた。

『節ちゃんも斯ういふ調子で居て呉れると難有い。』

思はず岸本はそれを言つて見た。同時に、その年齢までまだ身もかため得ずにぶら／＼して居るらしい彼女の事が、何となく無言な力をもつて岸本の胸に迫つて来た。

## 三

國の方で持上る節子の縁談に就いては、岸本は全くそれを知らないでも無かつた。東京の義雄兄からは、まだそんな話のきまらない前に、一度巴里へ知らせてよこしたことも有つた。岸本は其便りを読んだ時に、節子には早く身を堅めさせたいといふあの兄の焦つた心を知り、先方の望み手といふは毎月六七十圓の収入のある勤め人であることを知り、その人が徳川時代に名高かつたある學者の子孫にあたるといふことをも知つた。兄はまた、その縁談の纏まることを希望して居るとも書いてよこした。其後、兄からは何の沙汰もなく、節子自身からの折々の便りの中にも何もその事に就いて書いて無いところを見ると、恐らくその話は立消になつたものであらうと思はれたが——

斯うした消息を胸に浮べて見る度に、節子が人知れず産み落した子供の事、切開の手術を受けたといふ彼女の乳房の事、何事も知らない人が一寸見たぐらゐでは分らないまでに成つたといふ彼

女の身體のこと——否でも應でも岸本の心はそれらの打消しがたい隠れた秘密に觸れない譯には行かなかつた。これから國をさして歸つて行かうとする彼は、過ぐる三年近くの間自分の顔をそむけやうとし、心の眼を塞がうとし、どうかして旅に紛れて忘れやう／＼とした、その恐しいものに面とむかはねば成らない。彼は寫眞の中で見てさへマブしいやうな義雄兄の前に自分を持つて行つて見た。一語世話を頼むとも言へずに子供を置いて逃出して來た嫂の前に自分を持つて行つて見た。何事も知らずに住慣れた郷里を離れて嫂と共に上京した祖母さんの前に自分を持つて行つて見た。それから、それらの人達の集つて居る中で、もう一度歸つて行つて逢ふ節子の前にも自分を持つて行つて見た。

岸本は嘆息して、この歸國の容易でないことを想つた。しかし、もう一度夜明を待受けるやうな心をもつて、彼はそれらの人達の方に向はうとした。せめてあの嫂だけには一切を打明けやう、そしてこれまでのことを詫びやうと考へた。不幸な節子のためにも自分の力に出来るだけのことをしやう、彼女の縁談の事にも骨折らうと考へた。岸本に取つては、この歸りの旅はすくなからぬ精神の勇氣を要することばかりであつた。



## 四

戦争の影響は岸本が泊つて居るやうな下宿にまで及んで、そこから陸軍病院へ通つて居た眼科醫の客も去り、家庭教師の客も去り、終には客は岸本一人になつてしまつた。食堂も極く淋しかつた。諸物價騰貴でヤリキレないところばしこぼして居た主婦が結局そこを疊んで戦争の終る頃までリモオジユの田舎へでも引込みたいと言出したので、それを機會に岸本は長く住慣れた下宿を去らうとした。そして、何かにつけ旅立に便利なソルボンヌ附近の旅館の方に移らうとした。

まだ岸本は巴里を引揚げる日取も定めることは出来なかつた。遠い旅のことで、國の方から來る手紙を待つだけでも可成の日數を要した。旅行も困難な時であつたから、途中のこともいろ／＼問合せて見ねば成らなかつた。それによつて歸國の旅の方針を定めねば成らなかつた。遠く喜望峰を經由して、印度洋から東洋の港々を歸つて行く長い般海の旅を擇ぼうか。それとも多少の危険を冒し、

途次厳しい檢閲で旅の手帳を取上げられるくらゐのことは覺悟しても、英吉利から北海を越え、日頃見たいと思ふ北歐羅巴の方を廻つて、西比利亞を通つて歸つて行く汽車旅を擇ぼうか。遠い露領の果の方には叔父の歸りを待受けると言つてよこした輝子(節子の姉)夫婦も住んで居た。いづれにしても左様やす／＼と歸つて行かれる時ではなかつた。岸本はその二つの中の何方の道を擇ぼうかといふことにさへ思ひ迷つた。

巴里で岸本が懇意になつた美術家仲間の中でも、小竹は既に國へ歸り、岡はしばらくリオンの方へ行つて居た。例のパスツウルに近い畫室には岸本と一緒に巴里を引揚げやうと約束した牧野が居て、この畫家は歸りの旅の打合せかた／＼よく岸本の下宿へ顔を見せた。

『國の方では奈何いふものが僕等を待つて居て呉れますかサ。』牧野を見る度に、岸本はそれを言はずには居られなかつた。

「留守宅でも困つて居るんぢやないかと思ふんです。歸つて行つて見たら、第一その心配をしなけりや成るまいかと思ふんです。』

斯う岸本は日頃めつたに牧野の前で言出したことも無い自分の留守宅の方の噂をすると、骨の折れる旅を續けて來た牧野はそれを聞いて點頭いて見せた。

『二度と斯ういふ旅をしやうとは思ひませんね。』  
牧野を前に置いて、岸本はつくづく辛いことの多かつた過ぐる三年近くの月日を思ひ出したやうに嘆息した。

それが下宿の部屋で牧野を見る最終の時であつた。岸本は旅館の方へ行つてから、ほんとうに旅支度を調べたいと思つた。いよく頼んで置いた辻馬車が町の並木の側に來て、假に纏めた荷物を送出すといふ前に、岸本は苦い晝寢の場所であつた部屋の寢臺の側へも行き、冷い壁にかゝる銅板畫のソクラテスの額の下へも行き、置戸棚の扉に張りつけてある大きな姿見の前へも行つた。その部屋を去る頃の彼の髪は自分ながら驚くほど白くなつて居た。

## 五

最早岸本は巴里にちつとして居る在留者でなくして歸國の途に上りかけて居る旅行者であつた。

ソルボンヌの大學に近い旅館に移つてから、毎日のやうに彼は用達に出歩いた。これから倫敦へ渡らうとする手続きを済ますためには、巴里の警察署へも行き、外務省へも行き、英吉利の領事館へも行つた。國の方の親しい人達への土産として、こゝろざしばかりの品々を探すためには、古いサン・ゼルマンの並木街などを歩き廻つた。丁度セルヴァンテスの三百年祭も來て居て、あの『ドン・キイ・ホオテ』を書いた西班牙の名高い作者を記念するための新刊の著述などが本屋の店頭を飾つて居た。學藝に心を寄せる岸本のやうな男に取つては、左様した新刊書の眼につく飾窓の前を通りながら、もう黄ばんだ若葉の延びて來て居るマロニエの並木の間を往つたり來たりした時には餘計に旅らしい心を深くしたのであつた。別離を告げるために、彼は日頃懇意にした佛蘭西人の家々をも訪ねて見た。何の家を叩いても戦時らしい心持を起させない所は無かつた。ピョンクウルの書記の家へ行つて見た。そこでは最長老婦人の姿は見えず、細君も留守で、二人の子供が家婢を相手に淋しさうにして居た。プロツスの老教授の家へ行つて見た、そこでは戦地の方へ行つて居る若い子息の一人が負傷したとやらで、教授夫婦は見舞のために出掛けて、家婢が心配顔に留守番をして居た。

いよく佛蘭西の旅も終に近いことを思はせるやうな夕方が來た。岸本は旅館の三階の部屋に獨り

籠つて古い歴史のあるソルボンヌの禮拜堂の方から石造の町の建築物の間を傳はつて来る鐘の音を聞きながら、東京の留守宅宛の手紙を書いた。

かねて岸本には斯の旅を終る頃に爲し遂げたいと考へて置いたことが有つた。巴里を引揚げる頃が來たら自分の髭を剃落してしまはう、そして歸國の途に上らうと考へて居た。不思議と言へば不思議、突飛と言へば突飛な考へではあつたが、心に編笠を冠る思ひをして國を出て來た岸本には別にそれが不思議でもなく突飛でもなかつた。何か彼は現在の自分の心を實際に自分の身に現はしたかつた。

しばらく岸本は部屋の寢臺に腰掛けて自分で自分の爲ることを制止めやうとして見た。しかし、かねての思ひを遂げる時が來て居た。そこで彼は髭を落しに掛つた。部屋には壁に寄せて造りつけた石の洗面臺がある。その上に姿見がある。彼はその前に立つて、自分で剃刀を執つた。惜氣もなく剃刀を動かす度に、もう幾年となく鼻の下に蓄へて置いたやつが曲めた彼の顔を滑り落ちた。好くも切れない剃刀で、彼は唇の周圍の腫れ上るほど力を入れて剃つた。

曾て國の方で人を救へたこともある自分の姿のかはりに、ずつと以前の書生時代にでも歸つて行つたやうな自分の姿がそこへ顯れて來た。最後に孝見の方へ行つて剃り立ての顔を眺めた時、今まで

髭に隠れて居た鼻の下あたりが青々として見えた。ところ／＼からは血も滲み出た。

岸本の顔はまるで變つてしまつた。しかし彼はさも心地よげに、兩手で口の周圍を撫で廻した。斯の顔でこそ、もう一度國の方へ歸つて行つて節子の親達にも逢へると考へた。

## 六

「オヤ、大層さつぱりとなさいましたね。」

斯ういふ意味のことを佛蘭西の言葉で言つて、誰よりも先に岸本の顔を見つけたものは、翌朝部屋の掃除に入つて來た旅館の給仕であつた。

逢ふ人毎に岸本を見て噴飯さないものは無かつた。巴里の狭い在留者仲間で、外國生活の無聊に苦しんで居るやうな人達は、「村」での出來事か何かのやうにして、有るべきところに有るものが有つた以前の岸本の顔の方が餘程好かつたと、彼のために突飛な行ひを惜んで呉れた。別れを兼ねての

骨牌の會、珈琲店での小さな集りなぞがある度に、岸本は行く先で自分の顔の評を受けた。「髭のあつた時分の顔には、なつかしみが有つた。何だか髭を取つてしまつたら、凄味が出て來た。」と言つて笑ふものがあつた。「まあ奈何なすつたんですか。ほんとに、吃驚してしまひましたよ。そんなことを言つちや悪いけれども、岸本さんは氣でも狂つたんぢやないかと左様思ひましたよ。」と言ふものもあつた。「惜しいことをした。矢張君には髭が有つた方が好い。國へ歸るまでには是非生して行き給へ。」と言つて忠告して呉れる人もあつた。

「岸本さん、髭が無くなりましたね。何かそれには意味が有るんですか。」

同じ旅館に泊つて居る留學生が小旅行から戻つて來て、それを岸本に尋ねた。この人は慶應出で岸本から見るとずつと年少ではあつたが、何かにつけて彼の力になつて呉れた。

「昔、岸本さんは坊主にお成んなすつたとか——」と復たその留學生が男らしい眉をあげて、岸本の方を強く見て言つた。「何かそれと同じやうな意味でもあるんですかね。」

さすがに、この人の言ふことは鋭かつた。岸本は返事に窮つて、

「自分の髪は白くなつたのは鏡にでも向はなければ分りませんが髭の白いのは見えて、心細くて仕様がありません。もう一度書生の昔に復らう。さう思つて、君の留守に剃つてしまひましたよ——」

これ以上のことは岸本には言へなかつた。

さかんな若葉の緑が何時の間にか古めかしく黒ずんだ石造の町々の間へ青々とした生氣をそゞぎ入れるやうにやつて來た。岸本は獨りで旅館を出て、大學の建築物の側をある並木街へと取り、オステルリツツの橋の畔まで歩いて行つた。すこし曇つた日で、四月らしい明るい日あたりを見ることは出來なかつたけれども、それがセエヌ河に行つて見る最終の時であらうと思はれた。岸本が初めて巴里に入つたのは足掛四年前の四月であつたから、丁度巴里を發つ前になつてその時の若葉の記憶が復た彼の心に歸つて來た。彼は今、石橋の下の方を渦巻き流れて行く清いセエヌの水を見る眼で遅くも二月か二月半ばかりの後はあの舊い馴染の隅田川を見ることが出来るかと考へた時は、まるで嘘のやうな氣がした。